神の熱心な崇拜ではなく、むしろ高等神道が表はして居る物、即ち忠、孝、父母教師長上に對して從順なる事、祖先尊敬を眞面目に守るのである。即ち神道は信仰以上を意味する。

私が始めて、その特權を許された最初の西洋人として、杵築の大社の前に立つた時、崇高な念と共にかくの如き思想が私に浮んだ。『これは一人種の祖先の社である、これは過去に對するその國民の尊敬の代表的中心である』かくて私も亦この人民の祖先の記念に尊敬を表した。

私が當時感じたと同じく、教育をうけて一般信仰の標準以上に上つた明治時代の聰明な學生も亦、感ずるのである。そして神道は又彼等に取つて（彼等がその理由を問ふと否とに關せず）家族間の凡ての道德を代表し、又生命と雖も、義務のためには、その義務を果す一道具としての外何の價値もなくなる程、拔くべからざるやうに固有となつて居る忠義の精神を代表して居る。未だその東洋はその高尙なる方の道德の源を理窟に訴へて解釋する必要はない。西洋種族に於て小兒が鍵板を打つだけの力と彈力が小さい指先にてきれば、早速複雜な樂器を彈ずる事のできる程、音樂的知覺の發達して居る事を想像せよ。生得の宗教や本能的の義務の、出雲に於て如何なる意味を有せるかは、かかる比喩によつて始めて分るであらう。

西洋に於て、迷信的信仰から急にさめた自然の反動として起つた最も普通の突飛な破壞的な方の懷疑說は、私の學生のうちに痕跡も認むる事はできない。しかし、かかる感情は外では（殊に東京では）大學生の間などに見出されよう、その一人の大學生は莊嚴な鐘のひびきを聞いて私の友人に叫んだ。『十九世紀に於て未だこんな鐘などをきかねばならぬと云ふのは恥ではないか』

しかし、物ずきな旅行者のためにこの機會を利用して云ふて置く、新しい教育をうけた日本の紳士に佛教の事を說くのは、知識のために信條や儀式を超越して居る人々に本國で基督教を說くと同じく感心せぬ事である。勿論宗教や傳說の研究をする外人を喜んで助けてくれる日本の學者はある、しかしこれ等の專門家でも『世界見物』的種類のつまらぬ好奇心を滿足させるやうな事はない。又云ふて置く、一般人民の宗教的思想や迷信を學ばうと望む外人は敎育ある人々からでなく、必ず人民自身から學ばねばならない。

各級に二三人づつある私の好きな學生のうちで、一番誰が好きとは云へない。銘々それ

ぞれの特長がある。しかしこれから書かうとする人々、石原、大谷正信、小豆澤、横木、志田[註一]の姓名や容貌は最も長く自分の記憶にはつきり殘るてあらうと思ふ。

石原は士族て人物が非常にしつかりして居るので級中に甚だ勢力がある。外の人々と比べるといくらか粗暴な無遠慮な風があるが正直な男らしい處があるので人好きがする。何ても思ふ事は皆云つてしまう、そして思ふ通りの調子て云ふので時々相手を迷惑させる程てある。たとへば先生の説明の仕方が悪いから、もつと分るやうに云つて下さいと平氣て云ふ。私も時々攻撃されたが、石原が悪いと思つた事はなかつた。私共は互に好いて居る。彼はよく私に花を持つて來てくれる。

或日、梅花の小枝を二つ持つて來てくれた時、私に云つた。

『先生は天長節の式に御眞影に敬禮をなさいましたのを見ました。先生は先の先生と違ひます』

『どうして』

『先の先生は私共を野蠻人だと云ひました』

『何故』

『その先生は神様（その人の神様）の外に尊い物はない、そして外の物を尊ぶ者は卑し

い無學の人民に過ぎないと申しました』

『どこの國の人てす』

『耶蘇教の僧侶て、英國の臣民だと申しました』

『しかし英國臣民なら女王陛下を尊敬しなければならない。英國領事の事務室に入るにも脫帽しなければならない』

『本國てどんな事をなさるか知りません。けれども仰つた事は私の今申した通りてした。ところて私共は陛下を尊敬しなければならないと思ひます。それを本分と思ひます。陛下のために身命を捧げる事のてきるのを光榮[註一]と思ひます。しかし先の先生は只野蠻人、無智蒙昧な野蠻人だと申しました。先生如何御考てすか』

『君、私はその人自身こそ野蠻人、野卑な無學な分らずやの野蠻人だと思ふ。陛下を尊敬し、陛下の法律に從ひ、日本のために陛下が召し給ふ時いつても身命をなげうつ覺悟を有するのは君等の最高の義務だと思ふ。たとへ君自らが外の人々の信ずる事を悉く信じられなくとも、祖先の神々や國家の宗教を尊敬するのが君等の義務だと思ふ。それから誰が云つたにしても、君から今聞いたやうな野卑な惡口に對して憤慨するのは、國家のため又陛下のため君達のつとめだと思ふ』

註一。私は色々の級に、作文の題として『最も大切な願』と云ふ問を出した。殆んど文句まで一様に『天皇陛下のために死ぬ事と答へたのが約二割あつた。しかしあとの大部分にはネルソンの光榮にあやかりたい、或は英雄的行動犧牲的精神によつて日本を第一等の偉大なる國民にしたいと云ふ望みが表はれてゐた。この感心な精神が日本の青年の心に生きて居る間は日本はその前途に於て恐るべき物はない。

(e) P.114

正信は滅多に來ないが來る時はいつても獨りで來る。細つそりした、女性的な顏形ちの美少年で、控へ目な、全く落着いた樣子て、上品である。大分眞面目な方て笑顏も餘り見せない。聲をあげて笑ふのを私は聞いた事はない。級の一番になつて、餘りひどく努力もしないてそこに居るやうてある。植物を採集したり分類したりしてひまの大部分を植物學に捧げて居る。彼の家族の男子は皆さうだが彼も音樂家てある。西洋ては見られも聞かれもしない種々の樂器を奏する、そのうちには大理石の笛もある、象牙の笛もある、不思議な形と音色の竹の笛もある、それから笙と云ふ鋭い支那の樂器もある、銀の枠に入れた色遣つた長さの管が十七もある一種の吹く樂器である。彼は始めて大鼓、小鼓、笛、篳篥(ヒチリキ)、それから胴の細長い鉦(ジム)のやうな恰好の、小さい鼓の羯鼓(ソツコ)と云ふ物を、寺院の音樂て使用する事を私に說明した。大きな佛式のお祭りの時正信と正信の父及び弟等は寺院の樂人となつて皇鑾(ワウジヤウ)と拔頭(バツトウ)と云ふ變つた音樂を奏する。この趣味もないが聞くに隨つて分つて來る、そして一種特別の不思議な興味のある事が分る。正信の來るのはいつても私の興味のありさうな佛教か神道のお祭りに參列するやうに招きに來るのてある。

小豆澤と正信は全然別人種かと人が想像する程この二人は似たところが殆んどない。小豆澤は大きい骨つぽい、一見愚なやうな男てある、顏は奇妙に北アメリカ印度人(紅色人種)に似て居る。家は富んてゐない、只一つ書物を買ふ事を除いては金のかかる娛樂をする事は殆んどできない。その書物を買ふためにも、彼は金を得るためにひまな時に働くのてある。彼は本當の衣魚(シミ)てある、生れつきの詮索家てある。古文書の採集家てある、古い寫本や繪本が反古同樣に賣られる寺町やその他の古色蒼然たる古道具屋古本屋を一軒々々徘徊して居る。彼は濫讀家てある、絕えず書物を借りる、そして最も價値があると思ふところを寫しての、そして一番好きなのは世界各國に於ける哲學及び哲學者の歷史てある。西洋哲學史要略と云ふやうなものは色々讀んだ、それから近世哲學に關するもので、日本語に譯してある物は、スペンサーの原理も加へて、皆讀んだ。私はリユイス(叢者註三)とジョン・フイスクを紹介してやつた、英語て哲學を勉强するのは一通りの骨折てな

かつたが兩方とも充分に分つた。幸にして彼は非常に强健であるから、どんなに勉强しても身體が惡くなる心配はない。神經は針金のやうに强靱である。しかも彼は全く禁慾家である。客の前に茶と菓子を出すのが日本の習慣であるので、私はいつでもその茶と菓子、殊に菓子は杵築でできる特に上等品で、學生が皆好きであるのを、いつも用意して居る。小豆澤だけはどんな種類の菓子も喰べようともしない、そして云ふ『私は末子ですから、直に獨立の生活をしなければなりません。私は大に艱難をしなければならないでせう。それてすから今から菓子が好きになつてゐたらかへつて後に困りませう』小豆澤は人間學は中々修めて居る。生れつき注意深いのである、そして不思議な方法で松江にある凡ての人の歷史を知つて居る。彼は古い破れた錦繪を持つて來て校長が十四年前公開演說で主張した意見と今日の校長の意見とが全然正反對てある事を證明した。その事について校長に尋ねると校長は笑つて『勿論それは小豆澤です。しかし小豆澤の方が正しいのです、私は當時極めて若かつたのです』と云つた。そして私は小豆澤がいつか若い時があつたらうかと不思議に思ふのである。

小豆澤の親友橫木は滅多に來ない、いつてもうちて勉强して居るからてある。彼はいつてもその級（三年級）の一番で、小豆澤は四番てある。彼等二人の交際の始まりの小豆澤

の話はかうてある『私は橫木が來た時じつと見てゐました、そして餘りしやべらないて、早足て步いて、人の目の處を眞直に見るのを見ました。そこて私はこの男の特色のある事を知りました。私は特色ある人間と交るのが好きてす』小豆澤の云ふ事は全く本當てある、橫木は至極溫和な外貌の下に非常に强い性格を持つて居る。彼は大工の子てある、そして兩親はその子を中學校に出す事はてきなかつた。しかし小學校て拔群の成績を示したので、富有な人[註二]が感心して學費を出さうと云ひ出した。彼は今學校の花てある。彼は殊に長い目の著しく平和な顏と愉快さうな微笑をして居る。教場てはいつても敏い質問をする、その質問が餘り奇拔なので何と答へてよいか私は時々非常に困る事がある、そしてその說明が腑に落ちないうちは決して質問を止めない。自分が正しいと思つたら仲間の意見などは構はない。或時全級が物理の新教師の講義に出る事を拒んだ時、橫木だけは彼等と同一の行動を取る事を拒んだ、先生は理想通りの先生てなくともすぐ止めて貰へさうにはない、又どんなに無經驗ても眞面目に全力をつくして居る先生に不快な念を抱かせる正當の理由がないと論じたのてあつた。小豆澤は最後に彼に贊成した。この二人だけ講義に出席したので、終に殘りの學生も二週間の後には橫木の意見の正しい事をさとるに到つた。又或時基督敎の宣敎師が卑しい手段を弄して人に改宗を施さうとした時、橫木は大膽にその宣敎師

の宅に赴いて彼の仕業の不徳義なる事について彼と論じ、遂に彼を沈默さするに到つた。彼の仲間のうちで彼の議論の巧みな事を賞めるものがあつた。彼は答へて『僕は巧みな事はない、道徳上不正な事に對して議論するのに何にも巧みである必要はない。こちらが道徳上正しい事が充分分つてゐさへすればよい』少くともこれは小豆澤が横木の云つた事を翻譯して私にきかせた物に近いのである。

註二。この種の美はしい義俠的行動は日本では珍らしくはない。

もう一人の訪問者の志田は餘程虚弱な神經質の子供で、心のうちは藝術でみちて居る。繪畫は餘程上手である、古への日本の大家の立派な繪本を一部もつて居る。最後に來た時には私に見せるために珍らしい物——天女、幽靈、などの版畫を持つて來た。私がこの美しい蒼白い顏と物凄い程細い指を見た時彼も又やがて小さい靈になりはしないかと彼のために恐れずには居られなかつた。

今私は二ヶ月以上も彼に遇はない。彼は餘程惡い、醫師が談話を禁じた程肺が惡いのである。しかし小豆澤は彼を訪ふて來て日本の手紙のこの翻譯を持つて來てくれる、その手紙は病氣の少年が書いて寢床の上の壁に糊てはつて置いた物である。

「わが腦髓足下、足下は我を支配せり。足下の知れる如く今や我、自らを支配する事能はず。我願ふ、速に我を回復せしめよ。我をして萬事醫師の命に服さしめよ。

明治二十四年、十一月九日。

志田の病軀より志田の腦髓（譯者註五）へ」

譯者註一。醫學博士石原喜太郎、大谷正信、小豆澤は工兵大佐藤崎八三郎、横木富三郎、志田昌吉。

譯者註二。熊本にてこの原書の校正を見せられし時、この比べやうはひどいと藤崎氏（小豆澤）が抗議した時、決して侮辱ではない、アメリカインド人は世界に於て最も勇敢なる人種であると云つてヘルンに慰められた。藤崎大佐の談話。

譯者註三。Lewes は George Henry Lewes (1817—1878) 有名なる女流小說家 George Eliot の夫、「列傳體哲學史」「ゲーテ傳」等著作多し。John Fiske (1842—1901) アメリカの人、著作多し、進化論を基としたる著述もあり「The Idea of God」「The Destiny of Man」等あり。

譯者註四。西田千太郎氏は當時校長心得の如き地位にありし故、西田氏の事。

譯者註五。病軀、腦髓等の譯は志田の原文を知つて居られる小豆澤氏（藤崎大佐）の敎示による。

一九

一八九一、九月四日

長い暑中休暇は終り、新學年は始まる。卒業して松江を永久に去つた者も隨分變つて居る。教へた生徒のうちて死んだ者もある。又教師て變つた者もある、代りの人々も來て居る。そして新校長が來て居る。

又なつかしい知事も行かれた、東北の寒い新潟に轉任された。榮轉てあつた。しかしこの人は出雲を治めた事七年てあつた、そして誰てもこの知事を愛したが、父のやうに思ふてゐた學生等は特に愛してゐた。松江市の住民が別れのために河に集つた。汽船に乘るために通る道筋の町々、橋、波止場、屋根までに人々が群をなして見納めに知事の顔を見ようとあせつた。泣いて居る人が數千あつた。汽船が波止場を離れる時、アアアアアアアアと云ふ叫びが起つた。これは知事の行を盛んにするつもりなのだが私には松江全市の悲みの泣聲のやうに思はれた、そして再びこんな聲を聞きたくはないと思ふ程憂を帶びた物と思はれた。

初年級の姓名と顏は皆自分に珍らしい。疑もなくこれは學校で始めて教へた日の氣分が

今朝一年甲組の教場へ入つた時、非常にはつきり私に又かへつて來たからである。

日本の教場に入つて、私の前に若い顏がずらりとならんだのを見渡す時の始めての氣分は妙に愉快てある。始めての西洋人の眼には見慣れない顏ばかりであるが、どの顏にも共通な、名狀のてきない愉快な物がある。はつきりした強い印象を與へる特色のある物はない、西洋人の顏と比べると、それ等の顏は未製品にしか見えないほど、輪廓などもおだやかてある。喧嘩好きも亦控へ目も好奇心も亦無頓着も少しも表はれてゐない。中には充分發達した青年の顏だが、何とも云へぬ程子供らしい若々しさと正直さを表はして居るのがある、平凡な顏もあれば目立つ顏もある、又、女のやうに綺麗な顏も少しはある。しかし何れも皆著しい温和と云ふ特色を表はして居る、全く落ちついて素直な點を除いて愛憎その他何等の念も表はれてゐない佛像の夢みるやうなおとなしさである。後になつてこの温和な平靜なやうすに、もはや氣がつかなくなるであらう、段々慣れるに隨つて、どの顏にもこれまて氣づかなかつた特色が次第に表はれて、諸君に個人的區別ができるやうになるであらう。しかしその始めての印象が諸君と共に殘るであらう、そして長く親しんだあとてさへ始めて充分分る日本人の性格の或點を、不思議にも豫め示してゐた物である事を、種々の經驗をへたのちにさとる時が來るであらう。始めてのこの印象の記憶のうちに個人性のな

い愛すべき點と個人性のない弱點とを有する日本人の魂を少しのぞいた事を認むるであらう、――窒息するやうな氣壓から急に輕い明るい自由な自然のままの空氣の中へ出た時急に清々した感じをもつた事にのみ比べられるやうな精神的安樂を、獨りて居る西洋人が感ずるやうな人生の性質を少し見た事を認むるのであらう。

二〇

文明人の恐るべき顏について書いたのは奇人フーリエてはなかつたか。誰にしてもこの極東て歐洲人の顏を始めて見た時どんな結果があつたか、その人に分つたらその人の骨相學的學說が實際の解決を見たらしく思つたてあらう。本國て容貌について『綺麗てある』『人好きがする』『特色がある』と敎へられて居る物は、支那や日本ではその通りの印象を與へない。西洋のイロハ文字程自分等に親しい顏面表情の種類は、始めての東洋人には分らない。東洋人の始めに認むるところは民族の特性てあつて個性てない。凹んだ眼、凸出した額、鷹のやうな鼻、大きな顎の進化論上の意味（侵略的勢力習慣のしるし）は飼はれた動物が始めて生物を捕食する敵を見て直ちにその性質をさとると同じ種類の直覺力て

穩やかな人種にさとられるのてある。歐洲人に滑らかな顏附の、細つそりした、たけの低い日本人は子供のやうに見える、そして『ボーイ』は横濱の商人の日本人の從者が今日も呼ばれる名てある。日本人にとつては始めての、赤い毛の、あばれものの、醉ひどれの歐洲水夫は惡魔か、猩々か、海の怪物に見えた、そして支那人には西洋人は今も『洋鬼』と呼ばれて居る。日本に於ける外國人の大きな身長、大きな力量、烈しい歩きぶりは彼等の顏から來る變な感じを强くして居る。子供等は彼等が往來を通つて居るのを見て恐れて泣き出した。そしてもつと邊鄙な處ては日本の子供は歐米人の顏を始めて見て今日ても泣き勝ちてある。」

松江の或婦人（譯者註一）は私の前て、小さい時のこの珍らしい追懷談を語つた。『私が餘程小さい時分に大名が武術を敎へる西洋人を御雇になりました。私の父と大勢の侍がその西洋人を迎ひに出ました、それから澤山の人々が見物に往來の兩側に列んてゐました、以前に西洋人の來た事は一度もありませんてしたから。そこて私共は皆見に參りました。西洋人は船て參りました、當時こちらには汽船はありませんてした。西洋人は非常にたけが高くて、長い足て早く歩きました、それから子供等はその人を見て泣き出しました、顏は日本人の

顔と同じでなかつたからです。私の弟は大聲で泣き出して母の着物に顔を隠しました、そこて母は叱つて申しました「この西洋人は殿様に仕へにここへ來た大變よい人だからこの人を見て泣くのは失禮千萬です」しかし弟はやはり泣きました。私は恐ろしくはありませんてした。私は西洋人の顔を見上げてゐましたらその西洋人は來てにつこり笑ひました。大きな顎ひげがありました、大變不思議な恐ろしい顔だとは思ひましたがよい顔だと思ひました。それから止つてにつこりして私の手に何か入れました。そして大きな指て私の頭や顔にさはりました、そして何だか分らぬ事を云ふて行つて仕舞ました。西洋人が行つたあとで、私は手に入れてあつた物を見たら、それは小さい綺麗な眼鏡でした。その眼鏡の下へ蠅を入れると中々大きく見えます。その當時私はこの眼鏡は大變不思議な物だと思ひました。今でもそれをもつてゐます」この婦人は部屋の簞笥から取り出して私の前に小さい綺麗な懐中顯微鏡を置いた。

この小さい事件の主人公はフランスの將校てあつた。封建制度廢止と共にこの人の勤務は當然なくなつた。この人の話[譯者註一]は今も松江に殘つて居る、そして老人達はこの人に關するはやり節を覺えて居る、彼の外國語のまねと思はれるやうな、早口のてたらめの一種てある。

唐人ノネゴトニハ　キンカラクリ　メーダガシヨー
サイ坊主　ガ　シンペイシテ　ハリシテ　ケイサン
ハンリヤウ　ナ　サツクルルルルルレナノンダジユ

譯者註一。松江の婦人とは實は小泉夫人の事、蟲眼鏡はその時與へられたのでなく、夫人の父卽ち出雲の士族で當時佛人の學生たりし人に與へたのをかくの如くに記したのである、この蟲眼鏡は今も夫人が藏して居られる。

譯者註二。明治の初年の頃の事で、名はワレットと傳へられて居る。

二一

志田は再び學校へ來る事はない。彼は洞光寺の古い墓地の杉の木の影の下に眠つて居る。

一八九一、十一月二日

追悼會の時、横木は死んだ友人の靈に對して美はしい祭文を讀んだ。

しかしその横木自身も病んで居る。そして私は彼に對して甚だ心配にたへない。醫師の

言によれば過度の勉強から起つた何か腦の病氣で惱んで居るのである。たとへよくなつても始終注意して居らねばならない。中には横木は體格強壯でその上若いから大丈夫だらうと思つて居るものもある。強い坂根は先月血を吐いたが、今はもうよい。そんな風に横木も回復するであらうと信じられる。小豆澤は毎日友人の知らせをもつて來る。

しかし回復は決して來ない。その若い生命の機關の何か不思議のぜんまいが切れた。人事不省が長く續いて時々暫らくの間だけ心が生きて居る。兩親とそれから親戚友人は日夜注意してその氣のついて居る時を利用して何かやさしい事をささやいたり、或は『何か望みはないか』と聞いて見ようとして居る。それから或晩その返事がある。

『はい、僕は學校へ行きたい、學校を見たい』

そこで一同がこのよい頭腦も全く駄目になつたのではないかと思ひながら返事をする。

『もう夜中過ぎてあるし、それから月もない。その上夜は寒い』

『いえ、星て見えます——僕はもう一度學校を見たい』

一同は最もやさしくすかして見ても駄目であつた、死にかかつて居る少年はただ最後の願を悲しげに執念深くくりかへして居る。

『僕はもう一度學校を見たい、今見たい』

そこて隣室て小聲て相談が始まる、それから簞笥の引出しが開いて暖い着物が用意される。それから房市と云ふ丈夫な下男が提灯をつけて來て、やさしい無骨な聲て叫ぶ——

『富さん、わしの背中にのつて學校へ參りませう、なーに近いから、坊つちやんにもう一度學校を見せて上げます』

大事に一同が綿入てこの少年を包む、それから小兒のやうに房市の肩に腕を置く、そしてこの丈夫な下男は寒い街を通つて安らかに彼を負ふて行く、父は提灯をもつて房市の側から急ぐ。そして小さい橋向うの學校まて遠くはない。

大きな薄墨色の建物は夜目に殆んど眞黒に見える、しかし横木には見える。彼は自分の教室の窓を見る、樂しかつた四ヶ年いつも毎朝下駄を音のしない草履にはきかへた屋根のある生徒昇降口を見る、今寢て居る小使の部屋を見る、小さい塔に眞黒くかかつて居る鐘が星あかりに影をうつして居る處を見る。

それからささやく。

『今みんな思ひ出せる。忘れてゐた——そんなひどい病氣だつた。みんな又思ひ出す。あゝ、房市、お前は本當に親切だ。僕はもう一度學校を見たので非常に嬉しい』

それから又彼等は長い人の通らない街を通つて急いで歸る。

一八九一、十一月二十六日

二二

横木は明晩、友人志田の側に葬られるのである。

貧しい人の臨終に、友人や隣人がその家に來てできるだけの世話をする。遠い親戚へ通知をやる者もある、凡て必要な準備をする者もある、又死んだときまれば僧侶[註一]を迎へに行く者もある。

註一。全然神道の人か或は神佛兩方に屬してゐても、葬式は神道の式にする人はこの限りでない。松江では、高い位地の役人などは、きまつて神式で葬式をする。

僧侶は使が行かぬうちに、檀家の人が夜、死ぬのを知つて居ると云はれる、死んだ人の魂が寺の戸を一度ひどくたたくからである。それから寺僧は起きて僧衣をつける、そして使が來る時『承知して居ります、用意して居ります』と答へる。

その間に屍骸は家の佛壇の前に運ばれて床の上に置かれる。頭には枕が置いてない、抜身の刀は惡魔除けに手足のところに置いてある。佛壇の戸は開かれ先祖代々の位牌の前には蠟燭をともしてある、そして香を焚いてある。親戚友人は皆香を贈る。それ故如何に珍らしく貴くとも、外の時に香を人に贈るのは不吉となつて居る。

しかし神棚は白紙で見えないやうに隱される。戸口に打ちつけてある神社のお札は凡て忌中は[註二]つつみ隱されねばならない。凡てその間は家人は誰でも神社に近づいたり、神に祈つたり、鳥居をくぐつたりしてはならない。

註二。死者が神式で葬られる場合は別。松江では忌は五十日。五十一日目に一家殘らず圓城寺灘（圓城寺のある山のふもとの湖岸）へ行つて清めの式を行ふ。圓城寺灘の岸に地藏の丈の高い石像がある。その前でお祈りをして、湖の水で手を洗ひ口をすすぐ。それから親戚へ行つて朝飯を喰べる、清めの式は、なるべく、いつも未明に行はれる。忌中にはうちの人は親戚知り合ひのうちで食事をしてはならない。しかし神式で葬式をした場合にはこんな儀式を守るには及ばない。

屍骸とこの部屋の入口との間に屏風が擴げてある、白紙の一片に書いてある戒名は屏風の上にはつてある。死人がもし若ければ屏風はさかさに立てられねばならぬが老人の場合

にはさうはされない。

親戚友人は屍骸の側で祈禱する。そこには一千の祈りをくりかへす間に、數へるための一千の豆粒の入つた箱が置いてある、その不慣れな旅路にある靈魂はこの祈りのために助かると信じられて居る。

僧が來て讀經をする、それから葬送の準備になる。死體は溫湯で洗つて眞白の着物を着せる。しかし死人の着物は左前に合せる。それ故偶然にても、人の着物を外の場合そんな風に合せるのは不吉と考へられる。

死體が木の駕籠のやうな物に見える妙な四角な棺に入れられた時、親戚は彼等の血を代表する男女それぞれの髮の毛や爪を切つて少しづつ入れる。そして棺の中へ六厘入れる、六道の辻に立つて居る地藏のためである。

家て葬列ができる。僧が小さい鐘をならして先導する、童子が新佛の位牌を持つて行く。行列の先驅は全く男子の親戚や友人である。何かの意味を表はせる白い小旗を持つ者もある、花を持つ者もある、一同は提灯を持つ、――これは出雲では成人(オトナ)は夜葬られるからである、子供だけは晝葬られる。つぎに棺が來る、墓を掘つたり、葬式の助けをしたりするのを仕事として居る人々(註二)の肩に轎(カゴ)のやうにかつがれて居る。終りに女の會葬者が來る。

この人々は頭から足まで幽靈のやうに白い頭巾をかむり白い着物を着て(註三)居る。提灯のあかりだけで照らされた出雲の葬式の行列のこの白衣の一群よりももつとまぼろしのやうな物は想像ができない。一度見たら屢〻夢に歸つてくる物すごさである。

註二。しかし昔の武家の葬式では婦人は黑いなりをした。

お寺て棺は玄關の前の敷石の上に置かれる、そして讀經と悲しげな音樂とて別の佛事が行はれる。それから行列は再びつくられ、お寺の庭を一度廻り、それから墓地に進む。しかし死體は二十四時間の後でなければ埋められない、死んだと思つた人が墓のうちて生きかへる事のない用心てある。

出雲では火葬は殆んどない。この點に於ても外の點に於けると同じく神道情操の有力な事が明らかてある。

譯者註。出雲では「山の者」と云ふ。

二三

見納めに私はもう一度彼の顔を見る、彼は首から足まで白装束をつけて、幽界の旅路のために白い帯をつけて、死の床にねて居る、しかし謎のやうなむつかしい英語の説明を聞いた時のいつもの微笑と殆んど同じ奇妙な温和な風で眼を閉ぢたままで微笑して居る。ただ今の微笑は一層不可思議な事に關する一層大きな智識を得たので、更に一層美はしいやうてある。洞光寺の御堂の香の烟のうちに、佛の黄金の顔ばせもその通りに微笑し給ふ。

二四

一八九一、十二月二十三日

洞光寺の大梵鐘は横木の追悼會[御葬式一]のために徐ろに規則正しく分時砲（弔砲）のやうに鳴つて居る。その豊かな青銅のうなりの幾しきりが湖の上で動揺し、街の屋根の上に漲つて、そして四方の緑の山々に對し深い哀音となつて消える。

古風な儀式のこの追悼會は哀れの深い會てある、これは餘程以前日本の佛教で採用され

たが、支那から由來した美はしい物てある。又費用のかかる儀式てある、そして横木の両親は甚だ貧しい。しかし凡ての費用は學生と教師の進んて寄附した物て辨じた。出雲の禪宗の各寺院から來た僧侶は洞光寺に參集した。市中の教師及び學生全部は、この大寺院の本堂に入つて高い祭壇の左右に座を取つた、外側の長い廣い階段に一千の靴と草履をぬいて疊の上に坐つた。

正面玄關の前に、高い佛壇に面して新しい佛壇が置かれた、その開いた戸のうちに漆と金の故人の位牌が光つて居る。佛壇の前の小さい臺の上に線香の束の入つた香爐と、果物、菓子、米飯、及び花の供物が置いてある。佛壇の兩方にある丈の高い美事な花瓶には花の枝が一杯に巧みにさしてある。本尊の前には大きな蠟燭立——その光つた眞鍮の臺は巻きついた怪物、上り龍下り龍になつて居る大きな蠟燭立に蠟燭が燃えて居る、佛説にある神鹿のやうな、神龜のやうな、三昧に入つた鶴のやうな形の香爐から香が巻き上つて居る。そしてこの向うに、大きな奥の間のほの暗き處に、佛は圓滿具足の微笑をもらし給ふ。

佛壇と本尊との間に小さい机が置いてある、その兩側に僧侶が相對して列をなして坐る、圓頂の列、朱の絹の僧衣、金の縫のある袈裟の立派さ。

大きな鐘が鳴り止む、靈魂に對する食物の供養の讀經てある施餓鬼が行はれる、急に朗

かな、音調のよい打ち物の音に伴はれた哀音の讀經て、音樂的な法會が始まる。その打ち物は木魚の音てある、木て造つて漆を塗つて金箔を置いた大きな魚の頭てある、妙な理想化した海豚（イルカ）の頭のやうてある、これて拍子を取るのてある、法華經（譬喩品第三）の觀世音菩薩普門品を誦んて居る、それにはかくの如き廣大な祈りがある。

眞觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及慈觀、常願常瞻仰、無垢清淨光、慧日破諸暗、能伏災風火、普明照世間

導師等の聲々がひびき渡る同音て明らかに高く歌ふと共に、その他の一同の僧の合唱はこの有難い經文を深い低音て唱へる、そして彼等の讀經のひびきは寄波のつぶやきに似て居る。

木魚はその鈍いひびきを止める、深き感動を與ふる讀經が終る、そこて重なる司會者即ち名高き寺々の高僧は一人づつ位牌に近づく。銘々ひくく頭を垂れて線香に火を點じ、これを青銅の小さい鉢に眞直に立てる。銘々はしばらく經文を唱へる、その始めの音は故人の戒名の文字の音てある、そしてこの位牌の文字の順序によつて唱へられた經文は、聖い折句になる、それを香語と云ふ。

それから僧侶は席にかへる、暫らくの沈默のあとて祭文の朗讀が始まる。各級から選擧されて一人づつ出た學生は起立して、高い壇の前の小さい机に近づき本尊を拜し、懷から紙を取り出し、漢文を朗讀する時の節のよい朗々たる哀調て讀み上げる。かく銘々が愛の滿ちた悲しみと希望の言葉て死者に對して生者の愛情を語る。そして最後に學生のうちから、一人のやさしい少女（師範學校の女生徒）が出て、小鳥のやうに柔和な調子て述べるがために起立する。祭文を讀み終つた時、銘々は本尊の前の机の上に紙を置いて禮して退く。

今度は先生の順番てある、そこて一人の老人が小さい机の處に席を取る、詩人として名高い、教師として尊敬される、漢文の先生片山翁（譯者註三）てある。學生一同父の如く愛して居るので、翁が『故島根縣尋常中學校四年生』と始める時不思議に一同水を打つたやうになる。

『維レ明治二十有四年二月二十有三日
島根縣尋常中學校教諭　片山尙絅
辱ク追福ノ靈場ニ侍スルヲ獲テ恭嵩悽愴（クンカウセイサウ）ノ至ニ堪ヘズ敢テ
故島根縣尋常中學校四年生橫木富三郎君

靈ニ告グ、尙絅本校教諭ニ承乏スル前後五年其間學生ノ優秀ナルモノ鮮シト爲サザルモ其忍耐勇進勉メテ倦マズ審問愼思科(アナ)ニ盈(ミ)チテ校則ヲ遵守シ師訓ヲ服膺シ業ニ敏ニ行ニ愼ム

君ノ如キハ復タ得易カラズ冀北ノ野良馬ナケレバ古人之ヲ馬ナシト稱ス本校尙ホ龍駒ナカランヤ然レドモ

君ニシテ逝ク、予其尤ヲ拔クノ嘆ニ堪ヘズ

君ハ十七年九ケ月ト聞ク、學業專修ノ好年期ニシテ前途有爲ノ基礎殆ンド六七仞ニ及ブ、面シテ病ノ爲メニ逝ク、其病因ヲ問フニ腦ニ急劇ノ症ヲ呈セリト、以テ平素ノ苦學ヲ證スベク益〻半途ニ斃ルノ愛惜スベキヲ感ズ已矣(ヤミナン)、其成業ヲ見ルニ及ハス、若シ

君ヲシテ其天壽ヲ全フシ社會ニ立ツアラシメンカ必ズ其業ニ敏ニ行ヲ愼ム者以テ終始ヲ貫キ身ヲ立テ家ヲ興スヤ推テ知ルベキノミ、

君ノ教場ニ在ル手ヲ擧テ問ヲ發シ自ラ低テ筆記セル或ハ勇壯活潑銃ヲ提テ馳驅セル其聲其容尙ホ目捷ヲ離レズ而シテ今再ビ之ヲ見ルニ由ナシ噫天何ゾ衰殘爲スナキノ尙絅ヲ殘シテ此進取爲スコトアル可キノ

君ヲ奪フヤ尙絅ノ

君ニ於ケルハ職務ニ因テ師弟タルニ過ギズ尙ホ其情義ノ感ズル所自ラ堪ルコト能ハズ尙絅子アリ本年二十四歲遠ク相州橫濱ニ在リ素ヨリ豚犬ニシテ

君ニ比ス可キニ非ルモ老父ノ胸間夢寐(ムビ)ニ忘レズ況ヤ俊拔ナル

君ノ親父タリ慈母タリ兄弟姉妹タルモノ此不幸ニ遭遇スルニ於テヲヤ其中情以テ如何トナス思フテ此ニ到レバ涙先ヅ胸ヲ衝キ復タ言ヲ爲スコト能ハス嗚呼

君ハ逝ケリ乃チ逝クト雖モ其業ヲ勉メ其行ヲ愼メルモノハ永ク本校學生ノ模範ト爲テ朽チズ是職員學友ノ感懷追慕已ム能ハズシテ茲ニ謹デ清酌庶羞(シヨシユ)ノ典ヲ具シ敬ンデ

君ノ靈ヲ祭ル所以ナリ尙クハ

來リ饗(ウ)ケヨ

それからすすりなきの聲は木魚の突然再び鳴り出したのに壓せられて、導師の高い調子の稱名合唱の聲が有難い涅槃經を誦し始める。生死の大海を解脫して通る凱歌である、その高い音調と木魚の反響の下に妙へなる經を誦する波濤の如き一百の聲の低音は大海のくだけるやうに響いて聞える。

諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂。

譯者註一。この追悼會は、四年生横木富三郎、三年生志田昌吉、三年生妹尾丑之助三人のために催された物、著者は都合上横木の分にしたのである、時は明治二十四年十二月二十三日の事故、當時著者ヘルンは熊本高等中學校へ轉任したあとの事であつた、この記事は全く小豆澤（藤崎大佐）の通信を參考として書いた物、當時の新聞記事によれば、會するもの二百餘名（中學生全部）來賓は齋藤師範學校長以下職員及び死者の親戚、僧侶は二十餘名、佛式を營み、終りて中學校長木村牧氏及び片山敎諭の祭文奉讀、ついで五年級總代遠藤靜衞、四年級總代三浦倫吉、三年級總代外山林次郎、二年級總代錦織甚六、同窓會總代内田實、神門輔仁會總代今岡義一郎諸氏の祭文朗讀あり、次で參拜者一同に茶菓を供し、散會せしは五時なりしとある。

譯者註二。この追悼會で讀んだ經文は佛遺敎經であつた、藤崎大佐がその全文を譯してヘルンに示したが、その内容は追悼會に讀む物としては適切でないとして法華經にかへた。

譯者註三。片山は有名なる漢學者片山兼山の孫、滋賀縣師範學校長より轉じて松江中學の敎諭となりし人。

第二十章　二つの珍しい祝日

一

日本のお祭の外觀的象徵は、始めてそれを見る外人に取つては、最も不可解の謎である。それは數も多く、種類もまた多い。西洋に於ける祝祭休日の裝飾に關するいかなる物とも全然異つてゐる。それは一つ〳〵或る信仰、または或る傳說に基いた意義を有する——その意義は日本のどんな子供にも知られてゐるが、外人に取つては臆測を加へることさへも不可能だ。しかし苟も日本の民衆の生活と感情について幾らか知らうと欲する者は、少くとも祭禮の象徵の中に就いて、最も普通なものの意味を學ばねばならない。特にかゝる知識は日本美術の研究者に取つて必要である。その知識がなくては、只單に無數の意匠の陰微纖細なる氣分と妙味に氣が付かないばかりでなく、また多くの場合に於て、意匠そのものが不可解て了はるに相違ない。數百年間、祭禮の象徵は日本人によつて、さま〴〵の優

美なる裝飾手段に利用されて、金屬細工に、陶器に、朱塗りや黒塗りの漆器などの、最も卑近なる家具に、小さな眞鍮の煙管に、煙草入れ袋の止め金など、種々の物の上に現はれてゐる。普通の裝飾的意匠の多數は、象徴的だといふことさへも出來るだらう。意味が最も明白と思はれる形象——西洋の骨董購求者が最もよく知つてゐる、かの動植物の匹儔なき習作——さへ、或る倫理的意義を有するのが常であるが、それは少しも認められてゐない。または下等な宿屋の紙障の上に、一氣呵成て揮毫された極めて普通の意匠——一匹の海老——松の枝——水の渦巻いた中を、よた〳〵歩いてゐる龜——一對の鶴——竹の細枝——を取つて見るがよい。漫遊の外人は、何故にかやうな意匠が用ひられて、他の意匠を用ひてないかを質問しようと考へることも稀れだ——假令彼の旅行中に於て、それらの意匠が左ほど變更も加へないで、二十個所までも繰返されてあるのを見た場合にも、怪まない。それらの意匠が因襲的となつたのは、全く或る意義の象徴だからである。幾ら無學の日本人でも、その意義を知つてゐるが、外人は毫もそれに氣が付かない。

註。西洋のある一派の俗物や、自分免許の藝術批評家の間では、日本美術が「眞に適つてゐる」といふことに關して熱心に唱道すると、その文士を冷笑する風になつてゐるから、私はこゝに、この動植物の形の

作品について、英國の最も有名な、現存せる博物學者の言葉を引用してもよからう。ウオラス氏の標識は、こゝに指せる俗物連中によつてさへも、鼎の輕重を問はれることはあるまい——

「モーナイク博士は或る日本婦人によつて描れた、日本の植物の彩色畫を、澤山蒐集して持つてゐる。それは私の從來見た中では最も卓越せるものである。一莖、一枝、一葉、悉く一と筆で成つて、頗る複雜せる植物の特徴及び配景は天晴れよく現はされ、また莖及び葉の關節は極めて科學的樣式に示されてゐる」

（ウオラス氏著、「馬來群島」第二十章）

これは一八五七年に書かれたので、日本へまだ西洋畫の輸入されない頃だ。この一と筆で葉などを描くといふ技巧は、依然として日本では普通である——最も平凡な裝飾師の間に於てさへ。

この問題については、一個の百科全書が書けるほどであるが、私の知る處は甚だ僅かで、特別な一論文にも足りない。しかし說明のために、私は敢て今猶ほ日本のすべての地方で守られる、二つの古い祝日に、陳列される珍しい品々について語らう。

二

第一は新年の祝日で、三日間つゞく。松江では、その式が特に面白い。他所では廢れた

り、またはどし〳〵廢れつゝある幾多の祝祭習慣が、この古い町には依然として、まだ保存されてゐるから。その際、町々は盛んに飾られ、店は閉ぢられる。注連繩又は注連飾——神話的時代から神道の尊い象徴となつてゐる藁繩——が、家々の正面に沿うて、花綵形に吊るされ、それが連接して左にも右にも、一哩も長いたゞ一本の注連繩となつて見え、藁の垂飾と、白くひら〳〵する御幣が附いて、眼の達する限り町の兩側に延びてゐる。日本の國旗——昇る朝日の國の表象なる大きな赤い圓盤を、白地に現はせる——が、玄關の上に翩翻する。それから同樣の國家的表象が、軒端に沿うて、或は街路や神社の廣小路を横切つて、列を作つて吊るされた無數の提燈の紙面にも輝いてゐる。それから、あらゆる門や戸口の前に門松が立ててある。だから一切の街道はずらりと綠の色が並んで、また花やかな色に滿ちてゐる。

門松はその名の示す以上のものを有してゐる。それは一本の若い松、或は松の一部分に、梅の枝と笹が結付けてある。松、竹、梅、は象徴的意義の生長てある。昔は松のみ用ひられたが、應永年間から竹が加へられ、また更に後になつてから梅が加へられたのだ。

註。門松について佛教の諺がある——門松や冥途の旅の一里塚。

松には多くの意味がある。しかし最も一般に承認せられる芽出度い意味は、逆境に際し、忍耐して、元氣よく押通すといふのだ。他の樹木の葉が凋落するのに、松ばかりは綠の色を變へない如く、眞正の男兒は困難に當つても、勇氣と力を失はない。松はまた私が他の章で述べた通り、老齡猶ほ元氣旺盛なることの象徴となつてゐる。

いかなる歐洲人も、恐らくは竹の謎を推測し得ないだらう。それは一種の洒落を象徴する。節と發音する漢字に、二つの意味があつて、一つは竹の節を意味し、他の一つは德、忠實、不變を意味する。だから竹は慶瑞として用ひられる。『節』といふ名は、屢〻日本の少女に與へられてゐるのを注意するがよい——丁度フエース（信仰）、フキディーリア（忠實）及びコンスタンス（不變）といふ名が、英國の娘に與へられる如く。

梅——その象徴的意味について、私は既に日本の庭園に關する章て幾分述べてゐる——は、必しも用ひるとは定つてゐない。時としては神道の尊い表象の榊が代用される。また時としては、ただ松と竹ばかりで門松を作ることもある。

新年の祝日に用ひらるゝすべての飾りは、珍しい、奇異なる種類の意味を有する。して、すべての中て最も普通なもの——注連繩——さへ、最も複雜なる象徴を有する。第一にその起原は、古事記に載つてゐる如く、太陽の女神が、一旦隱れた窟から出るやうに誘はれ、

それからまたそこへ歸らうとするのを、或る神が入口に藁の繩を張つて禦いだといふ、最も古い傳說によるのは、說明するにも及ぶまい。第二に注意すべきは、注連繩の厚さは何うてあらうとも、その捻り方は左に向はねばならぬといふことだ。その譯は、古の日本の哲學では、左が清い側、卽ち吉の側となつてゐるからだ。多分歐洲の無學階級に於て今日に至るまで猶ほ普通となつてゐる信仰、卽ち心臟は左方に存するといふ古い信仰に基くのだらう。第三に注意すべきは、緣飾材料の如く總をなして、一定の間隔を置いて繩から垂れてゐる藁は、その總の位置に隨つて數が異らねばならぬといふことだ。それは三本といふ數から始まつてゐる。だから、第一番目の總は三本の藁、第二番は五本、第三は七本、第四はまた三本、第五は五本、第六は七本といふ風に、繩の全長を通じて數が變化して行く。藁の總と交互に垂れてゐる御幣の起原も、また太陽の女神の傳說中に求められねばならぬ。が、御幣はまた太古、神々に捧げた布帛を表はしてゐる。布を獻ずる習慣は夙に廢れたのである。

しかし御幣の外に、まだ讀者が意味を想像し得ないやうな幾多のものが附いてゐる。その中に、羊齒の葉、橙、ゆづり葉、小さな炭の束などがある。

何故羊齒の葉（もろもき又は裏白）を附ける？その譯は、羊齒は子孫繁殖の象徵だから。

その枝が分かれて、更にまた枝が出る如く、家族が榮え、子孫が增加して行く。

橙（だいだい）はどういふ譯？それは『代々（だいだい）』といふ漢字があるので、橙は吉兆の果實となつたのだ。

しかし炭はどういふ譯？それは繁昌の不變を示す。この觀念は全く珍異だ。炭の色を變へることは出來ない如く、我々の愛する人々の幸運も、一切永久不變でありたい！ゆづり葉の意味は、前章に說明して置いた。

家の前の大きな注連繩の外に、室々の床の上にも、注連繩や注連飾が吊るしてある。それから、後門の上や、二階の廊下の入口の上（もし二階があれば）には輪注連（わじめ）[注一]が懸けてある。それは極小さい注連飾を捻つて、一種の花輪形にしたものに、羊齒、御幣、ゆづり葉が飾り附けてある。

註一。注連繩と注連飾の差異は、後者は專ら裝飾的で、藁繩に諸種の珍しい物が結付けてあることだ。

しかし祝日の大なる家庭的裝飾は、神棚の裝飾だ。家々に祀る小さな宮の前に、二枚の大きな餠を据ゑる。して、宮は花や、小さな注連飾や、榊の枝で美々しくする。また貨幣を一本の絲に繫いだものや、蕪菁や、大根や、魚類の王なる鯛や、烏賊（するめ）や、神馬草（じんばさう）[注二]も獻げ

られる。またその名が欣ぶと同音だと考へられてゐるため、愉快欣喜の象徴である海草の昆布や、餅と藁で作つた造花の餅花もある。

註三。これは馬尾藻科に屬し、氣胞を澤山有する。食用海草のさま〴〵の種類が、日本人の食料の可なりの部分を占める。

三寶は奇形の小さな臺で、其上に神々への供物を載せる。出雲の殆どあらゆる裕福な家には、自家用の三寶を有つてゐる——しかしかやうな家庭用の三寶は神社に用ひられるのよりは小さい。お正月が到來すると、橙、米、餅、鰯、力祝餅、黒豆、勝栗、それから立派な海老が、すべて體裁よく家庭用の三寶に並べられる。客が來る毎に、その前へ三寶を据ゑる。すると、客はそれに向つてお辭儀をする。彼はそれによつて、たゞに三寶の上に盛られた品々によつて表さるゝ一切の幸運が、その家に來るのを心から願ふといふことを示すのみでなく、更にまた、その家に祀つてある神々に敬意を表はす。黒豆は身體の力と健康を意味する。何となれば、豆といふ字と字形は異つても、健康といふ文字は、同じく『まめ』と發音するからだ。しかし何故に海老を用ひるか？こゝにまた珍しい觀念が存する。海老の胴體は二重に曲つてゐる。非常に高齡まで生きながらへる人の身體もまた曲が

る。だから海老は非常なる高齡の象徴になる。して、藝術的意匠に於ては、私共の知人が海老の如く腰が曲がるまで——歳月の重荷の下に——永く生きるやうにと願ふ意味である。また勝栗はその名の第一の文字は勝利、征服を意味するから、成功の象徴である。

お正月の祝節に伴ふ奇異な習慣や象徴が、少くとも他に百もある。それを叙述するには一巻の大冊を要するだらう。私は不注意な觀察にさへも、すぐ氣付くやうなもの僅かばかりを擧げたのに過ぎない。

三

私が話さうと思ふ今一つの祝日は、節分である。それは日本の舊曆に從ふので、太陽年の始——冬が和ぎそめて春となる季節——に當る。チエムバリン教授の語を藉りて云へば、一種の期日不定の祭日といふべきものである。して、主として惡魔拂ひの儀式のため有名だ。節分の宵には、日が暮れて間もなく、『厄落し』即ち惡魔を追拂ふ人が、錫杖を鳴らし、奇異な聲を振り立て、『鬼は外！福は内！』と叫びながら、町中を巡る。彼は呼び入れられると、その家で少許の料金で以て、簡單なお祓ひを行ふ。このお祓ひは佛教の經文

の或る部分を誦するのと、錫杖をがら〳〵鳴らすだけである。

註。この錫杖は奇異な形の杖である。地藏の像は普通それを持つた形に現はされてゐる。今猶ほ托鉢僧はそれを携へる。大いさは數種ある。厄落しの持つのは頗る短い。傳說によると、錫杖が發明されたのは、佛敎の巡禮者の途上で、昆蟲又は他の小動物が、知らずに蹈まれぬやう警戒を與へるためであつた。

それから、白豆が四方へ向つて家中で投げられる。ある不可思議な道理で惡魔は白豆を好かない——して、それを避けて逃げ出す。かやうにして撒かれた豆は、後に掃き集めて、春の初雷の鳴るまで入念に保存して置いて、その時に及んで食べる習慣である。しかし何故さうするのか私にはわからない。また惡魔が白豆を嫌ふ由來をも、私は發見することが出來ない。が、この嫌惡の點については、白狀すれば私も惡魔と同感だ。

惡魔がすつかり追拂はれた後、まだ戻つて來ないやう、小さな呪ひの物が、家のすべての入口の上に置かれる。これは燒串ほどの長さと厚さのある、小さな一本の竹條と、一枚の柊の葉と、乾鰯の頭から成立つてゐる。竹條を柊の葉の中央に突き刺し、鰯の頭を竹條の一端の割け目へ挾み、他の一端は戸の直ぐ上の柱の接ぎ目へ入れてある。しかし何故に惡魔は柊の葉と鰯の頭を恐れるのか、誰人も知らないやうだ。坊間に於ては、凡て是等の

珍しい習慣の起原は、全然忘れられてゐるらしい。して、今猶ほかゝる習慣を維持してゐる上流家庭も、この祝節に關する迷信を信じないのは、今日の英人が寄生木とか、蔦の魔力を信じないと同樣である。

この年々惡魔を追拂ふ、古い面白い習慣は、代々日本の藝術家に取つて感興の源泉であつた。外國人が幾多の藝術品の微妙なる氣分を味ふやうになるのは、ただ民衆の習慣と思想を相應に曉つた後のことである。その藝術品を實際買つて見ようと思ふのは、ただそれが非常に奇異にも人目を惹くからであるが、日本人の生活を知らない以上は、かゝる作品は、少くとも、その內的意味に關しては、不可解に終はらざるを得ない。過日ある友人が、私に香ばしい革の、小さな名刺入れを呉れた。一方の側面には惡魔の顏を浮かして印してあつた。惡魔の廣く開いた口の孔を通して、內部の絹裏地に畫かれたる、愉快なる幸運の女神、お多福の圓ぽちやの笑顏が見えた。それだけ見ても、それは珍しい、綺麗なものであつたが、その意匠の眞價は、新年を祝する滑稽的象徵——『鬼は外！福は內！』であつた。

四

春の初雷のときに節分の豆を食べる習慣のことを語つたから、私はこの機に際して、まだ百姓達の間には廢れてゐない雷の迷信に關して、少しく述べてみよう。

雷の嵐がくると、大きな褐色の蚊帳が吊られる。して、婦人や子供達——恐らくは全家族——は、嵐の終はるまで、その下で坐つてゐる。昔から電光は蚊帳の下に居るものを一人も殺し得ないと信ぜられてゐる。雷獸は蚊帳を通り拔けることが出來ない。最近のこと、私の宅へ野菜を賣りに來た年老いた百姓が、私共に話した處によれば、彼と彼の全家族が、雷鳴の際、蚊帳の下に屈んでゐると、實際彼等の部屋の向うの緣側の柱を『電光』の駈け上つたり、駈け下りたりするのが見えた——『電光』は猛烈に柱を引抓いたが、蚊帳のために入ることは出來なかつた。家屋は電擊によつて、大損害を被つたけれども、彼はそれを雷獸の爪の所業に歸した。

雷獸は雷鳴の嵐最中に、樹から樹へと飛んで行くと、人々は云つてゐる。だから雷鳴電光の際、樹木の下に立つのは甚だ危險だ。雷獸が人の頭とか、肩の上へ載るかも知れない。

雷獸はまた人の臍を食べるのが好きだと云はれてゐる。だから雷鳴の時、用心して臍をよく蔽つて置かねばならぬ。また成るべく俯臥する方がよい。雷獸は線香の香が嫌ひだから、雷鳴中は線香をいつも焚く。電擊を被つた樹木は雷獸の爪で引裂かれ、傷けられたものと考へられてゐる。して、その木材木皮は附近の住民によつて注意して集められ、保存される。挫かれた樹の木材は、齒痛を癒す特效があると云はれてゐるから。

雷獸が捕獲されて、籠に入れられた話は、幾多もある。嘗て雷獸が井へ墜ちて、繩や釣瓶に縋れて、生捕になつたといふ話がある。また出雲の老人達は、嘗て雷獸が松江の天神さまの境內で、眞鍮の籠に入れて、見せ物にしてあつたのを記憶するといつてゐる。それは狸に似てゐて、晴天の日には、すや〳〵と籠中で眠つてゐるが、空に雷鳴が起ると、奮してきて、非常な力を得、その眼は燦然と閃くのであつた。

五

しかし白豆を毫も怖れないし、また普通の惡魔の如く容易に追拂ふことも出來ない、非常に惡い魔物が居る。それは貧乏神だ。

が、出雲の人々は、往々貧乏神を逐拂ひうる一種の家庭的禁忌の法を知つてゐる。

日本の臺所では、煮燒をするに先つて、僅かばかりの炭火を、初めにかの頗る有用で、簡單な家庭用の道具の火吹き竹で赤熱に吹き起す。火吹き竹は通常長約三尺、直徑二寸ほどの竹の管で、火の方へ向ける一端に、ただ極めて小さな孔が殘してある。炊事を務める女は、他端を唇に當てて、管を透して炭火の上を吹く。かやうにして活氣ある火が、數分間にして得られる。

時を經ると、火吹き竹は焦げて、龜裂を生じて、駄目になる。そこで新しいのを作る。すると、古いのが貧乏神を退治する禁忌に使はれる。その中へ一厘錢を入れて、ある呪文を唱へる。それからその一厘錢の入つたまゝ、その古くなつた道具を單に表の戸口から町中へ投げすてるか、または附近の川へ擲り飛ばす。これが——私はその譯を知らないが——貧乏神を戸外へ投げ出して、隨分長い間、歸つてくることの出來ぬやうしたのも同じことだと見做されてゐる。

貧乏神の目に見えぬ存在が、どうして發見されるかと問ふ人もあるだらう。

英國で夜間あの凄いかちつ〳〵といふ音を發する、茶立て蟲(譯者註)の一種は、日本の貧乏蟲と

譯者註。英國にて、その蟲の啼き聲は、死人のある前兆だといふ迷信がある。

いふ名の親類を持つてゐる。この蟲は貧乏神の召使で、それが家の内でかちつ〳〵といふ音を發するのは、かの甚だ歡迎されない神樣の存在を報ずるものと信ぜられてゐる。

六

節分の祝日の今一つの特色は、それを記述する價値がある——人型(ひとがた)の賣られることだ。それは白紙で作れる男、女、子供の小さな雛形で、ただ數回巧みに剪刀を使つて切り出したものである。男女の差別は、袖と小さい紙の帶の形の變化で示してある。神道の社祠で賣られ、これを家族一人毎に一枚宛買受けると、神官は一枚々々に當人の男女別と年齡を書く。家へ持歸つて、それ〳〵に分配し、各自その紙で輕く身體を摩擦し、神道の小さな祈を唱へる。翌日是等の人型を神官に返へす。神官はその上に向つて或る一定の文句を誦した後で、神聖な火で燒いてしまう。この式によつて一年間その家族はすべて身體上の災難を免がれるものと思はれてゐる。

註。節分との關係はないが、こゝに述べて置きたい一つの事柄がある。

出雲には書道の神聖といふ、有益なる――また昔は屹度頗る重要であつた――迷信が、今猶ほ遺存する。何かな書付けたもの、或は印刷したものでも、皺くちやにしたり、蹂躙したり、汚したり、或は賤用に供してはいけない。もし書類を破毀する必要がある時は、紙を燒かねばならない。ある小さい宿屋へ泊つた時、私が自分で書いた、文字の一杯に滿ちた紙を、引裂いて皺にしたために、優しく叱りを受けたことがあつた。

第二十一章　日本海に沿うて

一

七月十五日の事、――私は伯耆に居る。

白い途は低い絶壁の海岸、――日本海の岸に沿うてうねりくねつて行く。いつても左手に、岩山の斷片や砂丘の層の上から、渺茫たる大海が見える、ずつと向うに、同じ白い太陽の下に朝鮮の存在する青白い地平線まで、青い皺を湛へて居る。時々絶壁の端が急に取れて、私共の前に突然寄せ來る浪の現れる事がある。いつても右の方には別の海、――背後に大きな青白い峯を有する、遙かの霞んだ青い連山まで達して居る綠の靜かな海、――稻田の大きな平面、その表面には音のない波が、今日朝鮮から日本までその青い海を動かすのと同じ大きな風の下に、互に追ひかけ合つて居る。

一週間、空には一點の雲もなかつたが、海は幾日も怒つてゐた、それて今その大波のつぶやきは遙かの陸まで響く。いつてもこの通り盆の三日間——卽ち舊曆七月十三、十四、十五の三日間は海が荒れると云はれる。それで十六日に精靈船が出たあとて、誰も海に出ようと云ふ者はない、船の借りやうがない、漁夫はうちにゐて出ない。その日の海はそこを超えて、幽界へ歸らねばならない精靈の通路となる。それて、その日の海は佛海（ホトケウミ）と呼ばれる。そしていつも十六日の夜、——海は穩かてあらうが荒れてゐようが、——一面に水の上は大空へすべり出る朧げな光——精靈のかすかな火——てかすかに光る、それから遠く離れた都會のつぶやきのやうな聲のつぶやき——魂の不分明な話聲——が聞える。

二

しかし時として入港しようと一所懸命になつた船がやはりおくれて、十六日の夜遠く沖合に居る事がある。そんな時に精靈が船の廻りに高く現れて、長い手をのばして『田籠（タゴ）、田籠おくれ——田籠おくれ』とつぶやく。決してそれを拒んではいけない、しかし桶を渡す前に、底をぬいて置かねばならない。偶然にても完全な桶を海に落したら、その船に乗

り合せた人々こそ災難、——何故と云へば、精靈は直ちにそれに水をみたして船を沈めにかかるのだから。

佛海の時分に、恐ろしい見えない力のある物は精靈ばかりではない。未だ最も強い魔が居る、それから河童（註）が居る。

しかしいつても游泳者は恐ろしい醜惡な河童を恐れる、河童は水の底から延び上つて人を引き込んで、腸を喰ふ。

ただ腸だけ。

河童に捕へられた人の死體は餘程たつてから岸に打ち上げられる。大きな波のために長い間岩に打たれたり、魚類のために嚙まれたりしなければ、外から見て何の創もない。しかし輕くてうつろで——よく枯れた瓢箪のやうに空虛である。

註。河童は本來海の化け物ではなく河の化け物である、それで河口に近い海に出る。松江から一哩半ばかり、河内川に臨んだ河内村に河子の宮或は河童の宮がある。（出雲では一般に『河童』とは云はないで『河子』と云ふ。この小さい社に河童が書いたと云はれる證文が保存してある。話によれば、昔河内にすむ河童が村の人を澤山、それから家畜を澤山捕へて殺してゐた。ところで或日の事、水を飲みに河に入つた馬を捕へようとして、馬の腹帶の下へどうかしたはずみで自分の頭をねぢ込んだ）

驚いた馬は、水の中から跳び出して河童を野原へ引きずつて來た。そこで馬の主人と大勢の農夫は河童を捕へて縛り上げた。村中の人が化け物を見に來た、化け物は頭を地につけて、何か云ひながらお情けを乞ふた。農夫達は卽座に化け物を殺さうとしたが、馬の主人は同時に村の庄屋であつたので云つた。「それよりも河内村の人や家畜に今後決して手を觸れない事を誓はせた方がいゝだらう」そこで誓約の證文を作つて河童に讀んで聞かせた。河童は字が書けないが、手に墨をつけて證文の終りに押す事はできる。これには異存もなかつたので、その通りにしてから、河童は赦された。それからさき、河内村の住民や家畜はこの化け物に襲はれる事はなかつた。

三

程なく、進むうちに、左手の青色の波浪の單調と、右手の綠色の大波の單調とは灰色の墓地の出現によつて破られた、——それは私共の車夫が全速力て走つて、その直立した石の大きな群がりを通り拔けるのに十五分は充分かかる程長い墓地であつた。これが現れるといつても村に近づいた事を示す、しかし墓地の驚くべく大きいのに比して、村は驚くべく小さい事が分る。墓地の沈默の住民の數がその墓地を有せる村の人々よりも多い事は幾千の幾百倍てある、——その村は、數里の海岸に沿うて散在して、防風としてはただ陰氣

な松竝樹があるだけの、草葺き屋根の全く小さい部落てある。無數の、全く無數の墓石又墓石、——過去に對する現在の價の物凄き無數の證人、——そして古い、古い、古い、——そのうち數百は餘り長くそこにゐたので砂丘から吹いて來る砂だけて形も毀れ、碑銘も全く消えて居る。陸地が存在するやうになつてから、この風の吹く海岸にこれまて生きてゐた人々悉くの墓地をさながら通過して居るやうてある。

そしてこの墓場には悉く——今盆だから——墓が新らしい程新らしい燈籠、——墓場の燈籠てある白い燈籠がある。今夜多數の墓場は都會の火のやうな光て輝くてあらう。しかし又燈籠のない無數の墓、古い幾萬の墓もある、——何れも家が斷絶したしるし、或はこゝを去つた子孫がその家族の名をさへ忘れたしるしてある。古い時代の人々、その人々の精靈を呼び戻してくれる者はない、愛する地方的記憶もなくなつて居る——彼等の一生に關する一切の事はずつと以前に消滅して居る。

四

ところて大多數の村はただの漁村てある、そしてそのうちに嵐の前夜船出をして再び歸

つて來ない人々の古い草葺きの家がある。しかし溺死者も近傍の墓場に墓がある、その下に何かその人の物が埋めてある。

何てあらう。

この西の方の人々の間には、外の土地では無頓着に捨てられる物——臍の緒——はいつも保存される。丁寧に幾重にも包まれて、最後の上包みに父と母と幼兒の名と、出生の日の時刻とを書いて、——家の守袋に納めて置く。娘は嫁入りの時、新家庭へ携へて行く、息子の方のは兩親が保存してくれる。死ぬ時はそれを一緒に葬る、外國で、或は海で死ぬ事があれば、遺骸の代りにそれを墓に納める。

五

船に乘つて海に行き、そこに止まつて歸らない人々に關して、この遠隔の海岸では妙な信仰が行はれる、——墓の前に白い燈籠をかける優しい信仰よりは、たしかに、もつと原始的な信仰である。溺死者は決して冥途へは行かないと信じて居る者がある。彼等は永久に流れの間に漂ふ、潮の動搖と共にうねる、船のあとに續いて動く、大波の碎ける時に叫

ぶ。激浪の跳ぶ時上るものは彼等の白い手である。礫をざらざら音をさせたり、引浪が引く時游泳者の足をつかんだりするのは彼等の拳である、それで船乘はこのお化けの事を婉曲に云つて、非常にそれを恐れる。

それで船には猫を飼ふ。

猫はお化けを追拂ふ力がある物ときめられて居る。どうして、又何故かについて私に告げてくれる人が未だ見つからない。私は猫は死者を支配する力があると考へられて居る事だけを知つて居る。死骸と猫だけを置いたら、死骸は起きて躍り出さないだらうか。猫のうちでも三毛猫はそのために船乘に最も貴ばれる。しかし三毛猫が得られない場合には外の猫でもよい、それで船が港に入ると、その船の猫は大概——船側のどこか小さい窓から覗いたり、大きな舵の動いて居る廣い場所に坐つたりして居るのが見られる、——卽ちもし天氣がよく、海が靜かであれば。

六

しかしこんな原始的な恐ろしい信仰があつても、盆の時節には美はしい佛教の信仰を行

ふ事には變りはない、それてこの小さい村々から十六日に精靈船が出る。精靈船は日本の外の地方よりも、この海岸では餘程精巧に又費用をかけて造られる、骨組の上を藁で包んて造つてあるだけてはあるが、何れも細(コマカ)い點まて完全にてきて居る小船の面白い模型である。三尺から四尺までの長さのもある。白い紙の帆に戒名が書いてある。新しい水を入れた小さい水入れと香爐をのせてある、それから上側板に神祕的な卍(マンジ)をつけた小さい紙の旗がひるがへる。

精靈船の形とそれを流す時と仕方に關する風習は國々によつて餘程違ふ。精靈船の代りに燈籠だけ、——その目的のためにのみ造られた特別の種類の燈籠——を流すのが或漁村の習慣だと私は聞いて居る。

しかし出雲の海岸、及びこの西の海岸に沿うた他の地方ては、精靈船は海て溺死した人のためにのみ流される、それから流す時刻も夜てなくて、朝てある。死んてから十年間は毎年一回、精靈船を流すが十一年目からはこの儀式はない。稻佐て見た多くの精靈船は全く美しかつた、そして貧しい漁村の人々にとつては隨分多額の金がかかつたに相違ない。しかしそれを造つた船大工の話ては、溺死した人の親戚は悉く金を寄附して、年々小さい

船を求める。

七

上市と云ふ寂しい小さい村の近くて、私は名高い聖い樹を見物するためにしばし休息する。それは大通りに近いが低い丘の上の森の中にある。その森に入ると、三方が甚だ低い崖て圍まれた小さい谷のやうな處へ出る、その上の方へ計られぬ程老いた巨大な松の樹が何本か聳えて居る。その大きなうねつた根は堀の表面を貫いて岩を割つて出て居る、それからその交つた松葉はその盆地に綠のたそがれを作つて居る。一本は甚だ妙な形の大きな根を三本つき出して居るが、その端(ハシ)が何か祈禱の文句を書いた長い白い紙や、海草の供物て卷いてある。何かの傳說によるよりは、むしろこの根の恰好が一般の信仰から見てこの樹を神聖にしたらしい、それは特別の崇拜の目的物てある、そして小さい鳥居がその前に建ててある、それには最も不器用なそして妙な種類の奉納文がのせてある。私はその飜譯をここに出す事はさし控へる——しかし人類學者や民俗學者にはたしかに特殊の興味があるに相違ない。樹木の崇拜或は少くとも樹木のうちに存在すると想像される神の崇拜は大

多數の原始的種族に多分共通な、そして以前は日本にも博く行はれた。生殖器崇拜の珍しい遺物である。實際それが政府によつて禁止されてから二三十年にもなるまい。小さい盆地の向う側に、大きな、堅くない岩の上に同じく不器用な、同じく妙な物——祈禱者の物が置いてあるのを見る。二つの藁人形——互にもたれかかつた男女の人形である。細工は子供らしく不器用である、それでも藁一本で女の髪を巧みにまねて女は男と區別ができる。それから男には、今封建時代の老年の殘存者しかもたない丁髷がついて居るから、私はこの祈禱者の物は何か古への、そして全く慣習的模型によつて造られたものであらうと思ふ。

さてこの奇妙な奉納物はそれ自身問はず語りをしてゐる。愛し合つて居る二人の男女は男の過ちて別れる事になつた、多分どこかの女郎に迷うて女に不實をする氣になつたのであらう。それから不實をされた女はここに來て迷の雲を晴らし、誤れる心を直して貰ふやうに神に祈つた。その祈りは聞き届けられた、二人は再び一緒になつた、それて女はそのために二つの妙な人形を自分の手て造つて、——彼女の無邪氣な信仰と感謝の心のしるしとして——松の樹の神に捧げた。

八

濱村と云ふ小さい美しい村に着いた時、日が暮れた、明日から内地の方へ向ふから、ここは海岸での私共の最後の休み場所であつた。私共の泊つた宿屋は甚だ小さいが甚だ物綺麗に小ぢんまりして居る、それから有難い温泉がある、宿屋はその温泉の出口に近い所に建つて居る。不思議な程(ほど)落に近いこの温泉はこの村の家全部の浴場に供給して居ると私は聞いた。

宿屋では最上等の部屋を私共にあててくれる、しかし私は明日流す事になつて往來の入口に近く、臺の上に置いてある甚だ立派な精靈船を見るために暫らく止まる。ほんの少し前にでき上つたらしい、新しい藁屑がそのあたりに散らかつて、戒名は未だ帆の上に書いてない。この船は貧しい寡婦とその息子、二人とも、この宿屋の奉公人てある人達の物であると聞いて驚く。

私は濱村で盆踊を見ようとあてにしてゐたが、失望する。村では警察が踊りを禁じて居

る。コレラを恐れてこんな嚴重な衞生規則を出す事になつた。濱村では飮料、料理用、洗濯用として水を使用してはならない、ただ温泉だけを使用するやうに命令されて居る。

非常に聲のよい小柄な中年の女が晩飯の時給仕に來る。二十年以前、既婚の女がしたやうに齒を黑くして眉を剃つて居る、それても彼女の顏はやはり愉快な顏である、若い時には並すぐれて綺麗であつたに相違ない。女中として働いては居るが、宿屋の人々と親類になつて居るので、親類相當な思ひやりて待遇されて居るらしい。この女の話では精靈船は夫と弟——八年前、二人ともうちの見える所まで來て死んだこの村の漁師達——のために流される事になつて居る。隣りの禪寺の僧が翌朝來て帆の上に戒名を書いてくれる、このうちには漢字を書く事の上手な人はゐないから。

私は彼女にきまりの僅かな心づけをする、それから私の從者によつて、彼女の身の上を色々尋ねる。彼女は自分よりずつと年上の夫と結婚して、甚だ幸福にくらしてゐた、それから十八歳の少年であつた弟も一緒にゐた。よい船を一艘と少しばかりの地所を持つてゐた上、彼女は機織が巧みであつたので、とにかく樂にくらしてゐた。夏になると漁師は夜、魚を取る、船が皆出ると二哩か三哩の所て、一群の星のやうに、沖に一列の炬火を見るの

は綺麗である。天氣の惡くなりさうな時には出ない、それても月によつては、颱風が突然起つて、帆を上げる暇もないうちに、船に追ひつく。彼女の夫と弟が最後に出た晩はお寺の池のやうに海は靜かであつた、颱風は夜明け前に起つた。それからの事は、私共のはるかに不器用な言語て、私が飜譯する事がてきない程あつさりした悲哀な調子て彼女は述べる。

『船と云ふ船は皆歸りましたが、夫の船だけは歸りません、夫と弟は外の人達よりもずつと向うに行つてゐたので、そんなに早く歸られませんでした。みんな見て待つてゐました。波は一分毎に高くなり、風は恐ろしくなるやうてした、それて外の船も流されないやうにずつと岡の方へ引上げて置かねばなりませんてした。ところが不意に夫の船が大變、大變早く來るのが見えて來ました。喜びましたね。隨分近く來たので夫の顏も弟の顏も見えました。ところが不意に橫波が船の一方にぶつかつたので、船が水の中へ沈んて、出て來ませんてした。それから夫と弟が泳いて居るのが見えました、しかし波て上げられる時しか見えません。山のやうな海てした、それて夫の頭と弟の頭がずつとずつとずつと上つて、それから下へ下りる、それて私達の方て見える程波の頂上に上る時いつも二人が「助けて」と呼んてゐます。しかし强い人達ても恐れてゐます、海は餘りこはい、私はただ女

てす。それから弟はもう見えなくなりました。夫は年取つてゐましたが、大變強い、それて長い間泳いでゐました、――餘り近いので、私は夫の顏が恐れて居る人の顏のやうであ る事が分りました、――そして「助けて」と呼んでゐました。しかし助けてくれるものはありません、それでたうとう夫も沈みました。それでも沈む前に夫の顏が見えました。

『それからあと、長い間、その時見た通りの顏がいつも見えました、それて私は眠られないて泣いてばかりゐました。それから私は佛樣や神樣へその夢を見ないやうにとお祈りを致しました。もうその夢は見ません。が、かうしてお話をして居る時でも、やはり夫の顏が目に見えます。……その時分私のむすこはほんの子供でした』

この簡單な話を終る時彼女は忍び泣きをしないては居られなかつた。それから、不意に疊まで頭を下げて、袖て涙をふいて、こんな風に私情を少し露出した事を丁寧にわびて、そして笑つた――日本の禮儀の眞髓とも云ふべき柔らかな低い笑てあつた。私は白狀するが、この笑は話その物よりも一層深く私を感動させた。適當な時に私の從者は巧みに話題を變へて、私共の旅について、それから旦那樣がこの海岸の古い習慣や昔話に興味をもつて居る事について、輕い話を始める。そして私共の出雲漫遊の話を少しして彼女を喜ばせ

る事がてきた。

彼女は私共に何處へ行くかと尋ねる。私の從者は多分鳥取までと答へる。

『あゝ、鳥取。さやうてございますか。……ところて、鳥取の蒲團と云ふ古い話がありますが、旦那樣は御存じてゐらつしやいませうね』

ところがその旦那樣は御存じでない、そして熱心にそれを聞かせて貰ひたいと云ふ。そして私の通譯の唇から私が先づきいた通りにここにその話をかく。

九

昔、鳥取市の至つて小さい或宿屋が開業してから始めてのお客として一人の旅商人を迎へた。宿屋の主人はその至つて小さい宿屋の評判をよくしたいから、このお客は尋常以上の親切を以て迎へられた。新しい宿屋てはあつたが、持主が貧しいから道具――家具器物――の大部分は古手屋から求めたのてあつた。それても一切の物はさつぱりして、氣もちよく、綺麗てあつた。お客は御飯も旨く喰べ、暖い酒も澤山飲んだ、それから柔かな床は疊の上にのべられたので、お客は眠りにつくために横になつた。

「ここて暫らく話を中止して、日本の寝床について一言云はねばならない。誰かうちに病人でもない限り、讀者は日中どこか日本家屋に入つて部屋と云ふ部屋を悉く、それから隅から隅までのぞいて見ても床と云ふ物を見る事は決してない。實際、西洋の床と云ふ意味のものは存在しない。日本人の云ふ床には寢臺もバネもしとねもシートも毛布もない。ただ蒲團と云ふ厚い綿を入れた、むしろ、平均につめ込んだ厚い夜具があるだけ。疊の上に何枚かの蒲團を敷いて、何枚かの蒲團をその上にかける。富んだ人々は五枚六枚の蒲團の上にねて、好きな程の蒲團をかける事もてきるが、貧しい人々は二枚か三枚で滿足せねばならない。それから、西洋の爐の前の敷物より大きくもなく厚くもない木綿の蒲團から長さ八尺幅七尺と云ふ金持ちてなければ着られないやうな重い立派な絹蒲團に到るまで勿論種類は多い。その上着物のやうに大きな袖のある大きな蒲團の一種て夜着と云ふのがある、殊の外寒氣の強い時にこれを着ると大層氣もちがよい。凡てこんな物は、日中は見えないやうに、壁に工夫して造つてあつて、ふすまて閉ぢてある押入れにしまつてある、——ふすまと云ふのは優美な圖案で普通裝飾された光澤のない紙を張つた綺麗な境をつける引戸てある。これから又そこに妙な木の枕もしまはれる、この枕は眠つてゐても亂れない

やうに日本髪を保存するためにてきて居る。

この枕も多少神聖てある、しかしそれに關する信仰の起原と正しい性質については私はよく知つてゐない。これだけ知つて居る、即ち足て枕にさはる事は甚だ惡い、たとへ偶然にてもそんな風に蹴つたり動かしたりする事があれば、その不行狀の償ひとして、手て枕を額に押戴き、『御免』と云つて恭しくもとの場所へ戻さねばならない」

さて、暖い酒を澤山飲んだあとては、殊に寒い晩て床が暖い時には、熟睡するのがきまりてある。ところでこのお客はほんの少ししか眠らないうちに、その部屋の中て聲がするので目をさました、——同じ問を互に問ふて居る子供の聲てあつた、

『兄さん寒からう』

『お前寒からう』

部屋に子供が入り込むなどと云ふ事はお客を困らせるかも知れないが、驚かす事にはならない、と云ふのは、日本の宿屋には戸と云ふ物はなくて、部屋と部屋との間にただ紙のふすまがあるだけだから。それて何か子供が暗がりに間違つて自分の部屋に迷ひ込んだに相違ないとお客に思はれた。彼は何かおだやかに小言を云つた。ほんの暫らく靜かになつ

た、それから優しい細い悲しげな聲が耳もとで『兄さん寒からう』と問ふた、すると又別の優しい聲がいたはるやうに『お前寒からう』と答へた。

彼は起きて行燈にあかりをつけて部屋を見廻した。誰もゐない、障子は皆しまつてゐた。戸棚を調べた、何にもない。不思議に思ひながら、あかりをつけたままで、又横になつた、すると、直ちに又枕もとで、聲が訴へるやうに話した。

『兄さん寒からう』

『お前寒からう』

それから始めて彼は夜の寒さでないさむさでぞつとして來た。何度も何度も聞いた、その度毎に益〻恐ろしくなつて來た。聲は蒲團の中にある事が分つたからであつた。そんな風に叫んだのは掛蒲團だけであつた。

彼は急いで自分の僅かな所持品をかき集めて、階段を下りて主人を起し、事の次第を語つた。すると主人は大層怒つて答へた、『お客様のお氣に召すやうに、萬事やつて居るわけです、全く、ところでお客様は餘り御酒を召し上つたので、變な夢を御覽になつたのです』それでもお客は直ちに拂をして外へ行つて宿をさがすと云ひ張つた。

翌晩又一人の客が來て宿泊を求めた。おそくなつてから主人は、前夜と同じ事て起され

た。不思議にも今度の客は酒を少しも飲んでゐない。主人は何か妬む人があつて、自分の商賣の邪魔をするのだらうと邪推したので、怒つて答へた、『お客様のお氣に召すやうに萬事注意して居ります、それに緣起の惡い迷惑な事をおつしやいます。この宿屋は私の生計のための物である事は——御承知でせう。何のためにこんな事をおつしやるのか、不都合千萬です』そこでお客も怒り出して、大きな聲でもつとひどい事を云つた、そして二人は非常に怒つて別れた。

しかしお客が行つたあとて、主人はどうも變だと思つたので、蒲團を調べに二階のその あき間へ行つて見た。そしてそこに居る間に彼は聲を聞いた、そして彼は二人の客の云つた事は全く事實である事を發見した。叫んだのは一枚——只一枚——の掛蒲團てあつた。あとは靜かであつた。彼はその蒲團を自分の部屋へ運んだ、それから、朝まて、それを着て寢て見た。その聲は夜明けの時刻まて續いた、『兄さん寒からう』『お前寒からう』それて彼は眠られなかつた。

夜明けに彼は起きて蒲團を買ふた古手屋の主人に遇ひに行つた。古手屋は何も知らなかつた。彼はもつと小さい店からその蒲團を買ふたのであつた、そしてその店の主人は町のずつと郊外に住んて居る一層貧しい家からそれを買ふたのてあつた。それて宿屋の主人は

尋ねながら、つぎからつぎへと行つた。

それから最後に、その蒲團は貧しい家族のものであつた事、それからその家族が住んでゐた郊外の小さい家の家主から買ふた事が分つて來た。それでその蒲團の話は、かうであつた、——

その小さい家の家賃は一ヶ月僅か六十錢であつた、それでも貧しい人達にとつては中々の大金であつた。父は一ヶ月に二三圓しか儲けられない、母は病氣で仕事ができない、それから子供が二人、——六つと八つの男の子があつた。それからこの人達は鳥取では外から來た人達であつた。

或冬の日に父が病んだ、一週間病んだあとて、死んで葬られた。それから長い間床についてゐた母はそのあとを追ふた、そして子供等だけ殘つた。助けて貰ひに行く人を誰も知らなかつた、そして生きるために何でも賣られるものを賣り始めた。

澤山はなかつた、死んだ父と母の着物、それから彼等自身の着物の大部分、木綿の蒲團、それから僅かなあはれな道具類——火鉢、椀、茶碗、それから外のつまらぬ物ども。毎日何か賣つて、最後に一枚の蒲團の外何にもなくなつた。それから何にも喰べる物のない日が來た、それから家賃が拂つてなかつた。

恐ろしい大寒が來た、その日は餘り雪が高く積つたのでその小さい家から遠く離れて出て行かれなかつた。それて一枚の蒲團の下に一緒にねて、一緒にふるへて、子供らしく互に慰め合ふより外はなかつた、——

『兄さん寒からう』

『お前寒からう』

火はなかつた、火をつくる材料は何もなかつた、そして暗くなつた、それから氷のやうな風が小さい家の中へ悲鳴をあげて入つて來た。

彼等は風を恐れたが、家賃を取立てに荒々しく彼等を引起す家主を一層恐れた。彼は惡相をした無情の男てあつた。そして拂つてくれる人のゐないのを見て、子供等を雪の中に追出し、たつた一枚の蒲團を取上げて、家に鍵をかけた。

彼等は銘々青いうすい着物を只一枚しか着てゐなかつた、外の着物は皆食物を買ふために賣られたからであつた、それからどこへ行くあてもなかつた。餘り遠くない處に觀音堂があつた、しかしそこまで行くには雪が餘り深かつた。それて家主が行つてから、家のうしろにたどり戻つた。そこて寒さのための眠氣が彼等を襲ふた、そこて彼等は暖を取らうとして抱き合つた。それから眠つて居る間に神々は、新しい蒲團——物すごい程白い、そ

して非常に綺麗な蒲團――て彼等を包んだ。それて彼等はもう寒さを感じなかつた。長い間彼等はそこに眠つてゐた、それから誰か彼等を發見して、千手觀音堂の墓場に彼等のための安眠の床がつくられた。

こんな話を聞いたので、宿屋の主人は蒲團をそのお寺の僧侶に寄附して、小さい魂のために讀經して貰つた。それて蒲團はそれから物を云はなくなつた。

一〇

話が一つ出ると又別のが出る、それて今夜珍しいのを澤山聞く。最も著しいのは私の從者が急に想ひ出した話て――出雲の傳說てある。

昔、出雲の持田の浦と云ふ村に或農夫がゐた、餘り貧乏なのて子供をもつ事を恐れてゐた。それて妻が子供を生む毎に川に投げ込んて、そして死んて生れたのだと云ふ事にしてゐた。男の子の事もあり、女の子の事もあつたが、生れ兒はいづれも、夜、川へ投げ込ま

れた。こんなにして六人殺された。

しかし段々年がたつに隨つて、農夫は以前より富んで來た。土地を買つたり、金を蓄へたりする事ができた。それからたうとう妻は七人目の子供、男の子を生んだ。

そこて男は云つた、『もう子供は養つて行ける、それから年を取つてから世話をして貰ふむすこが要る。この男の子は綺麗だ。それてこれは育てる事にしよう』

そして幼兒は生長した、このかたくなな農夫は毎日自分て自分の心が分らくなつて來た、――それは毎日むすこ可愛の念が募つて來たからてあつた。

或夏の夜、彼は子供を抱きながら庭に出た、子供は五月たつてゐた。

夜は非常に美しく、大きな月が出てゐた、それて農夫は叫んだ、――

『あゝ、今夜珍らしいゑゝ夜だ』

すると子供は父の顔を見上げながら、おとなの言葉て云つた、――

『おとつあん、わしをしまひに捨てさした時も、丁度今夜のやうな月夜だつたね』

そしてそれから子供は同年の外の子供と同じになつて何にも云はなかつた。

農夫は僧になつた。

註。この農夫と子供の言葉は出雲の方言。

一一

晩飯も風呂もすんだが、餘り暑くてねられないから、獨りて村の墓地を見に出かける、その墓地は砂丘の上にある長い墓地てある、砂丘と云ふよりはむしろ砂の山て、頂上だけ少し土に蔽はれて居るが、その崩れかけて居る側面を見ると今日の汐よりもつと巨大な古代の汐て創造された歴史を物語つて居る。

墓地に達するために膝まて砂を渡る。大きなそよ風の吹く暖い月夜てある。盆の燈籠は澤山あるが、海の風は大概の火を吹き消した、ただあそこ、ここに極めて僅かな火が柔らかな白い光を投げて居る、——綺麗な社(やしろ)がたの、何かの象徴の形のすきの間のある木の箱に白い紙をはつた燈籠である。時刻はおそいから私の外に人はゐない。しかし今日はここて餘程心づくしの仕事が行はれたわけてある、凡て竹の筒には新しい花や小枝が挿され、水鉢には新しい水が滿たされ、墓石は清められて綺麗になつてゐたからてある。それから

墓地の一番奥の隅に、一つの甚だ質素な墓の前に、完全な小さい日本の美味を盛つた皿や椀をのせた美しい膳を私は見つける。それから新しい箸と小さい茶の碗がある、御馳走のうちには未だ暖いのもある。愛情のこもつた女の仕事てある、その小さい草履の跡は路の上に未だあざやかに殘つて居る。

一二

アイルランドの俚言にどんな夢ても、もしその夢を見た人がさめてから想ひ出さうとして頭をかく事をさへしなければ想ひ出せると云ふのがある。しかしこの用心を忘れたらその夢は決して記憶にかへつて來る事はない、吹き去られた烟のたな引きの渦きは元の通りの形にはてきないと同じ事てある。

千の夢のうち、九百九十九までは全く望みなく消えて無くなる。しかし珍しい經驗によつて想像が妙に印象を受けて居る時に來る、或珍しい夢、——旅行中に特に起り易い夢——は實際の出來事のやうに全くはつきりと印象されて、記憶に殘る。

私がこれまて書いたやうな事を見聞したあとて、私が濱村て見た夢はこんな夢てあつた。

どこか青白い廣い敷石のある場所――事によればお寺の中庭のやうな所――それはかすかな日光で染められて居る、そして私の前に若くもなく老いてもゐない婦人が大きな灰色の臺の下に坐つて居る、その臺は何をのせて居るのか私は女の顏しか見られないから分らない。そのうちに私はその女に覺えがあると思つた――出雲の女であつた、それからその女は氣味惡くなつて來たやうだ。唇は動いてゐたが、眼は閉ぢてゐた、そして私は彼女を見ないわけには行かなかつた。

それから數年の距離を通つて細くなつて來るやうに思はれる聲で、柔らかな悲しい歌を始めた、そして聽いて居ると、ケルトの子供歌のかすかな記憶が自分に歸つて來た。それから歌つて居るうちに、一方の手で長い黑い髮を解いたら、それが石の上に環になつて下つた。それから下つて見たら黑くはない、靑い、――靑白い、日のやうな靑色になつて、速い靑い細波（サザナミ）をあちこちにつくつて押しよせながら、うねり始めた。その時、不意に、その細波（サザナミ）は遙かに、ずつと遙かに續いてゐて、女はゐなくなつて居る事に氣がついた。音のない波の長いのろい閃きをもつて、天の端まで靑い大波をあげる海が、ただあるだけであつた。

それから眼をさまして、私は夜中に本當の海のつぶやき――佛海の巨大なかれ聲、――歸りの精靈の潮――を聞いた。

第二十二章　舞妓について

日本の宴會の始めほど靜かなものはない。日本人てない以上は、誰人も開宴の光景を見て、結末の賑かさを恐らくは想像し得ないだらう。

羽織を着た客達は、全く音を立てずに、また物も云はないで、座布團の上に、彼等の席に就く。漆塗の食膳が彼等の前に疊の上に据ゑられる。それを運んでくる女中達の、露出せる足は、少しの音も立てない。暫くの間は、一座たゞ微笑と輕い動搖があるのみて、恰も夢の中のやうだ。外部からの聲も滅多に聞えて來ない。それは料理屋の座敷は、通常澗やかな庭園て街路を隔ててゐるからだ。たうとう饗宴の主人が、上品なお定まり文句て鎭靜を破る。『お粗末て御座いますが——どうぞ御箸を！』そこて客は一同默禮して、箸を取上げ、食べはじめる。しかし箸は、巧みに使はれて、音は少しも聞えない。女中達が極めて靜肅に、客毎にその杯へ熱い酒を注ぐ。して、二三の料理品を食べてしまつて、數杯の酒を乾した後て、漸くにして喋々の語聲が起つてくる。

すると、忽然わっと輕く笑ひ出し乍ら、數名の若い娘が入つてくる。彼等はお定まりのお辭儀をする。列座の客の中間にある、廣い場處へ滑べるやうに行つて、酒を勸める。その歎待振りの優美と巧妙は、普通の娘ては企及し得ない。彼等は綺麗て、絹の贅澤な服裝をして、女王のやうな帶をつけてゐる。して、銘々の美しく結つた髮には、造花や、驚くべき櫛や留針や珍らしい金の飾りが附けてある。彼等は初對面の客に向つても、以前から知つてゐた如くに挨拶をする。彼等は冗談をいひ、笑ひ、きやつ〳〵と面白さうに叫ぶ。これが宴席に聘せられる藝者なのてある。

註。京都の言葉では舞妓（まひこ）といふ。

三味線が響く。藝者は通例の來客よりも更に多數を容れ得る大廣間の一端にある廣やかな處へ退いて、數名のものは年齡の一寸分かりかねるやうな一人の女の指揮の下に、囃の組を作る。それには數個の三味線と、少女が打つ小さな太鼓がある。他のものは、一人づつて、又は二人づつの組になつて、舞踊する。それは全く優美な姿勢から成つた、輕快て陽氣な踊りて、二人の娘はいかにも數年の稽古を積んだればこそ始めて出來るやうに、よく足を揃へ、身振を一致させて、共に踊るのだ。が、私共西洋人が舞踏と稱するものに似

てゐるよりは、寧ろ所作に似てゐる場合が一層多い——袖や扇子を異常に振つたり、眼や容貌を美はしく、機敏に、控へ目に、全然東洋風に働かせたりして所作を演ずる。藝者の行ふ舞踊に、もつと肉感的なのもあるが、通常の場合や、上品な客の面前では、彼等は日本の美くしく古い傳說、例へば海神の娘に愛された漁師浦島の傳說のやうなものを活寫する。また折々はただ數個の美辭を以て天眞爛漫たる感情を旨く鮮やかに表現せる、古い漢詩を吟ずることもある。して、絶えず酒を注ぐ——その熱い、淡黃色の、睡氣を催す酒は、柔かな滿足を客の血管に漲らせ、陶然恍惚裡に入らせる。すると、阿片を喫した人の醉眼に映ずる如く、平凡は驚異喜樂と變はり、藝者は極樂の少女と變はり、世界は事物自然の理では、到底あり得べくもないほど立派な光景に變つてくる。

最初非常に靜かな宴會が、段々と賑かな騷ぎになつて行く。客の列は亂れて、三々五々の集團となる。藝者は笑ひながら、喋りながら、この一團から、彼の一團へと移つて、酒を注ぐ。酒杯(註)は叩頭の禮を以て獻酬される。客が古い武士の歌、卽ち漢詩を吟じ始める。一人か二人は、踊るものさへある。或る藝者は膝まで衣裳を捲くり上げる。して、三味線は『金比羅、舟、舟』の急調を奏し始める。その音樂につれて、彼女は輕快敏捷に8の字の形に走る。それから、酒德利と杯を持つたまゝ、一人の若い客も同じ8の字形に走る。

もし兩人が線の上で出逢へば、衝突の失策を起した方が、一杯の酒を飮まねばならぬ。音樂はます〳〵早くなつて、走るものもます〳〵早く走る。それは彼等は調子に合はせねばならぬからだ。して、藝者が勝を占める。室の他の方面では、客と藝者が拳をやつてゐる。彼等は拳を打ち乍ら歌ふ。相向き合つて、手を拍ち、折々小さな絶叫を發して、勢よく指を差し出す。して、三味線が拍子を取る。

註。酒杯を杯洗で濯いでから、他客のと交換することが普通である。友人の酒杯を求むるのは、厚意の表彰である。

ちよいと——どん〳〵！　お互だね、
ちよいと——どん〳〵！　御出でましたね、
ちよいと——どん〳〵！　しまひましたね。

さて、藝者と拳を打つのは、全然冷靜なる頭腦、敏捷なる眼、それから多大の熟練を要する。子供時代からあらゆる種類の拳を打つことに仕込まれてゐるから——しかも拳の種

類は多い――萬一彼女の敗ける場合があつても、それは概して禮儀上から敗けるのに過ぎない。最も普通の拳の表象は、庄屋と狐と鐵砲である。もし藝妓が鐵砲の表象をすれば、相手の客は直ぐに、音樂に合はせて、庄屋の表象をせねばならぬ。庄屋へ向つて發砲することは禁制だからである。もし相手が庄屋の表象をすると、彼女は狐の表象を以て應ずる。狐は人間を瞞して、客の負けとなる。して、もし彼女が最初狐の表象をすると、客は鐵砲の表象をせねばならぬ。それで狐を殺すことが出來る。しかし始終、男は女の明眸軟手を注意してゐなければならぬ。眼も手も美くしいから、ただ瞬間でも、男が油斷をして、その美しさを考へてもすると、それに惱殺されて負けを取ることになる。

譯者註。原文の拳の說明を少しく修正して置いた。

外見上では、非常に親しさうであるが、日本の宴席では客と藝者の間には、一種の嚴重な禮儀が、いつも守られてゐる。いかほど客の顏が酒で赧らんできても、彼が女を愛撫しようとするのを見受けることはない。女は單に人間の花として、宴席に現はれたので、眺めるためであつて、決して觸れるためでないといふことを彼は忘れない。日本に於ける漫遊の外客が、屢〻藝妓や給仕女に對して無遠慮な馴々しさに陷るのは、假令微笑を以て耐

へ忍ばれてゐても、實際は頗る嫌惡されてゐるので、またこれを傍觀する日本人からは、非常に俗惡下劣の證據と見做されてゐる。

暫くの間、快興は加つて行く。しかし夜半が近づくに隨つて、客は一人々々いつの間にか分らぬやうに、こつそり去つて行く。それから賑ひは次第に消えて、音樂は止む。たうとう藝妓共は最後の客を玄關へまで送り出して、『左樣なら』と笑ひ聲で叫んだ後、長い間空腹でゐた彼等は、靜まり返つた廣間で、始めて彼等の食事に就くことが出來る。

藝妓の役目はかやうなものだ。が、彼女の裏面はどんなもの？煌々たる宴席の燈光圈を離れ、酒の霧が彼女の周圍に釀せる幻影外に於ける、彼女の生活の眞面目はどう？

君と寢やるか、五千石取るか、
何の五千石、君と寢よう。

と、昔の歌を彼女が愚弄するやうに、甘美な聲を迸らせて歌つてゐる際の如く、いつも彼女は惡戲者だらう？或はまた、

お前死んだら、寺へはやらぬ、
焼いて粉にして、酒て飲む。

と、彼女がうまく歌ふ、其熱烈なる約束を守り得るものと、彼女を思つてもよいだらう？

『何、それについては』と、或る友が私に告げた。『つい昨年のこと、大阪のお鍊といふ藝妓は、その歌の通りにやりましたよ。茶毘に附した戀人の屍灰を酒に混ぜて、宴會の席上、多數の客の前で飲んださうです』多數の客の前で！物語に取つて惜しいことだ！

註。昔、藤枝外記といふ將軍の旗下があた。五千石の祿を受けてゐた——當時に於ては大なる收入であつた。しかし彼は吉原の遊女綾絹と戀に落ちて、彼女を妻にしようと願つた。彼の上司が、祿と戀のいづれかを選べと彼に嚴命した時、男女の戀人達は密かに或る農家へ逃げて行つて、心中をした。そこで、兩人に關して上の歌が作られた。今猶、それは歌はれる。

藝妓の一團の住む家には、奇異な像が床の上に置いてある。それは粘土製のこともある。稀には黄金で作られ、最も普通には陶器で作られる。それは拜まれ、菓子や餅や酒などの供物が上げられ、その前に線香が燻ぶり、燈明が輝いてゐる。それは猫の像てある。直立

して、一本の足を伸ばして招くやうな形をしてゐるから、「招き猫」といふ名がある。それは氏神様だ。それは幸運、富豪の最屓、宴遊者の眷顧を齎らす。それて、藝妓の本性を知つてゐる人々は、この像は取りも直さず藝妓の像だと斷言する——冗戯好きて、綺麗て、柔かて、若くて、しなやかて、愛撫的て、而かも焼き盡くす火の如く殘酷だ。

また彼等は更に一層わるいことを彼女に關して語つてゐる——彼女の蔭には貧乏神が寄り添つて歩いてゐる。狐婆は彼女の姉妹だ。彼女は青年の滅亡者、財産の蕩盡者、家族の破壞者だ。彼女は戀を單に彼女の利益となるべき放蕩の源としてのみ知つてゐる。して、彼女が墓を作つてやつた人々の財産によつて、みづからの富を作る。彼女は可愛らしい僞善の最上の熟練家、最も危險なる陰謀者、最も飽くことを知らざる射利漢、最も冷酷の情婦だ。それは全部眞實とは云へないが、これだけは眞實だ——職業上藝妓は、小猫の如く に肉食の猛獸なのだ。實際眞に愛らしい小猫も澤山ある通り、眞に愉快な藝妓もあるに相違ない。

藝妓はたゞ、青春と優美だけを混ぜた戀、殘念といふ心や、責任といふ觀念の加はらぬ戀の幻影を慕へる、愚かな人間の慾情に應ずるために作られたものに過ぎない。だから、彼女は拳を打つことの外に、人情を戲弄する手管をも教へられてゐる。さて、宇宙永遠の

法則によれば、人間はこの不幸な世の中で、三つのものを除けば如何なる遊びをしても無害である。三つといふのは生、愛、死だ。是等三者は神々の手に保留されてある。といふのは、誰人も是等を戯弄すると災を招かずに居れないからだ。だから拳或は少くとも闘技以上、更に重大なる遊びを藝者と共にすることは、神々の御氣に入らないのである。

藝妓の經歴は奴隷として始まる。貧窮な親から綺麗な子を契約の下に買受けて、十八年、二十年乃至二十五年間も、買主は彼女を使用する權利がある。彼女は藝者達だけの住む家て、養はれ、着物を與へられ、藝を仕込まれる。して、子供時代を嚴しい訓練の下に過ごす。彼女は禮儀作法や、優美な風姿や、鄭重な言葉を教へられる。また幾多の歌の文句と曲調を諳誦せねばならぬ。それから、遊戯や、宴會婚禮の給仕や、衣裳の着こなしや、美容の法を知らねばならぬ。彼女の有する身體上の藝能は、すべて注意して修養される。後に及んで樂器を取扱ふことを教へられる。先づ鼓を教へられる。これは餘程の練習なくては、すこしも音を發しない。つぎに鼈甲または象牙の撥て、少しく三味線を彈くことを習ふ。八歳或は九歳の頃は、彼女は主として鼓を打つものとして宴席に侍する。そのとき彼女は最も可愛らしい子供であつて、鼓を二回打つ間に、德利を一と振りふつて、一滴も零

さないて、正しく滿々と酒を杯に注ぐことを、最早知つてゐる。

それから後は、彼女の訓練は一層殘酷となる。彼女の聲は充分柔靱自在てはあるが、まだ力が足りない。冬の夜の最も凍つた時刻に、屋根へ出てて、血が指から沁み出て、聲が嗄れてしまうまて、歌つたり彈いたりせねばならぬ。その結果猛惡な風邪に罹るのが目的だ。或る期間の嗄れた囁き聲を經過すると、彼女は聲の調子が變はり、力が出來て、客の前へ出て、歌ひ踊る資格を得る。

この資格て、彼女は通常、十二歳乃至十三歳て初目見をする。もし綺麗て上手てあれば、招聘が繁くなつて、一時間二十錢乃至二十五錢の割合て報酬を受ける。そこて始めて彼女の買主は、これまての稽古に注ぎ込んだ時間、費用、骨折に對して拂戻しが出來てくるのてあるが、しかも買主は兎角寛大てはない。これから多年の間、彼女の一切の儲けは、買主の手に歸して行く。彼女はすこしも得る處なく、自身の衣裳さへも所有しない。

十七八歳にもなると、彼女は技藝の上て名聲を博してゐる。最早幾百の饗應に侍したので、一見して、町の重要な人物、一人々々の性格、すべての客の身の上がわかる。彼女の生活は、主もに夜間の生活て、藝妓となつてからは、旭日の昇るのを滅多に見ることはない。酒を飲んても本心を失はぬやうに、七八時間食事をしないても身に障らぬやうに慣れ

てきてゐる。幾多の戀人も有してゐる。或る程度まで、自分の好きな人に微笑を向けても勝手である。しかし彼女は何事にも優つて、彼女の魅力を自身の利益のために利用するやう、充分よく教へられてゐる。彼女を身受けする意志と能力ある人を見出さうと望んでゐる——その人は、戀の愚かさと諸行無常を說ける佛教の經文中に、幾多の新しく、立派な意味を、將來發見すること殆ど請合だ。

彼女の經歷の話を、この點で、私共は打切らう。これから後の彼女の物語は、彼女が若くて死ぬる場合を除けば、往々不快なものになり勝だからである。もし早世の節は、仲間から葬式を營まれ、その名殘りが種々の珍らしい儀式で保たれる。

時として、多分讀者が夜間日本の町を逍遙するとき、寺の山門から藝妓の鋭い聲と共に浮んでくる音樂を——三味線の響を耳にするだらう。それは奇異な事件と思はれるだらう。して、奥深い境内は見物の人で滿ちてゐる。それから群集を押分けて、寺の階段に達すると、二人の藝妓が本堂の疊の上に坐し、三味線を彈き乍ら歌つてゐて、今一人のは小さな机の前で踊つてゐるのが見える。机の上には位牌が置かれ、机の前には小さな燈明が輝き、唐金の碗には線香が燃えてゐる。果實や菓子など、記念の式日に死人に供する習となつてゐる僅かの食品が獻げてある。机の上の戒名は、ある藝者の戒名であつて、亡くなつた女

の友達は、一定の日に寺へ集つて、彼女の靈を歌と踊を以て欣ばせるのだといふことがわかる。その場合には、希望のものは誰でも會費なくして、その式に參會することが出來る。

しかし昔の藝妓は、今日の藝妓のやうではなかつた。或るものは白拍子と呼ばれて、彼等の心は左ほど無情ではなかつた。彼等は美しかつた。彼等は黄金の飾をつけた、女王らしい形の帽子を被り、華麗な衣裳を纏ひ、大名の館で劍の舞をした。その一人についての昔話がある。私はそれは語る價値のあるものと思ふ。

一

今も猶、さうであるが、昔は日本の若い畫家は、全國各地を徒歩で旅行する風があつた。それは名所を見たり、寫したり、且つまた多くは非常に風致に富める地にある寺院に藏せらるゝ名畫佳什を研究するためであつた。主もにかゝる遍歷の結果として、今日非常に珍重せられる、かの風景畫や、風俗畫の美麗な書籍が出來たのだ。それによると、日本人の眼が日本の風景を描き得ることを最もよく示してゐる。讀者が日本畫家の日本の自然を解

釋する技巧に眩じんでくると、同じ方面に於ける外國人の試作は、妙に平凡無氣力と見えてくるだらう。外國の畫家は、彼の見るものの寫實的映像を與へる。しかしそれ以上の何をも與へない。日本の畫家は彼の感じたもの——季節の氣分、正しくその時間、その場所の精確なる感じを與へる。彼の作品は西洋の藝術には滅多にない暗示力の特質を有する。西洋の畫家は緻密なる細部を現はし、彼の惹き起こす想像力を滿足させる。が、東洋の彼の同胞畫家は、細部を抑へてしまうか、または理想化する——遠いものを霧に浸したり、風景に雲を纏はせたりして、彼の經驗を單に奇異なもの、美しいもののみが、其感覺と共に殘つてゐる記憶となすのである。彼は想像力に超越し、それを興奮させ、それをしてただ瞥見の中に認めた美を、慕ひに慕はしめるまゝにしておく。それにも係らず彼はかゝる瞥見に於ても、一種の殆ど魔法と思はるゝやうな方式で、ある時の感じ、ある場所の感じを表現することが出來る。彼はきつぱりした現實よりは、寧ろ回想と感覺の畫家だ。して、こゝに彼の驚くべき力の祕訣が存してゐる——この力は彼が感興を得た場面を未だ嘗て見ざる人では、味到し得られない。就中彼は非個人的だ。彼の描ける人物の形は、すべての個人性を缺いてゐる。しかもある階級の特徴を示す類型として無比の價値を有する——百姓の子供らしい好奇心、少女の羞恥、女郎の媚態、武士の自己意識、子供の可笑しげに、

落付いた可愛らしさ、老人の諦め悟つた溫和。旅行と觀察によつてこの藝術は、發達させられた。それは決して畫房の所産ではなかつた。

餘程昔のこと、繪畫修業の一青年が、京都から江戸へ山を越えて、徒歩て旅をしてゐた。當時は道路の數は乏しく、また惡路てあつたので、旅行は、今と比ぶれば非常に困難て、「可愛い子には旅をさせ」といふ諺も行はれてゐた。しかし土地は今とは異らなかつた。今と同じやうな杉や松の森、竹藪、草葺の屋根を有する尖つた村落があつた。泥濘の中に腰を曲げた百姓の大きな黃色の蓑笠が、段々をなして相連る稻田の中に點綴せる光景も同じてあつた。路傍からは、今と同じ地藏の像が、今と同じ寺へと通つて行く巡禮者に笑顏を向けてゐた。して、今と同じく、夏の日には、すべての淺い川の中には褐色の裸の子供が笑つてゐて、すべての川は太陽に向つて笑つてゐた。

が、繪畫修業の青年は、「可愛い子」ても何でもなかつた。彼は從來幾多の旅をして、粗食と荒々しい宿に馴れ、あらゆる難境をも堪へて利用してきた。しかし今度の旅には、ある夕方既に暗くなつてから、食物も宿も獲られさうにない、田や畠の見えない地方に入込んだ。或る村へ達しようと、山を越えて捷徑を求めた際、道に迷つたのてあつた。

月はなく、松の蔭のため、その邊は眞暗であつた。彼の迷ひ込んだ處は、全く荒涼たる土地のやうに思はれた。ただ松風の音と鈴蟲の絶え間なく鳴く聲ばかりであつた。彼は躊きながら進んで行つた。どこかの川の堤へ達すれば、それに隨ひて村落へ出られるものと思つてゐた。たうとう一本の川が突然彼の道を遮つたが、それは絶壁の峽間に注ぐ急流であつた。止むを得ず後戻りをして、最も近い絶頂へ登つて、そこから人里の徴候を認めようと決心した。が、そこへ達してみると、見渡す處、たゞ山岳重疊であつた。

彼が丁度星の下で、その夜を過ごさうと覺悟してゐると、登つてきた山の向うの方の坂の下に、まさしく或る人家から洩れ出る一つの細い黄色の燈光を認めた。彼はその方へ足を進めて、やがて百姓の家らしい一軒の小屋を發見した。先きに見た燈光は、まだその鎖せる雨戸の隙から流れてゐた。彼は急いて行つて、戸を叩いた。

二

戸を叩いて數回呼んでから、漸つと内側に何か動く氣配がした。それから、何の御用ですかと尋ねる女の聲がした。その聲は殊の外美しかつた。またその姿は見えぬ女の言葉が、

彼を喫驚させた。といふのは、彼女は都の洗練された言葉で話したからである。彼は修業中の青年であること、山中で道に迷つたこと、出來るならば、食事と一夜の宿を得たいこと、それから、もしそれが出來ないならば、最寄りの村へ行く道を敎へて貰つても有難く思ふといふことを答へた——それに案内者を雇ふ費用は、充分有つてゐることも附加へた。返答として彼女の聲は、更に二三のことを質ね返へした。彼の通つてきた方向から、その家へ達し得たことを、女は非常に驚いた樣子であつた。が、彼の答によつて、明かに疑ひを晴らしたものの如く、内側から叫んで言つた。『すぐ參ります。今晩、村へお出になるのは御困難でせう。道中が御危うございますから』

暫く手間取つてから、雨戸が開かれ、女が提燈を持つて現れた。自身は影にゐて、旅人の顔を照らすやうに、それを翳した。彼女は無言のまゝ、彼を吟味し、それから簡單に云つた。『お待ち下さい。水を持つて參りますから』彼女は盥を取つてきて、それを戸口の階段の上に載せ、また手拭を薦めた。彼は草鞋を脱ぎ、足を洗つて、旅の塵を拂ひ、して、さつぱりした室へ案内された。その室が家の内部全體を占めて、背後に小さな板圍ひをした場所が、臺所となつてゐるやうであつた。木綿の座布團が出され、また火鉢が彼の前へ置かれた。

その時、彼は始めて女主人を觀察する好機會を得た。して、彼は彼女の容貌の美麗と優雅に驚いた。年齡は彼より三歳乃至四歳位多いかも知れないが、まだ若い盛りであつた。たしかに彼女は田舍娘ではなかつた。前と同じく殊の外、美くしい聲で彼に語つて云つた。

『今は獨り者でゐますので、こゝへ客をお泊め申す譯には參りませんが、これから先きへ今夜お歩きになるのは、屹度お危うございます。二三の百姓家も程遠からぬ處にありますが、この暗さではそこへも案內無くては、道がお分かりかねます。てすから、明朝まで御留め申上げます。御粗末では御座いますが、夜具を御用立てますから。それから、御空腹ていらつしやるでせうから、たゞまづい精進料理なんてすが、どうか御遠慮なく召しあがつて下さい』

註。精進料理は、少しも動物類の材料を含まない佛敎の食物である。ある種の精進料理は、頗る食慾を促す。

飢ゑてゐた旅人は、この勸めを非常に欣んだ。若い女は小さな火を焚いて、默つたまゝ、二三の料理を調へた——菜の葉を煮たもの、油揚、干瓢、それに一杯の粗飯——それから、その食物の性質について、詫び乍ら、手早く客の前へ出した。が、彼の食事中、女は殆ど物を云はなかつたので、その打解けぬ樣子は彼を困惑させた。彼が試みた二三の質問に對

し、彼女は單に點頭いたり、或は僅かに一語の返答をするに止まるので、彼は間もなく談話を控へて了つた。

兎角する內に、彼はこの小さな家は一點の塵を留めぬほど清潔て、彼の食事に用ひられた器物は、また申分の無いものてあつたことを觀察した。室內にある數個の安い道具も小綺麗てあつた。押入や膳棚の紙障は、たゞ白紙ではあるが、大きな漢字の立派な揮毫て飾られてゐた。その文字は、かゝる裝飾の法則に隨つて、詩人や畫家の好む題材——春花、秋月、夏雨、山と海、空と星、河水或は秋風——に因んだものてあつた。室の一方の側には、一種の低い壇に佛壇が載せられて、その漆塗りの小さな扉が開いてゐる處から、內部の位牌が見えて、野花が捧げられた間には、燈明が輝いてゐた。して、この佛間の上には月の光背を負つた觀音像の、並々ならぬ價値ある畫がかかつてゐた。

青年が僅かの食事を濟ましてから、女は云つた。『立派な夜具を差上げる譯に參りません。また紙の蚊帳が一枚しかありません。夜具と蚊帳とも私の使つてゐます品てすが、今夜はいろ〳〵の用事がありまして、私は寢る時間が無いのてすから、どうか御休みなすつて下さい。まことに御粗末さまて相濟みませんが』

彼はそこて、彼女は何か不思議な理由があつて、全くの獨り暮らしだので、厚意的口實

の下に彼女の唯一の寝具を彼に薦めてゐるのだと悟つた。彼はかゝる過度の款待に對して眞面目に抗議を申立て、床の上、何處でも熟睡が出來ること、それから蚊を少しも頓着しないことを斷言した。しかし彼女は姉のやうな口調で、是非とも彼女の希望に從つて呉れと言つた。實際彼女には或る仕事があるから、出來る限り早く勝手にさせて戴きたい。だから、彼を紳士だと心得てゐる以上、彼が彼女の希望通りに處置させて呉れるものと信じてゐるといつた。そこには唯だ一つの室より無かつたから、彼はこの言葉に對して、抵抗は出來なかつた。彼女は布團を延べ、木枕を持出だし、紙の蚊帳を吊るし、寢床の横の佛壇の方へは、大きな屏風を擴げ、それから、彼がすぐに寢につくことを望むやうな素振を見せて、お休みを告げた。彼は思ひも寄らぬ厄介を女にかけることを考へて、躊躇し乍らも、その言葉に應じて寢に就いた。

三

若い旅人には女主人の睡眠を犧牲にするやうな親切が、いかにも氣の毒に思はれて、それを受け容れ難くはあつたが、寢床はなか〳〵に心地よく感ぜられた。彼は餘程疲勞して

ゐたから木枕の上に頭を載せるや否や、一切のことを睡夢の裡に忘れてしまつた。

しかし彼が奇異な音によつて目を醒まされた時には、まだ眠つてから間もない程のやうに思はれた。たしかに跫音ではあるが、物靜かに歩く足の音ではなかつた。寧ろ興奮せる急速の跫音と思はれた。だから、强盜の侵入ではないかとも心に浮んだ。自身については損失となるほどのものも持たないから、心配にも及ばなかつた。彼の憂慮は主として彼に款待を與へた親切なる女に對してであつた。紙の蚊帳の兩側には、四角形の小さい褐色の網が小窓のやうに嵌めてあつたので、それから外を覗いて見た。が、如何なることの起こつてゐるにせよ、高い屏風に塞がれて、見えやうはなかつた。呼んで見ようと思つたが、若し眞に危險の場合ならば、狀況をも究めないで、自身を現はしては、無效に歸し、また思慮を缺ぐだらうといふ考によつて、この衝動は抑へられた。彼を不安ならしめた物音は、續いて行つて、ます〳〵不思議になつた。彼は萬一の覺悟をして、必要の際は、若い女主人を防禦せんがために、一身を賭けようと決心した。急いて着物を緊めて、窃と蚊帳の下から拔けて出て、屏風の端へ這つて行つて窺つた。彼が見た光景は、全く彼を喫驚させた。

燈明の輝いだ佛壇の前で、若い女は華かな服裝をして、獨りで踊つてゐた。彼は彼女の衣裳を白拍子のそれと認めた。尤も從來白拍子が着てゐるのを見たものに比すれば遙かに

華麗てあつた。衣裳によつて天晴れ引立つた彼女の美は、その淋しい時刻と場處に於て見ると、殆どこの世とも思はれぬほどてあつた。が、更に一層驚くべきは彼女の踊りてあつた。雲時彼は凄い疑惑が疼くのを感じた。百姓達の迷信なる狐婆の物語が、彼の念頭に閃いた。が、佛壇の光景、觀音の畫像が、その空想を散らし、その愚かさに對して彼を恥ぢ入らせた。同時に彼は女が彼に見られるのを欲しないものを注視してゐるのだと氣付いたので、客の義務として、すぐに屏風の背後に歸らねばならぬと悟つた。しかしその光景は彼を魅惑した。彼は愕き乍らもまた空前の妙舞を欣賞せざるを得なかつた。して、眺め入るに從つて、彼女の魅力はます〳〵加つた。不意に彼女は喘ぎ乍ら停まつた。帶を解いた。上衣を脫がうとして振り向いた。すると、彼女の眼が彼の眼と出逢つて、びつくりした。

彼は直ちに女に詫び入つた。彼は突然急速な跫音に目が醒めたので、夜は更けて、淋しい場處だから、女主人のため不安に思つたのだと云つた。それから、踊りを見て驚いたこと、その妙技に心を奪はれたことを告白した。「どうか私の好奇心を宥して下さい」と彼はつゞけていつた。『私にはあなたが何と申すお方か、また何うしてかやうな踊りの名手になられたものか、それが不思議て堪まりませぬから。西京の舞妓は皆見ましたが、まだいかほど有名な女ても、あなたに及ぶものはありません。それて、一たび拜見しましてから

らは、私の眼を外づす譯に參らなかつたのてす」

始め彼女は立腹の樣子に見えたが、彼の言葉の終はらぬ內に、表情は變つてゐた。彼女は微笑を浮べ、彼の前に坐つて云つた。「いえ、怒つてはゐません。たゞ御覽になつたのを遺憾に存じますだけなのてす。嘸あのやうに獨りて踊つてゐたのを、氣狂ひとても御考へなさつたのてせうから。ては、その譯を申上げねばなりません」

それから、彼女は身の上話をした。彼は少年の時、女の名を聞いたことを思ひ出した—彼女の藝名は白拍子中最も有名な名てあつた。彼女は都門の寵を一身に蒐めてゐた。それがその名聲と美の眞盛りに、一朝何故とも、何處へとも知れず、華やかな世界から消え失せた。彼女はその愛人なる青年と相携へて、富と幸運から逃れ去つたのてあつた。青年は貧しかつたけれども、彼等は二人て簡易且つ幸福な田舍の生活を營むだけの資產を有した。彼等は山間に小さな住宅を作り、數年間たゞお互同志を中心に暮らした。男は彼女を拜まんばかりに愛慕してゐた。彼の最大の樂しみの一つは、彼女が踊るのを見ることてあつた。毎夜彼は得意の曲を奏し、彼女は彼のために踊るのてあつた。が、或る冬の長い寒さに、彼は病に罹つて、彼女のやさしい看護の效もなく、亡くなつた。それから後、女は死んだ人に獻げるさま〴〵敬愛の儀式を行ひつゝ、男の名殘を伴侶として獨りて暮らして

きた。日毎に位牌の前へは慣例の供物を供へ、夜毎に普通り彼を慰めるために踊つた。若い旅人が目撃した踊りは、かやうな次第であつた。彼女は説明をつゞけて、疲れた客の目を醒ましたのは無禮であつたこと、しかし彼が熟睡したと思はれるまでは控へてゐたこと、それから、極めて輕やかに踊るやうにしたことを述べて、全く覺えず知らず彼の安眠を妨げたことの寬恕を求めた。

彼女は一切の話を終つてから、少しの茶を薦め、二人で飲んだ。それから、哀訴せんばかりに、彼に再び寢に就くやう懇願したので、彼も止むなく、幾多衷心からの謝わりを述べ乍ら、また蚊帳の下へ歸つて行つた。

彼は充分長く熟睡した。目を醒ますと、日は既に高かつた。起きてみると、昨夕と同じい質素な食事が、彼に準備してあつた。彼は飢えてゐたけれども、女が彼のために自らの食物を節約したかも知れないので、控へ目に食べた。して、彼は出立の用意をした。しかし彼が受けた一切の待遇に對して、謝禮の金を拂はうとしたとき、女は何をも受けることを拒んだ。『差上げましたものは、お金をいたゞくほどのものでなく、また何を致しましたのもたゞ厚意からなのです。どうか、こゝて御困りになつたことは御忘れ下すつて、何と云つて差上げますものもありませんでしたが、たゞ心持だけを御汲み取つていたゞきま

すれば』と云つた。

彼はそれでも幾らか彼女に取らせようと努力した。しかしたうとう、いかに強ひても彼女を困ましすばかりと知つたので、言葉を盡して感謝を陳べ、別かれを告げた。して、心の中では、立去るのを遺憾に思つた。彼女の美しさと上品さは、彼が彼女以外のものには告白しかねる程、彼を惹きつけたからであつた。彼女は彼にこれから先きの道を示し、山を下つて行く彼の姿が沒するまで見守つてゐた。一時間後に、彼は本道に出てた。最早道筋はよくわかつた。すると、急に殘念な思ひが浮んだ。彼は自分の名を女に告げることを忘れたのであつた。瞬間彼は躊躇した。それから、『何、どうでもよい。俺はいつまでも貧乏だから』と獨言をいつた。して、彼は旅をつゞけた。

四

幾多の歳月が經つた。また幾多の流行もそれにつれて移り變つた。して、畫家も年が老いた。しかし、彼は既に名聲を博してゐた。彼の作品の妙に感じて、大名達は競つて彼に厚遇を與へたので、彼は富裕の身となつて、帝都に堂々たる邸宅を有した。諸國から多く

の若い畫工が、彼の許に弟子入りをして、萬事奉公を勤め乍ら、彼の教へを受けた。彼の名は全國に知れ渡つてゐた。

さて、一日ある老婦人が尋ねてきて、彼に面談を求めた。弟子達は、彼女の粗服と哀れな姿を見て、たゞの乞食と思ひ、荒々しく彼女の用事を問ふた。が、彼女が『私の參つた譯は、御主人でなくては云へません』と答へたので、狂女と信じて、『主人は今、西京にゐないのだ。またいつ頃歸られるかも、我輩にわからない』といつて欺いた。

が、老婦人は再三再四やつて來た——毎日、毎週やつて來ては、その度毎に『今日は主人は御病氣だよ』とか、『今日は非常に御多忙だから』とか、『今日は澤山の御來客だから、面會は出來ない』とか、何か眞實でないことを答へられた。それでも女は、毎日一定の時刻に、またいつも襤褸包に卷いた一個の束を携へて、來つゞけた。て、遂に弟子達は彼女のことを師匠に告げるのが最も得策と思つて、彼にいつた。『こゝの御門前に乞食と思はれる老女がゐます。御目にかゝりたいと申して、五十回以上も參りましたが、その譯をいひません。たゞ御師匠にだけ御願ひを申上げたいといつてゐます。どうも氣狂ひと存じますから、思ひ止まらせようとしますが、いつもやつてきます。これから何う致したら、よろしいものかと思ひまして、御耳に入れます』

そこて師匠の畫家は言葉鋭く答へた。『なぜ、誰もそのことを今日まで言つて呉れなかつた?』して、自身て門へ行つて、彼も昔貧しかつたことを想起し乍ら、親切に女に話しかけて、施捨を求めるのかと尋ねた。

が、女は金錢も食物も要らないが、たゞ自身の畫を描いてもらひたいとの希望を述べた。彼はその願を怪しんて、女を家へ入らせた。女は玄關へ入つて、跪いて、携へてきた包の紐の結び目を解き始めた。包を開けたのを見ると、畫工は黄金模様の刺繍を施せる華麗珍奇な絹の衣裳を認めた。しかし使ひ損じと、年月の經過のために、擦り粍らされ、色は褪めて、當年の全盛を偲ばせる白拍子の衣裳の名殘てあつた。

老女が一つ〳〵衣裳を擴げ、慄へる指て皺を伸ばさうとする間、ある記憶が畫家の腦裡に動いて、しばらく漠然と浸み渡つたが、不意に燃え上つた。その追想の優しい衝動の裡に、彼は再び淋しい山家を見た——彼が無報酬の歎待を受けた家、彼の臥床を設けられた小さな室、紙の蚊帳、佛壇の前に微かに輝く燈明、深夜そこてたゞ獨り踊つてゐた人の異樣な美しさを見た。そこて、老齡の訪問者の驚いたことには、この諸國諸大名の寵を受けてゐる彼が、彼女の前に低頭していつた。『瞬間ても御顔を忘れてゐた無禮を宥して下さい。しかし最早お互に御目にかゝつてから、四十年を越えました。今はよく思ひ起しまし

た。あなたは嘗て御宅へ私を迎へて下さつたのです。あなたは唯一つしかない寢床を私に譲つて下さいました。私はあなたの踊を見、またあなたから一切身の上話を聞かせてもらひました。あなたは白拍子でした。して、私はその御名を忘れは致しませぬ』

彼がさう云ふと、女は喫驚困惑して、始めは答へも出來なかつた。といふのは、年は老い、また非常に艱苦を嘗め、且つ記憶力さへ衰へかけてゐたからであつた。が、彼がます親切に話を向け、昔彼女がいつたことをさま〴〵思出させ、彼女が佗住居してゐた家の狀況を說いて聞かせると、女もまた想ひ出だし、喜悅の涙を浮べて云つた。『たしかに祈願を見そなはし玉ふ觀音樣のお導きです。しかし不束な家へ先生が御出下さつた頃は、私も今のやうではありませんでした。先生が御覺え下さつたのは、佛樣の御奇蹟のやうに存じます』

それから、女はあれから後の彼女の簡單な物語をした。幾星霜の後、彼女は貧乏のため、かの小さな家を手離さねばならなかつた。て、年が寄つてから、彼女の名の夙くに忘れられてゐた大都會へ獨りで歸つてきた。彼女の家を失つたのは心苦しかつた。しかし年老い、身體弱くなつては、いとしい亡き人の靈を慰めるために、最早毎夜佛壇の前で踊ることの出來ないのが、更につらかつた。だから、踊りの衣裳姿の畫を描いてもらつて、佛壇の前

へ掛けたいのであつた。これがために、觀音に熱心な祈願をしてゐた。して、亡き人のために、平凡な作品でなく、最も優れた畫が望ましいため、この大畫家の名聲を慕つて、尋ねてきたのであつた。て、踊の衣裳を携へてきたから、それを着た姿を描いて貰ひたいと願つた。

彼は親切さうな微笑を呈しつゝ一切の話を聽いた。それから『御望みの繪を描くことは、欣んで致します。今日は延期の出來ない、是非仕上げねばならぬことがありますが、明日こゝへ御出下されば、御望み通り、また私も全力を盡して、描いて上げますよ』と答へた。

しかし女はいつた。『わたしはまだ一番、氣にかゝつてゐることを御話申上げてゐませんのです。それは、それほど御手數を煩はしましても、御謝料と申しましては、白拍子の衣裳の外、何も差上げる譯に參らないことです。それも昔は高價なもので御座いましたが、その品物と致しましては三文の値段にもなりませぬ。て、今では白拍子もゐなくなりまして、當節の舞妓はこんな衣裳を着けませんから、珍らしい物と思召になつて、先生が御受け下さるかとも存じましたのです』

『そのことは、すこしも御心配に及びません』と、親切なる畫家は叫んだ。『これで昔の御恩を幾分かでも御返へしが出來れば、私は嬉しい次第です。だから明日、御望み通り

描いてあげます』

女は三拜して、禮を陳べ、それから、また云つた。『失禮て御座いますが、もう少し申上げたく存じます。それは何卒このやうな今のわたしてなく、昔御覽になつたやうな、わたしの若い頃の姿をお描き下さいますやう』

彼は『私はよく記憶してゐます。あなたは非常に御綺麗でした』といつた。

是等の言葉に對して、女が感謝の辭儀をした時に、皺のよつた容貌は、嬉しさうに輝いた。して、女は叫んだ。『ては、いよ〳〵祈願が叶ふことになりました。かやうに不束なわたしの若い頃を御覺え下さつてゐるからには、どうぞこのまゝてなく、御親切にも、みにくゝはなかつたと、今仰せ下さいました通りの、わたしの昔の姿を御描き下さいませ。どうか、先生、わたしを今一度若くして下さいませ。亡くなりました人の靈に美しく見えますやう、美しくして下さいませ。その人のための御願て御座います。先生の名畫を拜見致しますれば、あの人もわたしの最早踊れないのを勘忍して呉れませうから』

もう一度、畫家は彼女に安心をさせて、それから云つた。『明日御出下されば、描いて上げますよ。私が見た時のやうな、若い美しい白拍子のあなたを描いてあげます。また、三國一の大富豪から依頼を受けたと同樣に、念を入れて、うまくやつて見ませう。御心配

なく、たゞ御出なさい』

五

そこで、年老いた白拍子は約束の時刻に來た。して、柔かな白絹の上に畫家は彼女の姿を寫した。しかし、その際、畫家の弟子達の眼に映ぜる彼女の姿てはなく、鳥のやうな明るい眸を持つて、竹の如く嫩かで、絹や黃金の衣裳て天人の如く輝いてゐた、若い頃の彼女の記憶を寫したものてあつた。名工の靈筆の下に、消えてゐた美しさは歸つてきて、褪せてゐた華かさはまた咲き出てた。畫が出來上つて、落款を施してから、彼はそれを立派に絹て表裝し、杉の軸を附け、象牙の風鎭を備へ、吊るすために絹紐を附け、白木の小箱に收めて、女に渡した。それから彼は金子若干をも贈物として强ひて取らせようと、勸めたけれども、彼女はその補助を受納しなかつた。

『いえ、實際わたしは何も要りませぬ。ただ畫だけがわたしの願て御座います。これまて畫のために祈願をこめてゐたので御座いました。最早大願成就、この上この世の願は持ちませぬ。またかやうに俗なこの世の願を持たずに死にますれば、佛道往生も難くはなか

らうと存じます。たゞ殘念に思ひますのは、先生に差上げますものとては、この衣裳の外、何も御座いません。先生の深い御親切に對しましては、これから毎日先生の將來の御幸福を祈願致さうと存じます』

畫家は笑ひながら、きつぱり斷言して、『いや、これは何でもないことです。白拍子の衣裳だけは、それであなたの御心持が一層御宜しいなら、頂戴致します。昔、私のために、あなたが御不便を忍んで、しかも何うしても謝禮を受け下さらなかつたから、今に私は御恩を着てゐる積りです。その夜の樂しい思出になります。ですが、今は何處に御住居なさつてゐます？この畫の掛つた處を見たいものです』と云つた。

が、女は賤しい住家を御目にかけるも心苦しいと、丁寧に辯解して、所在を明さなかつた。それから再三低頭、禮を述べ、貴重な畫を携へ、嬉し涙を浮べて立去つた。

畫家は一人の弟子を呼んで、『急いで、あの女の人に分らぬやう、後へ追いて行け。して、何處に住んでゐるか、報告してくれ』といつた。そこて、弟子は見えないやうに、女について行つた。

餘程の時間が經つてから、弟子は歸つてきた。して、聞く人に取つて、面白くないことを云はねばならぬやうな風に笑ひ乍ら云つた。『先生、あの女に追いて行きますと、町を

出まして、死刑場に近い、磧へ行きました。そこの特種部落のやうな小屋に住んでゐます。汚い、廢つた場所て御座います』

『だが、明日その汚い廢つた場所へ私を案内してくれ。私の存命中は、あの女に食べものや着物に不足させたり、困らせたりはさせないから』と畫家は答へた。

弟子達が皆不思議に思つたので、彼は白拍子の物語をした。それから始めて皆、彼の言葉を奇異と思はなくなつた。

六

翌朝、日が出てから一時間すると、師匠と弟子は町の界から向うの方て、無宿者の集まる磧へと歩いて行つた。

小屋の入口は一枚の雨戸で閉ぢてあつた。師匠は幾たびも叩いて見たが、應答がなかつた。すると、戸は內から締めてなかつたので、輕く開けて、隙間から呼んだ。誰も答へないから、彼は入ることに決心した。同時に異常な鮮明さを以て、彼が疲勞せる青年修業者として、山中の小屋の前に立つて、戸を叩いた瞬間の感が念頭に返つた。

彼が獨りて靜かに入つてみると、女は一枚の薄い、ぼろ〳〵の布團にくるまつて、一見すると寢たやうに横つてゐた。粗末な棚の上に、彼は四十年前の佛壇を認めた。中には位牌があつた。して、當時と同じく、今も小さな燈明が、戒名の前で輝いてゐた。月の後光を負つた觀音の幅は無くなつてゐたが、佛壇に面した壁には、彼の贈つた畫が掛けてあつた。して、その下には一言觀音（註）——この觀音はたゞ一つの祈願を叶へ玉ふだけだから、一回以上、願を掛けてはならぬ——の御札があつた。荒涼たる家の中には、その外のものは、たゞ巡禮の衣と托鉢の笻及び鉢だけてあつた。

註。この觀音の寺は、奈良の大佛の寺から遠くない。

が、師匠はこれらのものを眺めて、躊躇してはゐなかつた。彼は眠つてゐる女を醒まし、欣ばせようと思つて、二回も三回も、元氣よく彼女の名を呼んだ。

すると、忽然彼女の死んでゐるのに氣がついた。して、その顔を凝視し乍ら、彼は不思議に思つた。それは案外若く見えた。青春の妖精とも見ゆる、何となく美しい趣が、そこへ歸つてきてゐた。悲哀の皺は、彼よりも更に偉大なる幻影の師匠の手によつて、奇異にも滑かに和らげられてゐた。

第二十三章　伯耆から隱岐へ

一

自分は隱岐へ行くことに決心した。

宣教師てさへそれまで一度も隱岐へ渡つたものは無かつた。そしてその海岸は、軍艦が日本海を巡航してその傍を汽走するといふそんな稀な場合を除いては、西洋人の眼に未だ嘗て觸れなかつたのである。それだけても隱岐へ行く充分の理由となつたのであらう。だが、日本人すら隱岐のことは全く知つて居らぬといふ一層有力な理由が自分に提供せられた。日本帝國の中て一番知られて居ない部分は、異つた言語を使用して居る、稍〻異つた人種が住まつて居るルウチユウ・アイランヅ卽ち琉球を除いて、恐らくは隱岐てあらう。これは出雲と縣を同じうして居る國であるから、新任の島根縣知事はいづれも就任後一度巡視するものと思はれて居り、縣警察部長は時折視察に出かけて行く。その上また松江や

他の町の商家で、年に一度注文取を隱岐へ送るのが幾軒かある。更にまた、——それは殆んど總て小さな帆船で行ふのであるが——隱岐とは餘程盛んな取引がある。がそんな公務上並びに商業上の交通は日本歷史の中世時代に於けるよりも、大して能く隱岐を今日世間へ知らしめる性質のものでは無かつた。隱岐については、東洋の種々な人種の想像的文學にあんなに大いに出て來る彼の荒唐無稽な女護の島に就いての物語に能く似た、異常な物語が今なほ日本西海岸の普通人の間に行はれて居る。さういふ古い傳說に據ると、隱岐の國の人の道德觀念は極めて奇妙なもので、最も嚴肅な禁慾者でも此國に住んで居ては浮世の快樂に對するその冷淡さを維持して行くことは出來ぬ。そして此處へ遣つて來る他國人は、着いた時にはどんなに金持でも、女の誘惑の爲めに、やがて素裸て貧乏になつて其本國へ歸らなければならぬといふのてある。自分は珍奇な國ての旅行にはもう充分の經驗があることだから、そんな不思議な話は總てみな、隱岐は『人の知らぬところ』（テラ、インコグニタ）といふそれだけの事實以上何も意味してゐないと確信して居た。そして隱岐の國の人の普通一般の品行は——西部諸國の普通人民の品行に依つて判斷して——自分の本國の無智階級の者共の品行よりも餘程優つて居るに相違無いと信ぜんとする氣持にさへなつて居つた。

この事は後になつて確にさうと自分は見屆けた。

暫くの間自分は自分の日本人友達のうちに、隱岐は古昔武人簒奪者が廢立した後醍醐後鳥羽兩帝の配流の地てあつたといふ、自分が既に知つて居る、事實のほか、どんな知識をも與へて呉れるものを一人も見出し得なかつた。ところが到頭、全く思ひがけ無くも、前に隱岐へ行つたことがあるばかりて無く、用事あつて數日のうちにまた行かうとして居る一友を——前の學校の同僚を——發見した。て同行を約した。その男の隱岐に就いて語る所は今迄行つたことの無い人達の話とは著しく異つて居つた。隱岐の人達は出雲の人達と殆ど同じ程に開けて居て、好い町があり立派な小學校がある、と言ふ。人間は甚だ質朴て信じられない程に正直て、そして他國人に極めて親切てある。日本人が初めて日本へ來た時このかた、卽ちもつと浪漫的な言葉て言へば『神代』このかた、その人種を變へずに居る事をその唯一の誇として居る。みな神道信者て出雲大社教を奉じて居るが、佛教も亦、主として私人の澤山な醵金に依つて、維持されて居る。そして非常に居心地の好い宿屋があるから、全く氣安く感ずるだらう、と斯う言ふのてあつた。

その男はまた隱岐の學校て使はせる爲めに出版された隱岐の事を書いた小さな本を呉れた。自分はその本からして次に記すやうな簡單な事實の摘要を得た。

二

オキノクニ卽ち隱岐の國は、出雲の海岸から百哩許りの、日本海の二群の小島から成つて居る。近い方の一群の名の島前（ダウゼン）は、種々な小島のほかに、互に近く存在して居る三つの島を含んで居る。チブリシマ卽ち知夫里島（時にヒガシノシマ卽ち東の島とも呼ぶ）、ニシノシマ卽ち西の島、及びナカノシマ卽ち中の島がそれである。このいづれよりも遙か大きいのは主島たる島後（ダウゴ）で、その多くは人の住んで居ない種々な小島と共に他の一群を爲して居る。オキといふ名はもつと一般にこの群島全部に用ひるのであるが——この島を時にオキと呼ぶ。

公には隱岐は四つのコホリ卽ち郡に分たれて居る。知夫里と西の島と一緒になつて知夫里郡を成し、中の島が小島一つ添へられて海士（あま）郡をつくり、島後は穩地（おち）郡と周吉（すき）郡とに分たれて居る。

此等の島はいづれも山が多くて、その面積のほんの一小部分しか耕やされて居らぬ。主たる財源は漁業で、住民の殆んど全部が太古からして常にそれに從事し來たつて居る。

冬の幾月間は隱岐と日本西海岸との間の海は小舟に取つては太だしく危險で、その季節には島は本土とは餘り交通はしない。たつた一艘の客用汽船が隱岐へ伯耆の境から通ふ。直線では伯耆の境から隱岐の一番の港の西郷までの距離は三十九里だといふ。だが、汽船は其處への途中他の島々に寄港する。

隱岐には小さな町が、否むしろ小さな村が、隨分と澤山ある。そのうち四十五は島後にある。その村は殆んど總て海岸に位して居る。主要な町には大きな學校がある。全島の人口は三萬〇百九十六人だと述べてある。が、町々村々のそれ〴〵の人口は書いて無い。

三

出雲の松江から伯耆の境へは汽船でたゞの二時間の旅である。境は島根縣の一番の海港である。不快な臭氣に充ちた見つとも無い小さな町で、たゞ港としてのみ存在して居るのである。何の工業も無く、商店は殆んど一軒も無く、貧小な、そして興味は更に貧小な神社が一つあるだけである。その主な建物は倉庫、水夫の遊び場處、それから四五軒の大きな汚い宿屋で、その宿屋には大阪行き、馬關行き、濱田行き、新潟行き、いろんな他の港

行きの汽船を待つて居る客がいつも一杯に込んで居る。この海岸では汽船は何處へも規則正しくは通はぬ。汽船の持主は時間通りといふ事に全然何等の營業的價値を置いて居らぬから、客はこんな事があらうとは到底も思はなかつた程長く、いつも待たなければならぬ。それで宿屋は喜んで居る。

だがその港は——出雲の高い陸と伯耆の低い海岸との間の長い海門にあつて——見事なものである。風から完全に蔽遮されて居て、殆んどどんな大きな汽船でもはいれる位に深い。船は家屋に接して碇泊が出來るので、港には和船から最近建造の蒸汽飛脚船に至るまでのあらゆる種類の船がいつも輻湊して居る。

友と自分とは幸にも一番好い宿屋の裏座敷を占めることが出來た。殆んど總ての日本の建物で、裏座敷が一番好い部屋である。境ではその上に、賑やかな埠頭と、その後ろに出雲の山々とが空を背に綠の巨濤の如く起伏して居る、日に光つた入江全體を見渡す更なる便宜がある。見て面白いものが澤山あつた。あらゆる種類の蒸汽船や帆船が宿屋の前に二た列び三列びに重なつて投錨して居て、裸體の船人足がその獨得な方法で以て荷積したり荷揚したりして居た。そんな男は伯耆や出雲の一等強壯な百姓の中から集めるので、身體

の運動毎にその鳶色の背中に筋肉が波打つ程の實際立派な身體をしたものも居た。見たところ十五六歳の男の子が——仕事を習つて居るので、まだ重荷を擔ぐほどには丈夫で無い見習が——幾人か手傳をして居た。殆んどその皆んなが、血管破裂の豫防に、紺布の幅廣い紐を腓(こむら)に捲付けて居るのに自分は氣が付いた。そして皆んな働きながら歌を歌つた。交る交るにやる妙な合唱が一つあつて、船艙に居る男が（英語のホオアエイ！に當る）『ドッコイ、ドッコイ』と歌つて合圖をすると、艙口に居る男は、下から揚つて來る荷物が見える度毎に、間に合せの文句でそれに應へるのであつた。

ドッコイ、ドッコイ！
女子の子だ。
ドッコイ、ドッコイ！
親だよ、親だよ。
ドッコイ、ドッコイ！
チョイチョイだ、チョイチョイだ。
ドッコイ、ドッコイ！

松江だ、松江だ。
　ドッコイ、ドッコイ！
此奴も米子だ。云々。

だが此歌は輕い早い仕事に歌ふものてあつた。重い袋や樽を他の男よりも強壯な男の肩へ載せるといふ、もつと苦しいもつと遲い勞働には、前のとは餘程異つた歌が伴なふのてあつた。

ヤンヨイ！
　ヤンヨイ！
ヤンヨイ！
　ヤンヨイ！
ヨイヤサアアノドッコイシ！

いつも三人て重荷を持上るのてある。最初のヤンヨイて皆んな屈む。二度目のて三人ともそれへ手をかける。三度目のは用意が出來たといふつもり。四度目のてその重荷が地を

離れる。そしてヨイヤサアアノドッコイシといふ長い掛聲て、それを受取らうと待構へて居る遲しい肩の上へそれが落されるのてあつた。

その勞働者の中に能く笑ふ裸體の男の子が一人居た。その八かましい騷ぎの中ても、如何にも愉快げに鳴り響いてきこえる程の、その宿屋て評判になつて居るくらゐの、立派な中音部（コントラルト）の聲を有つた子てあつた。お客の一人の或る若い女が二階の緣側へ見に出て來て、『あの子の聲は赤い聲だ』と言つた。それを聞いて誰も彼も笑つた。（譯者註）深紅色と喇叭の音とに就いて或る有名な話がある。光と音との性質を今ほど知つて居なかつた時分にその話が

譯者註。ロックの『人間の悟性』第三卷第四章第十一節に、「深紅色はどんなものかとその友人が尋ねたら、その盲人は喇叭の音のやうですと答へた」とあり。

可笑しく思へた程には今は可笑しくは思はれぬ。その話を此時想ひ出したけれども、この場合自分はその評語を非常に表現的な言葉だと思つた。

隱岐通ひの汽船はその日の午後に着いた。だが、埠頭に近寄ることが出來なかつたので、

自分は望遠鏡でその船尾の一瞬時の瞥見を得ただけてあつた。金の英字て OKI—SAIGO といふ名が讀めた。どの位の大きさかといふ考へを得ないうちに、長崎からの大きな黒い汽船が間へ辷り込んて、丁度それを遮つて投錨した。

自分は日が暮れて皆んなが仕事を止める迄、荷積や荷揚を觀たり赤い聲の子が歌ふ歌を聽いたりして居た。それから今度はその長崎汽船を觀て見た。幾艘か他の船が出港したため宿の前の埠頭へ寄つて來て、二階の縁側の眞下に居たのてある。その船長乘組員はどんな事にも急いて居るとは見えなかつた。みな一緒に前甲板に坐り込んて、其處へ提燈の光りて御馳走が並べられた。藝者が船へ上がつて皆んなと一緒に御馳走を食べて、三味線の音に合せて歌を唄つたり、皆んなと拳を打つたりした。夜遲くまて御馳走と遊興は續いた。そして驚く許り多量の酒を飲んだのてあつたが、亂暴もしなければ騒動もしなかつた。だが酒は飲料のうちて一番眠氣を誘ふものてある。だから夜中になると、甲板に居殘つて居るものは三人しか無かつた。そのうちの一人は酒は全く飲まなかつたが、いつまても物を食ひたがつて居た。その男に仕合な事にはモチの箱を提げて夜商ひのモチ屋が船へ上がつて來た。モチといふは米の粉て造つて地産の砂糖て甘味を附けたケエキてある。空腹なその男はそれを皆んな買つて、それしか無いのかと餅屋を恨んだほどてあつたが、それても

少しその餅を食へと仲間の者へ差出した。すると初めに勸められた男がまあこんな風な返事をした。

『わしやちや、餅にや、此世界では用はねや。酒さへ、この世にありや、他にや何んにも要らぬわ』

もう一人の男は斯う言つた。

『わしやちには、女子がこの浮世の一番えいもんだ。餅や酒にや、この世の用はわしや有たぬわ』

が、その餅を皆んな平らげてしまつてから、空腹であつた男は餅屋の方へ向いて斯う言つた。

『あゝ餅屋さん。わしやちや、女子や酒にやこの世の用は有たぬわ。餅よりえいもな、この憂世にやあらせんわ』

四

隱岐西郷は正八時に出帆するから直ぐ切符を買ふが宜からうと、翌朝早く知らせを受け

た。日本の習慣に從つて宿屋の下男が荷物その他の一切の心配をせんて宜いやう取計つて呉れ、自分等の切符も買つて呉れた。一等賃金八十錢。そして急いて朝食をすますと、宿の小舟が我々を運ぶべく窓の下へやつて來た。

島根縣の汽船では洋服は不便な事を經驗して知つて居るから自分は和服を着、靴を草履に穿き換へた。船頭は大船小船のごちやごちや居る中を早く漕いだ。そしてそれを出離れると、遠く中流に、自分等を待つて居るジョウキが見えた。ジョウキといふは汽船を呼ぶ日本語である。この語は不快な解釋を與へることの出來るものとは、その時まだ自分は思つて居なかつたのである。

見ると、もつとづんぐりはして居るが、長さは殆んど港内用の曳船ぐらゐて、他の點に於ては宍道湖通ひの小人島的汽船に餘程似て居たから、僅か百哩の短い旅でも、これでは少小險呑だといふ氣がした。が、その外部の視察はその内部の神祕を探る手掛りを與へては呉れなかつた。着いて、小さな角な穴からその内部の右舷へ登つた。直ぐと自分は、重い天井を有つた、高さ四呎幅二呎の舷門の中て、——幅二呎の孔の中を直徑三呎の荷物を押し通して行かうと蹶いて呼吸の根を止めて居る船客に——恐ろしく挾み絞められて動けなくなつてしまつた。進むことも退くことも不可能て、そして自分の後ろては機關室の格子がこ

の地獄のやうな廊下へ非常な熱を浴びせつゝあるのてあつた。自分は頭の後を天井へ押附けて待つて居なければならなかつたが、不思議にも荷物も乘客も皆、壓し潰されて通ほつて行つた。それから部屋の戸口へ着いて、山なす草履と下駄の上を一等船室へころがりこんだ。磨いた木細工や鏡があつたりして部屋は小綺麗て、ぐるりに幅五吋の壁沿長椅子があり、中央の處は、高さ六尺ぐらゐあつた。そんな高さなら比較的に仕合な譯ではあつたが、天井を横に張り渡してある磨いた眞鍮の棒からして、ありとあらゆる小荷物が大事に吊り下げてあつて、しかもその中には啼く蠑螈（チョンギス）の籠が二つもあるのてあつた。その上にまた船室は早や既に極度に塞がれて居た。言ふ迄も無く誰も彼も床の上に居り、しかも殆んど誰も彼もが一杯に身體を伸ばして寢そべつてゐた。それにまた暑さがこの世のものとは思へぬ程てあつた。ところて、出雲やそんなやうな地方から、大海て商賣をする目的て船に乘つて海へ乘り出す者は、決して立つて居るものては無く、古風に辛抱強く坐つて居るものと思はれて居るから、沿海或は湖水通ひの汽船は、そんな姿勢だけを可能ならしめる目的を以て建造されて居るのてある。自分は、船室の左舷の側に戸が一つ開いて居るのを見たから、身體や手足のこんがらがつて居る上を——その中には藝者の所有に係る美くしい足が二本あつたが——抜き足さし足で行つて見ると、それは別な舷門て、

これ亦屋根があつて、のたくりくねつて居る鰻が入つて居る籠て屋根まで詰つて居るのであつた。出口は其處には無かつた。そこてかの足總ての上を越え戻つて、今一度右舷の舷門を試めしてみた」。そんな短時間のうちにすら、不幸な雛つ子が入つて居る籠て半分も其處ははや塞がれてしまつて居た。が自分は、自分の心を傷ましめる狂亂的なキャッキャといふ啼聲にも拘らず、向う見ずに籠の上を突進して、旨く船室の屋根の上へ出る道を見付けた。綱の大きなとぐろ巻のある一隅のほかは其處は全部西瓜が占領して居つた。自分はその綱の内側へ西瓜を入れて、日に照らされながらその上へ腰をかけた。居心地よくは無かつた。だが、いざといふ場合生命の助かる機會があらうと考へ、下に居る人達は神樣だつて屹度救ふことは出來まいと思つた。先刻の押し合、へし合の間に自分は伴と離れてしまつたのであつたが、その男を見出さうと企てることを恐れた。前の方を見ると二等室の屋根の上に火鉢一つ取巻いて三等客が一杯居た。その多勢の中を通り抜ける事は出來さうに思へぬし、退く事は鰻か雛つ子かを殺すことになつたらう。だから自分はその西瓜の上に腰掛けたのである。

すると船は耳の潰れるやうな叫聲を出して進行し始めた。と直ぐに煙突が自分の身體へ——所謂一等船室は隨分の船尾にあつたから——煤を雨と降らせ始め、次いでその煤に交

じつて小さな燃殻がやつて來て、その燃殻には折々赤熱のものもあつた。だが自分は、かの雛つ子に再度の攻撃を加へずに自分の位置を變ずる方法は無いかと思案しながら、なほ暫くの間西瓜の上て燒けながら坐つて居つた。到頭自分はその噴火山の風陰に移る必死の努力を試みた。そしてその時初めてこのジョウキの特性が分つて來た。自分がその上に坐らうとする物はひつくりかへり、自分がそれて身體を支へようとする物は直ぐに、いつも船外の方向へ、外づれた。外見ては錠止になつて居るか或は堅固に締め括つてある物が、用心して檢べて見ると、危險なほど動き易いものであり、西洋の思想に據ると動くべき筈のものが永遠不易の小山の根のやうに固着して居つた。どんな方向にても誰かを不幸ならしめるやうに綱か支索かをどうにかして張り得たなら、此船のものが正にそれであつた。そんな難儀な目に會つて居る最中に、この恐ろしい小舟が搖れ始めて、西瓜があつちこつちと非道くぶつつかり始めたので、自分はこのジョウキは惡魔が設計しまた建造したものだといふ結論に到達した。

その事を自分は友に語つた。友は全く思ひがけ無くも自分と又一緒になつた計りては無く、燃殻や煤を防ぐやうに、船のボオイを連れて來て自分等二人と西瓜との上へ日蔽を張らせたのであつた。

彼は叱るやうに答へた。『そんなことは無い！この船は兵庫で設計して建造したもので、實際もつと悪く出來上つたのかも知れぬ、若し……』

自分はそれを遮つて『濟まぬが、君の意見には全然同意出來ぬ』と言つた。

彼は自說を曲げずに『いや、自分で判るよ。船體は立派な鋼鐵だし、その小さな機關は驚くべきものだ。五時間て何ん百哩走れる。そりや大して居心地は好くない。が、非常に早くて堅牢だ』と言ふ。

『空が荒れりや、僕はむしろ和船の方が宜い』と自分は抗辯した。

『だが和船は空が荒れゝば海へ出はしない。空が荒れさうな樣子が見えただけても、和船は港に碇泊して居る。時々全る一と月も待つ。どんな冒險も決してせぬ』

自分はそれを確信する事は出來なかつた。だが、出雲の海岸に沿うて、長い海門から日本海へ突進するにつれて、眼前に段々廣く展開し來る素晴らしい眺望と、無類の好天氣とが嬉しくて、一切の不快を——西瓜の上に坐つて居る不快すらも——自分は直ぐと忘れた。頭上の青い和やかな大空には一點の雲も無く、一切を映す大海の金屬の如き平らかさには少しのゆらめきも無かつた。船が搖れるのなら、それは疑も無く荷物を積み過ぎたからてあつた。左舷には——間を置いて途絶えては不思議な小さな入江をつくり、其處には漁村

が隱れて居る、くすんだ綠色の、起伏高低して長く續いて居る——出雲の山々が後へ後へと飛んで行く。右舷數哩離れて、伯耆の海岸が何も無い白い地平線へと遠のいて、砂濱の閃が呈する白い絲筋に緣取られた暖かい青い線となつて、次第に微かに消えて行く。そしてその向うに、中心に、影のやうな偉大な金字塔が——大山の靈峰が——朦乎として中天へそゝり立つて居る。

友は左舷のとある峰の頂に見える一群の松に自分の注意を惹くべく腕へ手を觸れて、笑つて日本の歌を一つ歌つた。船がどんなに速く進航して居たか、此時始めて判つた。それは事代主神の社殿の上の、風つぼい山に立つて居る、美保關の有名な四本松が認められたからである。元は五本あつた。一本は嵐の爲に根こぎにされたので、出雲の或る歌よみが、後に殘つた四本に對して今自分の友が歌つた文句を詠んだのである。

セキノゴホンマツ
イツポンキリヤシホン
アトハキラレヌ
メウトマツ

意味は『關の五本松のうち一本は伐られて四本殘つて居る。これはもう一本も伐つてはならぬ――夫婦の松てあるから』てある。それて美保關ては、四本松の繪が描いてあつて、其繪の上に蜘蛛程の小さな金文字て『セキノゴホンマツ』の歌が書いてある美しい盃や徳利を賣つて居る。それは記念の品て、他にも其處の綺麗な店て買へる珍らしい綺麗な土産の品物がある。美保關神社の繪のついた瀬戸物や、事代主神が大きな鯛をそれが入りさうにない小さな籠へ入れようとして居る處を現はした煙草袋用の金屬の留金や、この神の笑顏を示した光澤のある燒物て出來て居る滑稽な面などてある。それはこの恵比須卽ち事代主神は正直な勞働の、殊に漁師の、守り神て、『幸福な者が笑ふといつもその神様は喜ばれる』と人の言ふその父神たる杵築の大神ほどには笑を好かれはせぬが、でも上機嫌な神様だからてある。

船が岬を――古事記の美穗を――過ぎると、美保關の港が我等の前に開けて、港内中央の島にある辨天神社が見え、その脚部を水に浸して居る半月形に建ち並んだ古風な家並が見え、遠くまて名のきこえて居るあの神社の大鳥居と御影石の唐獅子が見えた。すると直ぐに多勢の乘客が立上つて、顏を鳥居の方へ向けて神道祈念の柏手を始めた。

自分は友に斯う言つた。

「舷門に雛つ子が一杯入つて居る籠が五十もある。だのにあの人達は船に災難が出來しませぬやうにと事代主神に祈願して居る」

友の答へるには、「ては無くて自分の幸運を祈つて居るのだらう、尤も「金持になりますやうにと人が御祈をすると神様達はたゞ笑つておいてだ」といふ話なんだが。然し美保關の大神に就いては面白い話がある。或る時非常に横着な男が美保關へ參つて金持になりますやうにと御祈をした。するとその夜その男は夢に神様を見た。神様は笑つて自分の御草履の片方を脫いて、それを能く檢て見よと仰せになつた。そこでその男は見て見ると、その草履は重い眞鍮で出來て居たが、踵に大きな穴が開いて居た。處で神様の仰しやるには、「お前は働かずに金を得たいと思つて居る。わしは神ぢやが、決してなまけはせぬ。見よ、わしの草履は眞鍮て出來て居る。それても非常に働いて隨分と歩いたから、まるて摩り切れて居る」」

五

この美くしい美保關灣は二つの岬の間に開いて居る。一方はミオ（古風な綴に從ふとミ

ホ）岬て、一方は土地の人が頗る不適當にも『地藏鼻』（ヂザウノハナ）と今呼んで居る地藏崎（ヂザウザキ）てある。この地藏鼻は激浪の折には此海岸ての最も危險な場所で、隱岐から歸る小舟の恐怖の的になつて居る。天氣の好い折にも其處には殆どいつも大うねりがある。ても自分等の船がその峨々たる海角を過ぎた時には水が鏡の如く靜かなのを見て驚いた。その音無しの海がなんだか怪しいやうな氣持がした。その音無しといふ事が、熱帶的暴風に先立つ浪と風との美くしい欺瞞的な眠を想ひ出させたからてある。だが友は斯う言つた。

『幾週間も斯んなて居るだらう。六月と七月の始とはいつも非常に平穩だ。盆前に危險になるやうなことはありさうに無い。だが先週美保關に一寸した疾風（はやて）があつた。土地の者はそれは神樣の御立腹て起こつたのだと言つて居る』

『卵てか？』と自分は尋ねた。

『いゝや、クダンだ』

『クダンて何んだ？』

『クダンのことを今迄聞いたことが無いのかい？件といふのは人間の顏をして牛の身體をしたものだ。たま〳〵牛が生むもので、それは起こらうとして居る事の前兆だ。ところ

が件はいつも本當のことを言ふ。だから日本の手紙や證文には——「件の如くに」卽ち、「件が眞實を語るが如くに」といふ——クダン（註）ノゴトシといふ文句を使ふが習はしだ』

註。この妙な意味は和英字書に載つて居らぬ。字書にはこのイディオムはたゞ『前述の如く』といふ句で譯してある。

『だがどうして美保關の神樣が件に腹を立てられたのだい？』

『剝製の件だつたといふ事だ。自分はそれを見はしなかつたから、どんなに出來て居たか君に話せぬ。大阪から旅の見世物師が境へ來て居たのだ。虎や、色んな珍らしい動物や、その剝製の件を持つて來て居た。そして出雲丸に乘つて美保關へ來たのだ。その汽船が港へ入ると不意の疾風（はやて）が起きた。すると神社の神官は、何か不淨な物を——死んだ動物の骨や何んかを——此町へ持つて來たから神樣がお腹立ちになつたのだと言つた。そこて見世物師は上陸さへ許されず、乘つて來たその汽船で境へ歸らなければならなかつた。ところがそれが出て行つてしまふと、空は再び晴れて風は吹き止んだ。だから或る人達は神主が言つた事は本當だと思つた』

六

確に大氣には自分が想像して居たよりも餘計に濕氣があつた。眞實能く晴れた日には、大山は隱岐からだつて分明に見えるのであるが、船がやつと地藏鼻を通り越すと、この巨峰は地平線と同じ色の濛氣に包まれだして、二三分すると幽靈が消えるやうに消え失せた。この突然の消失の感銘は、實に異常なものであつた。その峰だけが視界から消えて、それを蔽うたものは地平線並びに空と少しも識別の出來ないものであつたからである。

その間隱岐西郷はその航路中この海岸から一番遠く距つた地點へ達すると、今度は日本海を横ぎつて一直線に疾走し始めた。出雲の綠色の山々はすさり退いて青くなり、伯耆の妖魔のやうな仄かな海岸は雲の帶の如くに地平線へ溶け始めた。その時自分はこの恐ろしい小蒸汽船の速力に對する自分の驚を白狀せざるを得なかつた。それにまた殆んど何の音も立てずに進行した。それ程にその驚くべき小さな機關の運轉は圓滑であつた。が、深いゆるやかな搖れ方をして、重々しく搖れはじめた。眼には海は油の如く平らであつたが、水の表面の下に感ぜられる眼に見えぬ長いうねりが——太洋の脈搏が——あるのであつた。

伯耆は蒸發してしまつた。出雲の山々は灰色に變り、その灰色が見て居るうちにずん〳〵淡くなつた。それが次第々々に色無しになつて——透明になるやうに思はれた。と思ふうちに無くなつてしまつた。在るものは白い地平線で接合して居る青い空と青い海とだけであつた。

自分は恰も陸から數千哩離れてても居るやうに淋しかつた。ところがその薄氣味わるい時に、閑が出來て西瓜の中に居る自分等に加はつた老年の水夫が頗る物淋しい話を聞かせて呉れた。佛の海のことを話し、七月の十六日に海へ出て居るのは不運なことを話した。大きな汽船すら盆中は航海をしない、どんな船員だつてその時分は船を海へ出すことを敢てしない、と言ふのである。そしてその男は、その話したことを信じて居るに相違無いと自分は思ふほどに、如何にも質朴に眞面目に、次に記す話を物語つた。

『最初のは私がまだ至つて若い時でありました。北海道から乘り出したのでありますが、長い航海でありまして、風が逆ひ風でありました。そして十六日の夜になつたのであります。丁度此處のこの海で仕事をして居た時にてあります。

『すると全くだしぬけに、暗闇の中に、私共の船の後ろに——餘つ程近く來るまで氣が

付かなかつたのでありますが――眞つ白い――大きな和船が見えました。空から出て來たやうに思へましたから、皆んな變だといふ氣がしました。人聲がきこえる程私共の船に近い處に居りまして、その船體は私共の船よりもずつと高く突立つて居りました。大變早く走つて居るやうに思へました。だが、一向前よりも近く寄つて來ません。私共は大聲で呼びかけました。だが何んの返事もありません。それからじつとその船を見て居るうちに、その走り方が本當の船のやうではなかつたものでありますから、私共皆んな恐ろしくなりました。海は恐ろしい荒でありまして、私共の船は急に横へ傾いたり、船先を水へ突込んだりしますのに、その大きな和船はゆるぎもしないのであります。丁度私共が恐ろしいと思ひ出したその時、急にその船は消えてしまつて、一體本當に船が見えて居たのかどうか信じられない程でありました。

『それが最初のであります。が、四年前に私はまだもつと不思議な物を見ました。和船にて隱岐の國むけて行きをりましたが、今度も風て遲くなりましたから、十六日の日に海に居つたのであります。朝の事でありました、正午少し前でありました。空は黒く、海は非道い荒でありました。處が突然に、汽船が一艘私共の通つた跡を、大變早くやつて來るのが見えました。機關の、カタカタ、カタカタといふ音が聞える程近くへ來ました。が、甲

板に人一人見えません。それからその船は、いつも同じ距離に居て私共の船を追つかけ始めまして、こちらてその船の航路を外づれようとしますと、いつも方向を更へて、丁度私共の跡を追ふやうにするのであります。そこで私共はその船が何んだかと怪しみました。が、その船が姿を消すまては確とは分らなかつたのであります。泡のやうに消えたのであります、少しも音を立てずに。いつ見えなくなつたか確かとは誰にも分りませんでした。一番不思議な事は、その船が見えなくなつた誰もその消えるのを見たものはありません。一後で、私共の船の後ろで機關が――カタカタ、カタカタ、カタカタと――運轉して居るのがやつぱり聞えて居た事であります。

『私の見たのはそれだけであります。が、私共のやうな船頭て、もつと澤山見た者を私は知つて居ります。時には幾艘も後を追ふことがあります、――一度にてはありませんが。一艘が近くへ來ては消え、それからまた一艘、それからまた一艘と來るのであります。それが後へ來る間は恐がるには及びません。が、そんな船が、風に向つて、前に走つて居るのを見ると、それは大變惡るいのであります。船の者はみんな溺れて死ぬることになるのであります』

七

船を取巻いて居る光り輝いた空漠は、一時間足らずの間、引續き何の汚點も無かつた。すると自分等の船がそれへ向けて走つて居る地平線からして、灰色の小さなぼんやりしたものが出來て來た。ずんずん長くなつて、雲のやうに思はれた。實際雲だつたのである。が、徐々と、その下に、薄皮のやうな青い色をしたものが、その白雲を背に形を成して、やがて明確に一つながりの山になつた。段々高くなり青くなり、小さな鋸の齒のやうになり、その眞ん中に他の山の三倍の高さに聳えて、雲に括られた、色の淡い山が見えた。それは西の島にある、隱岐の聖山燒火山であつた。

燒火山には傳說がある。自分はそれを友から聽いた。その頂上には權現樣の古い社殿がある。十二月の三十一日の夜、靈火が三つ海から現はれ出て、社殿の處へ昇り、社殿の前の石燈籠の中へはいり、燈のやうに燃えて居る、といふことである。その光りは一度に海から現はれるのでは無く別々に現はれて、一つ一つ峰の頂へ上つて行くのである。みんなその光りが水から昇るのを見に小舟に乘つて出る。が、心の淸淨な者にだけ見えて、よこ

しまな考や願を有つて居る者はその靈火を見ようと待つて居ても駄目である。

船が進み行くうち、眼前には眼に見えなかつた妙な舟で——美くしい黃色な素敵に大きな四角な帆を掛けた長い輕い漁船で——突然點々を打つたやうな觀を呈した。あの帆は何んて美しいだらうと友に言はずには居れなかつた。友は笑つて、あれは古疊（註）で出來て居ると言つた。自分は望遠鏡で眺めて見て、如何にも友の言つた通り、古

註。日本の住宅の床は、その種々な部屋と一致して居る區劃に分けられて居る非常に大きな然し頗る淺い木盆に譬へることが出來よう。その分界は、水平よりも幾寸か高くなつて居て、部屋と部屋とを分つフスマ卽ち橫辷りする目隱しの便の爲め造つてある、溝のある磨きのかかつた木造物が爲して居る。この區劃區劃は、タタミ卽ち輕い藁布團（マトレス）ほどの厚みで、上を美しく綴つた稻藁で蔽つた莚（マット）をきつちりと其中へ入れて、仕切りと水面にならせてある。その莚（マット）の四角な端はきちんと合ふ。そしてその莚（マット）はその家の爲めに造るのでは無くて、その家を莚（マット）の爲めに造るのだから、どのタタミも全く同じ大きさである。だから部屋部屋の充分に出來上つて居る床は、大きな軟かいベットのやうなものである。固よりのこと日本の家では一切靴を穿くことは出來ぬ。その莚（マット）は少しでも汚れると、直ぐと新らしいのと取換へる。

疊の藁編の上掛てあることを知つた。にも拘らず、青い和らかな水の上に隱岐帆船のこの初めての淡黃の點在は面白い眺であつた。

その帆船は黄色な蝶が通つて行くやうに疾走し去つて、海はまたも空になつた。稍〻左舷に當つて、次第に近づく青い絶壁の線のうちの一點が次第々々に形が出來て來て色を變へた。上の方は牙えない絲で、下の方は赤味を帶びた灰色てある。それが分明になつて表面に黒い場處のある大きな岩と判つて來たが、陸の他の部分はまだ青の儘て居た。その黒い場處は近づくに從つて黒さを增して來た、——それは陰影に充ちた大きな山峽であつたのてある。するとその先の青い絶壁も亦綠になつて、その裾の處は赤味を有つた鼠色になつた。船はその大きな岩の右手へと進んて行つた。見るとその岩は、他と離れて居る、人の住まつて居ない、波嘉島といふ小島てあつた。と思ふ次の瞬間に船は早や高い知夫里島と中島との間を、隱岐群島の中へと航進しつゝあるのてあつた。

八

第一印象は殆んど薄氣味惡るいものてあつた。兩側とも海水から眞つ直ぐに屹立して、高い綠色の森閑とした小山が、夏の水氣の爲めに色合を變へて、青色の絶壁と峰と海角との奇妙な通景を爲して、眼前に蜿蜒と伸びて居た。人間が住んて居る形跡は少しも見えなかつた。山はそのむきだしの岩の蒼白い麓から、なだらかに高まつて行つて、丈の低い草木が生えて居る小暗い荒地に及んてゐた。聞えるものは、藝者の鼓の微かな音のやうなポムポムポム！ポムポムポム！といふ自分等の蒸汽船の小いさな機關の音だけて、絶對に何の音も無かつた。そしてその殺伐な靜寂が數哩續いた。たゞ材木になる大木が無いといふ事が、峰を有つこの山々はいつか人の足に踏まれたことがあることを證明して居るだけてあつた。ところが全く突然に、左の方に、山のとある皺の處に、灰色の小さな村が現はれた。すると汽船は鋭い叫び聲を發して停つた。その折その山々が、その叫びを七たび反響した。

此村は知夫里島の（中島は右舷に見える島なのてある）知夫里村といふので、確に漁師の屯所に過ぎぬものてあつた。先づ、入江から壁の如く突き出て居る石を積み上げただけの波止場があつた。次に、その隙間から或る神社の前の鳥居が見え、十軒許りの人家が、その後ろに一軒、その後ろに一軒、屋根の先きに屋根と、凹んだ小山を登つて居るのが見える大きな樹木があつた。それから、その樹木の上の方に當つて、荒涼たるが中に、段々畠になつた耕作地が少しばかりあつた。たゞそれだけてあつた。汽船は郵便物を渡す爲めに停つて、すぐとそれを通り過ぎた。

ところがそれからは、豫期に反して、風景が前よりか美しくなつた。兩側の岸が同時に後すさりもし、また高くもなり、船は高い島三つて取圍まれて居る內海を橫斷しつゝあるのであつた。初には我々が進む路は霞が濛々とかかつて居る小山に妨げられて居るやうに見えて居た。が、それが段々近づいて綠色になると、兩側とも小山と小山の間に、突然素晴らしい見事な割目が開けた、——それは、幾十種の、天鵞絨のやうな藍色からして絶妙なそして妖異な淡い色合に至るまでの、種々な度合の青から成つて居る、峰と絶壁と岬との何ん哩と續いた驚歎すべき通景を見せて居る山の門であつた。薄い色の靄が遠いもの總てを夢のやうにぼかし、嵯峨たるむき出しの岩をばいろんな色の幻で包んで居つた。

總じて西部及び中部日本の風景の美は、他の邦土の風景の美とは異ふ。それには獨得の特性があるのである。時折外國人は、山道ての或る眺望によつて、或は飛沫の霧を透して見た突出した一望の海岸によつて、以前の旅行の記憶が突然喚起せらるゝのを覺えることがあらう。然しこの似て居ると思ふ幻想は來るも迅いが消えるのも迅い。委曲の諸點が直ぐ判然として來て、前に見た事の無いものになる。そしてその懷ひ出は形だけが起こしたもので、色が起こしたものでは無いといふことに氣付く。尤も人目を悅ばすいろんな色が

あるにはあるが、山の綠の色では無い、土地の色では無い。耕作された平地、伸びつゝある稻の廣い地面、これが暖か味のある綠に近い色を提供することはある。が、然しこの自然の全體の一般的色調は薄黑てある。廣大な森林はどすぐろい。草の色合は苛いか鈍いかてある。熱帶地方の風景に燃えて居るやうな、火のやうな綠は存在して居らぬ。そして唉き盛る花も、それが燃え出る四邊の草木の重い色調と對照して、それて一段と美妙な光りを放つのてある。公園と庭園と耕作された野原の他には、青綠の色合が妙に暖か味と軟かみとを缺いて居る。だから英吉利の芝生の美はしさを成す所以の、あんな豐麗な綠は何處にも之を見出すことを希望する要は無い。

ても東洋のこんな山水には、不思議な大氣が造り出す——異常な色の——美妙な、仙鄕的な、言ふに言はれぬ幻の色の——妙趣がある。水蒸氣が、——幾百通りの色調を有つた青と鼠色との蠱惑を峰々に浴びせ、むき出しの絶壁を紫石英に變じ、黃玉色の朝に妖魔の如き紗を展べ擴げ、眞晝の光耀をば地平線を磨り消して誇大し、夕をば黃金の煙もて充たし、水面を唐金色ならしめ、日沒をば眞珠母の靈的な紫と綠とて緣取して——遠近を惑はしめるのてある。さて、あの驚歎すべきエホンを——今は非常に稀になつて居るあの繪本を——造つた古昔の日本畫工は、その蠱惑の感を色に凝固させようと試みたもので、そし

て殆んど不思議な程度にまでその背景に成功した。正しくその理由の爲めに、その前景に、日本の農業の特色を知つて居ない外國人には謎になつて居るものが少小ある。さういふ古い繪本には、燃え立つ鍍金色の畑があり、微かに紫を帶びた野があり、深紅と雪白との樹木を見るであらう。そして恐らく諸君は『何んて馬鹿な』と叫ぶであらう。が、然し日本を知つて居れば、『氣持がいゝほど眞實だ』と叫ぶであらう。といふのは、その燃ゆる黄色の畠は菜種が咲いて居る畠だと知り、一面の紫はゲンゲの花盛りの野だと知り、雪白や深紅の木は空想のものでは無くて、斯の國の梅の木と櫻の木との特有な或る開花現象を忠實に現はしたのだと知るであらうから。が、こんな色彩誇張は、特別な季節の極く短い時期の間だけ目撃し得らるゝので、一年の大部分を通じて内地の山水の前景は、色の點に於ては、餘程くすんで居ることが多い。

この背景の魔法を行ふのは霞である。でも霞が無くとも、日本の山水には一種奇異な殺伐な暗い美が——言語では容易に判然と述べ難い美が——ある。その祕密は之を山嶽の異常な線に、山脈の妙に唐突な凹凸と皺波とに求めなければならぬ。互に能く似て居る山は一つも無くて、銘々がそれ獨特な風變りな恰好を有つて居る。山脈が可なりな高さに達して居る時には、柔らかに次第に膨らんで居る線は稀である。一般の特徴は唐突であり、そ

の妙趣は不規則の妙趣である。

疑も無くこの不思議な自然が、不規則が裝飾の上に有つ價値に就いての、その無類な感念を、第一に日本人に鼓吹したのであり——日本人の藝術を他のあらゆる藝術と異ならしめる所の、そして之を西洋に敎へるのが日本人の特別な使命であるとチエムバレン敎授が言はれて居る所の[註]、構圖のそのたゞ一つの祕密を日本人に敎へたのであつた。確に、どんな人でも一たび古昔の日本の裝飾藝術の美と意義とを悟るやうになると、その後はそれに對應する西洋の藝術に殆んど面白味を見出すことが出來なくなる。その人が眞に學び得たことは、自然の最大の魅力は不規則に存す、といふことである。そして恐らくは、人生と作品との最大魅力はこれ亦不規則といふことに存しはせぬか、といふ問題について少からざる價値を有つ文が物されることであらう。

註。「日本のことども」の中にある藝術論參照。

九

知夫里村から船は、西の島に在る浦郷の港に向つて西進した。近づくに従つて焼火山が壮大な観を呈して来た。遠く離れて見ては溫順しい美しい恰好に見えたのであつたが、その青の色調が發散すると、その貌（かたち）が凹凸になり物凄くさへなつた。全部薄黒い青緑に包まれたぎざ〳〵な大きな山で、その青緑の中から、ぼろ切の中からのやうに、此處其處に非常に亂暴な恰好をしたむき出しの岩が突き出て居るのである。その絶頂の不規則な線へ落日の光りが射した時、其岩の一つが非常に大きな灰色の頭蓋骨のやうに見えた事を自分は覺えて居る。この山の麓に、中の島の海岸に面して、上は痔せこけた灌木に蔽はれて居る、高さ數百呎の、金字塔形の岩山が——モンガクザンが——突立つて居る。その荒涼たる山頂に小さな社殿がある。

タクヒザンとは焼く火の山といふ意味で——恐らくはその靈火の傳説か或はその噴火時代の古代の記憶かに基いての名である。モンガクザンといふは文覺——高僧文覺上人——の山といふ意味である。文覺上人は隱岐へ逃れ來て、多年此山の頂でその甚重な罪惡の贖

罪苦行を行つて、獨りで住まつて居たといふことである。上人が眞實隱岐へ來られたことがあるかどうか、自分は言ふことが出來ぬ。さうで無いと公言する口碑がある。だが兎に角この小峰は上人の名を數百年有ち來たつて居るのである。

さて文覺上人の身の上は斯うである。

數世紀前、京都の都に、その名を遠藤盛遠といふ衞戍の將があつた。ある貴いサムラヒの夫人を見て戀し、その夫人がその熱望を聽くことを拒むと、自分が申述べる方策に同意しなければ、その一家を滅ぼすと誓言した。方策といふは或る夜、自分を邸内へ忍ばせてその夫を殺させよといふので、それを果してから自分の妻になれといふのであつた。

然し彼女は、同意した振をして、自分の貞操を全うする高潔な計略を案出した。即ち、夫に勸めて都を立去らしめて置いてから、遠藤へ手紙を送つて、或る夜その邸宅へ來るやうにと言ひ送つた。そしてその當夜、彼女は夫の服を身にまとひ、髪を男の髪の如くつかね、夫の臥す處に寢ねて、眠つた風をして居つた。

すると遠藤は深更に抜身を携へてやつて來て、一撃の下にその睡眠者の頭を打切り、そして髪を手に首を摑み上げて見ると、それは自分が戀して無體なことを言ひ掛けたその女の首であつた。

そこて彼は非常な悔恨の念に打たれて、近くの或る寺へ急いて行つて、自分の罪を自白し、悔悟をして髪を切り、出家となつて文覺といふ名を名乘つた。そして後年彼は至德の境に達した。だから今ても彼に祈念する人があり、彼の靈は國内到る處に尊崇されて居る。

今東京の淺草の、觀音樣のあの大きな寺へ行ける小さな妙な通路の一つに、見世物になつて居る驚くべき像を——たゞ木て造つたものてはあるが、生きて居るやうに見える人形を——日本の古い傳說を說明して居る人形を——いつても見ることが出來る。其處へ行くと、右手に血まみれな刀を持ち、左手に美しい女の首を提げて、遠藤が立つて居るのが見られる。その女の顏は、たゞ美しいだけてあるから、諸君は直ぐ忘れるかも知れぬ。だが遠藤の顏は、地獄そのものてあるから、忘れることはないてあらう。

一〇

浦鄕は大きさは多分充分美保關ほどはあり、美保關同樣、半圓を爲して居る峻しい小山の麓の狹い地面に建てられて居る妙な小さな町てある。が、美保關よりももつと原始的てもつと色彩に乏しい。そしてその街路は、といふより寧ろ路次は、船の舷門の幅も無いぐ

らゐに、家々がなほ一層密接に絕壁と海との間に詰め込まれて居る。船が錨を投ずると、自分の注意は突然不思議な光景に惹きつけられた。それは、町の屋根の上高く、臺地になつて段々高まつて居る峻しい丘の横にある墓地に、風に飜つて居る不分明な長い恰好の物が澤山白く見える眺てあつた。その墓地には灰色の墓と佛像とが澤山あつて、その墓一つ一つの上に、細い竹竿に結びつけた白紙の妙な旗があつた。遠眼鏡て見るとその旗には、佛敎の文言の南無妙法蓮華經、南無阿彌陀佛、南無大慈大悲觀世音菩薩、其他の聖語が書いてあるのが見えた。訊ねて見て、毎年盆前の全る一と月の間、他の種々な裝飾的或は表象的な品物と共に、さういふ旗を墓の上に樹てるのが浦鄕の習慣だと知つた。

海には裸體の水泳者が一杯居て、笑ひながら歡迎の語を叫んだ。そして、輕い迅い小舟が澤山、裸體の漁師に漕がれて、乘客と荷物とを求めに矢の如く出て來た。自分は此時初めて隱岐の島の人の體格を觀察する機會を得た。そして、男は老幼とも强壯な容貌をして居るのに感心した。成人は自分には出雲海岸の男子よりか丈が高くもつと力强い型に見えた。そして鳶色の背や肩に、櫓を漕いて居る時、非道い勞働をさせに擇まれた人間のうちに在つてすらも、日本ては割合に稀なものを——筋肉の素晴らしく立派な發達を——見せたものが少からず居つた。

汽船は浦郷には一時間停つて居たから、上陸してそこでの一等の宿屋で食事する時間があつた。頗る清潔な小綺麗な宿屋で、食事は境の宿屋のよりか無限に優つて居つた。でも請求した代金はたつた七銭、そしてそこの老亭主は與へた茶代の全部を受取ることを斷り、半分以下を納めて殘部を手柔かに強ひて自分のユカタの袖の中へ返した。

一一

船は浦郷から中の島にある菱浦へと進んで行つた。そして島々の間を進航するに從つて景色がいつも層一層と美しくなつた。その水道は百と形を異にした山々の間を非常な深みの靜けさを以て流れて居る大きな河だと思ひ誤らせる程の幅しか無かつた。その長い美しい眺めは到る處、海の霞て青味を帶びた峰々の壁に遮ぎられて居て、兩側には深い底から眞直ぐに聳え立つて居る赤味がかつた灰色の絶壁があつて、その粗雜な面のどんな小さなごつごつも、少しの捩ぢゆがみも無しに、恰も鏡にうつしたやう、かつきりと水に映じて居つた。菱浦に達するまでは水平線は顔出しをしなかつた。しかも其折も、恰も河口から見るやうに、高い二つの海角の間からだけ見えるのであつた。

菱浦は浦郷よりか遙か綺麗てある、が、人口は餘程少い、そして漁村といふよりか、寧ろ農を主とした繁榮な町といふ外貌を有つて居る。山の多い島の內地へと次第になだらかに上つて居て、其處に可なりの面積の耕作地を見せて居る、低い小山が造つて居る入江の緣に沿うて曲つて居る町てある。家屋は稍〻散在してゐて、多くの場合庭園あるが爲めに孤立して居る。そして海に面して居る建物は中々立派な近代的な構造てある。浦郷は隱岐中での一番好い宿屋を自慢にして居る。そして新しい社寺が二つある——どちらも個人の寄進に係るもので、一つは禪宗の寺、一つは出雲大社教の社てある。前述の宿屋の持主たる金持の寡婦がその寺を建立したのてあり、この土地で一番の富裕な商人がその社を寄進したのである。この社はその大きさにしては自分がそれまで見たうちて一番立派なミヤの一つてあつた。

一二

隱岐群島の主島たる島後は、時にはそれを『隱岐』と呼びもするのてあるが、島前諸島

の東北八哩離れて非常に危險な漫々たる海の向うに在るのてある。船は浦郷を去ると、直ぐそれへ向けて進んだ。その大海へ出て行くには、中の島と西の島との間にある狹い妙な海峽を通る。其處は絶壁が非常に大きな城塞の——層を爲して高まつて居る稜堡や堡壘のたやうに見える巨大な岩が三つ、その水路の口近く深い海から、壞れた塔の如くにそゝり立つて居る。そして船がそれを左舷にして通る中の島の最後の海角は、これは赤裸々の赤い大きな岩て、烏帽子岩と呼ばれて居る程あつて、如何にも妙な恰好をした一點となつて地平線上に浮ぶ。

船が海のうねりへ辷り出ると、大海の深底から立ち現はれて居る他の異常な形をしたものが見える。地平線を後ろに突兀たる半面影像になつて見える『蝙蝠』といふのは、大きな穴が一つ突き拔けてゐて、その穴が眼のやうにぎら〳〵光つて居る。その先きに大きな岩が二つある。曲つて、尖んがつて、上の處で殆んどつながつて居るから、蟹がその挾み爪を擡げて居るのに怪しくも似て居る。それからまた、極く近くへ寄るまでは、船を漕いて居る人間の姿かと思はれる小さな黑い岩が見える。その先きにまた島が二つある。人の住まつてゐない、近寄れもせぬ、そしてその邊には警戒を要するうねりが何時もある松島

と、それよりも高いぐらゐて、赤味を帶びた巨大な絶壁となつて海の中から飛び出して居る大森島とてある。その忌はしげな巨岩には何か物凄い力が——その横を通る時自分等の船をゆるめかせ震はせる何か不可思議な力が——あるやうに思はれた。が、自分は大森島のその恐ろしい絶壁の下に驚嘆すべき或る色彩を見た。その絶壁が傾く入日に照らされて居たので、輝やかしいその岩の光りが水に落ちて居る處は、その濃藍色の漣が一つ一つ唐金の光りを閃めかせてゐた。自分は金屬性の菫色インキの海のことを考へた。

島前から、天氣が惡るくない折は、島後の絶壁を判然と見ることが出來る。その絶壁には、此處其處に白墨の白さの線條がついて居て、霞のかかつた日にもその青色の中に拔け出て見えるのてある。その絶壁の上に大きな山が一つ見える。それは伯耆の船乘には目標（ポアント・ルノエル）點の、大滿寺山てある。尤も島後は山々の大きな一と塊りなのてある。

その絶壁はずん〳〵綠色に變つて行つた。そして自分等の船はそれに隨いて東の方へ半時間許り走つた。するとその絶壁が思ひがけ無く且つ大きく開けて、遙かに陸地の方へ廣うなつて居る、小山が四方を圍んて居る、そして船が一杯に居る、素敵に見事な入江を見せた。ごちや〳〵した帆柱の向うに、長く灰色の一線を爲した家並の正面が、半圓形の絶壁の麓に、そつと眼に映つて來た。西郷町なのてある。そして艫てのこと船は石の波止場

に着いた。そこて自分は隱岐西郷に一と月の別を告げた。

一三

西郷は一大驚異てあつた。見るてあらうと期待して居た大きな漁村ては無くて、行つて見ると境よりも遙かに大きく美しく且つあらゆる點に於てもつと近代的な町てあり、立派な商店に充ちた長い街路のある町てあり、勝れた公共建物のある町てあり、全體の樣子が商業の繁榮を示して居る町てあつた。建物の大多數は商人の二階建の手廣い住宅て、物すべてが晴々した新しい觀を呈して居つた。家々の塗がして無い木造部は、まだ黑ずんて灰色になつては居らず、屋根瓦の青い色はまだ生ま〳〵して居つた。それはこの町が大火後近い頃建ちなほり、それも前よりか大きい美くしい設計て建ちなほつたからだと知つた。

西郷は實際よりかも大きく見える。家數は千軒ばかり、それは西部日本のどんな地方に於ても少くとも五千の人口を意味するのてあるが、西郷てはそれよりも餘程多くの人口を意味するに相違無い。千軒ばかりのこの人家が三つの長い街路、ニシマチ、ナカマチ、ヒガシマチ（それ〳〵西町、中町、東町といふ意味の名）を成してゐて、それを數多くの橫

丁と路次が區分して居る。此處を不釣合なほど大きく見せるのは、その街路が妙に捩ぢれて居るからて、海岸の不規則な出入に隨いて曲つて、重なり合ひさへもして居て、或る地點から眺めると、在りもせぬ深さがあるやうに思はせるからてある。それは西郷は、結構な地位てはあるけれども、奇態な地位に在るからてある。八尾川といふ川の河口に近くその兩岸を緣取つて居て、その上に色んな出張つた陸地へ延び出して居るほかに又その見事な入江の內側の大部分に沿うて擴がつて居るのてある。が、外觀よりか小さくはあるけれども、その蛇とうね〳〵して居る街路を皆んな歩くのはたつぷり半日仕事てある。

八尾川て區分されて居るほかに、此町は橋が澤山に架つて居るいろんな水路て切斷されて居る。背後の丘陵には大きな建物が數々立つて居て、そのうちには三百の生徒を容れる設備のある小學校があり、富裕な或る市民の寄進に係る（まだ新しい）綺麗な佛寺が一宇あり、監獄があり、大きさの割には隱岐どころか島根縣中ての一番美くしい日本建築だといふ評判に背かぬ病院があり、また小さくはあるが甚だ立派な庭園が數々ある。

港はといふと、夏の日なんかは、船の碇泊して居るのを三百以上數へることが出來る。不平家は、殊に今なほ木の錨を用ひて居るやうな種類の不平家は、深いと言つて零す。が、軍艦は何んとも言はぬ。

一四

決して一度も、西部日本の何處てても、西郷に居た時ほど居心地よかつたことは無い。薦められて行つた宿屋には、客は友と自分と二人きりてあつた。二人が占めた二階の、天井の高い廣い部屋は一方には宿の庭の横を流れて居る八尾川の河口の向うの美くしい山の風光を恣にすることが出來るのてあつた。海風が晝も夜も吹き斷えぬので、暑い季節には客へ侑めるのが日本の習慣の、あの綺麗な扇子が不用てあつた。食物は驚く許り上等て、珍らしい程變化に富んて居り、欲しければセイヤウレウリ（西洋の料理）を——フライにした馬鈴薯添へてのビステキ、ロオスト・チキン其他を——注文して宜いと言はれた。自分は旅行中は純日本式食事を守つて手數を避けることに決めて居るから、その申出を利用はしなかつた。が、住民五千の他の日本都市ては何處だつて得ること殆んど不可能なものを西郷て申出を受けようとは少からぬ驚異てあつた。が然し浪漫的見地からしては此發見は失望てあつた。日本全國のうちて一番原始的な土地へ遣つて來たのだから、近代化する總ての勢力の範圍外はるか遠くに自分を見出すことと想像してゐ

たのてあつた。だからフライにした馬鈴薯添へてのビステキを懷ひ出させられたのは幻滅てあつた。此島には新聞も電信も無いといふその後の發見も充分には自分の慰安にならなかつた。

ところが如上の樂を味はふことを妨げる重大な障害が一つあつた。それは、何物にも浸徹する、到る處に存在する、重くるしい非道い臭氣——肥料として使用する、魚の腐る臭氣てあつた。幾噸といふ烏賊の臟腑を八尾川の向側の田畠に使用するので、何處の家へもその惡臭を眠ること無き海風が吹いて來る。暑さの折は大抵な家ては香を焚きつゞけて居るが駄目てある。三四日續けて町の中に居ると、前よりかその臭氣に堪へ得るやうになる。が、たゞの二三時間ても町を去ると、歸つて來た折、自分の鼻が習慣の爲めにどんなに癈痺して居たか、町を出た爲めにどんなに力が恢復したか、を知つて驚く。

一五

西郷へ到着の翌日の朝、或る若年の醫師が自分を訪問して、その家て食事を共にして呉れと乞うた。西郷に泊つた外國人は自分が初めてであるから、自分を見るの好機會を有て

ば一家の者も自己も甚だ愉快とするといふことを頗る率直に説明した。が、その人の生得の慇懃が、他國人の好奇心に滿足を與へてやるのに自分が感じたかも知れない、如何なる躊躇にも打ち克つた。自分はその人の美くしい邸宅で非常に愛想よく待遇された計りでは無い、そのうち多くは斷らうと力めても斷り切れなかつた數々の贈物を實際背負ひ込んで送り出されたのであつた。が、然したゞ一つ自分は、先方の感情を害する惧れがあつても、頑として聽かなかつた。それは驚くべきバテイセキ（この品物に就いては後に話さう）の贈物であつた。當に非常に高價なだけては無い、非常に稀なものだといふことを知つてゐたから、自分は頑張つて受納を拒んだ。主人は到頭屈したが、後で私かにより小さいのを二つ自分の宿へ送り屆けて吳れた。是は日本の禮儀として返戻することが出來なかつた。西鄕を去る迄に自分はこの紳士から他の數々の思掛け無い親切を蒙つた。

其後間も無く西鄕小學校の教師の一人が自分を訪ねて吳れた。自分が隱岐に興味を有つて居ることを耳にして、手製の此島の美くしい地圖二枚、西鄕のことを書いた小さな本一冊、それから贈物としてその人が作つた隱岐の蝶類昆蟲類の蒐集を持參したのであつた。全くの他國人に純粹な厚意の斯んな驚くべき表明に出遇ひさうなことはたゞ日本だけでのことである。

今一人の訪問者で、自分の友に會ひに來たのは、前述のと同じやうな日本人獨得な行爲を演じたが、これは自分に少からぬ苦痛を味はしめた。三人は坐つて居て一緒に煙草をふかした。その男は目立つて美くしい煙草入と、小さな銀の煙管の入つて居る煙管筒とを帶から取出して、煙草を吸ひ始めた。その煙管筒は黑珊瑚のやうなもので出來てゐて、珍らしい彫がしてあつて、そして透明な瑪瑙の玉を通した三色絹糸組合せの重い紐でタバコイレ（バウチ）に着けてあるのであつた。自分がそれを賞めるのを見ると、突然袂から小刀を取出して、自分が止め得ないうちに、その煙管筒を煙草入から切り離して、それを自分に進上すると言つた。自分は、その驚歎すべき紐を切つた時、その男自らの神經を切り斷ちてもしたやうな氣持がした。でも、一旦切つてしまつた後てその贈物を斷るのは極めて失禮てあつたらう。自分は返禮に或る贈物を受けさせた。が、この經驗後自分は、隱岐に居る間は、どんなものでもその持主の面前ではもう賞めぬやうに用心した。

一六

日本のどの國にも特有の方言がある。隱岐の方言は、斯く孤立して居る邦では豫期し得

らるゝ如くに、殊に際立つて居る。が然し西郷ては出雲の方言が廣く用ひられて居る。其處の町民は風俗も習慣も餘程出雲の田舎人に似て居る。尤も、出雲人が澤山交じつて居るし、大きな商賣は大抵他國人の手に依つて營まれて居るのてある。女は出雲の女ほどに人目を惹くやうには思へなかつた。中々美くしい女を隨分と見かけたが、それは他國者てあつた。

が然し、或る國民の肉體的特徴を正當に研究の出來るのはたゞその內地に於てである。隱岐の島人の肉體的特徴は——その多くを自分は訪れた——漁村て一等能く認めることが出來る。到る處て立派な強壯な男と元氣な女とを見た。そしてその強健には氣候と不斷の運動とが與つて力あるのてあらうが、滋養になる食物が非常に豐富て低廉なことが與つて力あるのだと自分は思つた。實際、隱岐て生活するのは非常に樂て、他の海岸の人て生活に困難を感ずる者は、働く機會を得さへすれば、報酬は前より少くても、隱岐へ移住して來るほどてある。自分に面白かつた光景は、天氣が好いと、日沒二時間前にいつも海へ突進し始める漁船の盛んな行列てあつた。筋骨逞しい漕ぎ手が——女が多い——その輕い船を推して行く驚く可き迅さは、數代の根氣強い經驗に依つて初めて得られた熟練を語つて居るのてあつた。も一つ驚いた事は船の數てあつた。或る晩、沖合に、自分は三百

と五つの松明を視界に數へることが出來た。松明一つは一と乘組を示すのてある。そして此處の海岸の四十五ヶ村の殆んど何の村からても同時にこれと同じ光景を見ることが出來ると知つた。人民の大部分は、實際、夏の夜は海て暮すのてある。漁期中脚の迅い汽船て夜、出雲から濱田へ旅しても意外の光景に接する。百哩の間、地平線は松明て燃えて居る。一と海岸全體の勞役が、その偉大なイルミネエションに示されて居るのてある。

そこの人間はこの不毛な地にあつて、強壯さを減じたといふより寧ろ增したやうに思はれるけれども、此國の牛馬は退化したやうてある。著しく小形てある。出雲の小牛よりも大して大きからぬ牛や、山羊の大きな程の小牛を自分は見た。馬否、むしろ小馬は隱岐がむしろ自慢をして居る特別な品種のもので——至つて小さいが丈夫てある。もつと大きな馬が居るとは聞いた。が、一匹も目にしなかつたし、またそれは輸入されたものかどうか分らなかつた。自分が隱岐の小馬を初めて見た時、佐々木高綱の軍馬が——クログルウの物語唄に見えるカイラットといふ馬に劣らず日本の物語に有名な馬が——隱岐の產てあつたとこの島人が明言するのが自分には奇妙に思へた。ところがその馬は嘗て隱岐から美保關まて泳いだといふ口碑がある。

一七

日本には殆んど何の郡何の町にも其處のメイブツ或は其處のメイショがある。或る場處のメイブツといふのは、天産物であらうが人工品であらうが、其處の特別な物産である。或る町或は郡のメイショといふのは其處の觀處て——何か宗教的、傳說的、歷史的或は愉樂的の理由で——訪ねて行つて見る價値のある場所である。社寺や庭園、異常な樹木や奇妙な岩、それがメイショである。其處からして美くしい景色が眺められる場所、又は、春は櫻の花とか、夏の夜は螢のちらつく光りとか、秋は楓の紅葉とか、或は支那の詩人がそれへキンリョウ（金龍）といふ面白い名を與へて居る水上のあの蛇のやうな長い月光の漾ひとかいふやうな、愉快な光景を眺め樂しむことが出來る場所も、同樣にまたメイショである。

この一章の原文にケムブツとあるのは、メイショケムブツといふ言葉からして、原著者が誤つてケムブツなど、メイショを意味する語のやう思つて用ひたものに相違無いから、譯文ではそれを訂して置いた。（譯者識）

隱岐の大名物は日御崎の大名物と同じて——鰯てある。これは支那にも日本にも大いに需用のある食料品てある。が、美保關て獲れるのは白くまた長さが普通十五吋あるのに、隱岐と日御崎とのは十二吋を越すのは稀て且つ色も赤味を帶びて居る。美保關と日御崎との漁業は殆んど世に知られてゐない。が、隱岐の漁業は日本全國はおろか、支那、朝鮮にも名がきこえて居る。この島が繁榮を來たし、且つ又その極く僅かの部分しか全く耕作の出來ない海岸に、三萬の生靈を支持し來たつて居るのは、全く海の耕作に由つてである。非常に多額の烏賊を船て本土へ運ぶ。が、隱岐にとつて此產物の最上の顧客は支那人であると聞いて居る。この供給がいつか絕えてもすれば、その結果は想像も及ばぬ不幸なものであらう。だが、今のところ、この漁獲は數千年行はれ來たつて居るけれども、無盡藏のやうに思はれる。幾百噸といふ烏賊を捕り、貯藏し、毎月々々輸出し、そして幾百英町の地面がその臟腑や殘物て肥沃にされて居るのてある。この漁獲に就いて警察の或る役人が自分に色んな事を語つてきかせた。西鄕の東北海岸てはたゞの一と晩に二千尾以上の烏賊を捕ることは敢て珍らしい事ては無いといふ。網數四五度の獲物の重さて船がはちきれたことが

あるから、積入れるのに用心しなければならぬといふ。が然し、このセピアのほかに、同じく食用の重要物産を供給して呉れる別種のカトル・フイッシュがこの海岸に群集して居る。それはあの恐ろしいタコ卽ちオクトパスてある。一匹の重さ十五貫卽ち殆んど百二十五英斤の章魚を時々中村の漁場近くて捕る。そんな化け物のやうな動物にこれまて人が危害を蒙つた記錄が無いと知つて自分は驚いた。

隱岐の今一つの名物は——知られて居て然るべきてあるのに餘り世に知られてゐない——バティセキ卽ち『馬蹄石』といふ美くしい眞黒な石てある。島後にだけ在るもので、しかも大きな塊になつては居らぬ。重さは燧石ぐらゐて、且つまた燧石のやうに殺げる。が、これは磨きの效く石て、磨くとその光澤は瑪瑙のやうてある。紋理も斑點も全く無い。その強度な黒色は決して變らぬ。いろんな美術品を馬蹄石て造る。硯、盃、小箱、小さなダイ卽ち花瓶や小さな肖像を載せる臺など。此材料は出雲の湯町の美くしい瑪瑙同樣に細工が出來るから、飾玉すら造られる。そんな品物はその製造元ても割合高價てある。

馬蹄石の起原に就いて妙な傳說がある。馬蹄石は、その色か、或は屢〻その天然狀態に於て見られる所の、又曲線を爲して殺げ易い傾向があるのて生ずる所の半圓形の痕かが、思ひ樣によつては馬の蹄に何處か似て居るのてその名があるのてある。が、傳說に據ると、

或る神馬の——源氏の勇士佐々木高綱のあの驚く可き牝馬の——蹄が觸つて出來たのだといふ。その牝馬には子があつたが、島後の或る深い池へ落ちて死んだ。牝馬は水に映つた己が頭の影に欺かれて自分もその池へ飛び込んだ。が、子は見つからなかつた。長い間徒に探して歎いた。が然し堅い岩さへその牝馬に同情して、その蹄が水の下て觸つた處が馬蹄石に變つた、といふのてある。

殆んど馬蹄石に劣らず美しい、そして同じく黒い、今一つの隱岐名物がある。それはウミマツ卽ち『海松』と呼ぶ珊瑚性の海產物てある。煙管筒や筆立や他の小さな品物をそれて製造する。そして、磨くと黑漆て塗つたやうてある。海松て造つた品物は稀て且つ高價てある。

ところが眞珠母の物品は隱岐ては甚だ廉い。そしてそれがまた別種の隱岐名物になつて居る。アハビ卽ち『鮑（シイ・イア）』の貝殼を、これは西部日本の此邊の海ては驚く許りの大きさに達するが、それを巧に磨きまた切り斷つて、その表面の虹色の光りが恰も百通りの色の火がきらめくやうに見える不思議な皿や鉢や盃や、その他の器物に變へて居る。

一八

松江て出版された或る小さな本に據ると、隱岐の國のメイショは、その四つの主もな島の三つの間に分けられて居る。知夫里島だけが特に興味のあるものを何一つ有つて居ないのである。數代の間、島後での人引きつけ場處は、都萬目里の願無し地藏の寺と、油井村にある瀧（檀鏡瀧）と、下村の玉若酢神社の前の大杉と、それから其處に馬蹄石があるといふ津井の池といふ小さな湖水とであつた。中の島には、海士村に、流罪になり給うた後鳥羽天皇の御墓と、時折其處に御住みになつて居た、そして今日に至るまて御遺物が保存されて居る、助九郎といふ古昔の長者の邸宅とがある。西の島は、別府に、流罪になり給うた後醍醐天皇記念の神社と、無雲の日には其處から此群島全體の壯觀を眼にすることが出來るといふ、燒火山の頂上の、あの權現樣の神社とを有つて居る。

知夫里島は名所は無いけれども、知夫里といふ貧乏小村は——隱岐通ひの汽船が西郷への途中必ず寄港するあの知夫里村は——此群島の傳說總てのうち恐らくは最も興味あるものの舞臺てある。

五百六十年前、配流の後醍醐天皇は警護者の眼を脫れて西の島から知夫里へどうかかうか逃げ終せられた。するとその小村の色黑の水夫共は、必要あらば生命を賭しても、天皇に仕へ申さうと申出た。皆はその船へ、多分その子孫が今も出雲や伯耆へ持出すのと同じ干鳥賊てあつたらう、『乾たる魚』を積込んて居る處てあつた。天皇は首尾能く伯耆か出雲へ上陸させて呉れ〳〵ばお前等を忘れまいとお約束になつた。そこて皆の者は天皇を或る小船にお乘せ申した。

處が出船して少ししか行かないうちに追手の船が見えた。そこて天皇に向つて横に臥てお出てになるやう申上げ、玉體の上へ高く乾魚を積み上げた。追手の者は船へ乘込んて搜索した。が、非道い臭の鰯へは手を觸れようとも思はなかつた。そして知夫里の者共は訊問されると、話をこしらへて、虛僞の手掛を天皇の敵に話してきかせた。斯くして鰯のお蔭てこの善良なる天皇は遠島を免れ得給うたのてある。

一九

自分は名所のうちの或る物を實地見る上に於て色々な困難があることを知つた。隱岐全

體に、唯々山路があるだけて、道路といへる道路は全く無い。從つてまた、西郷一番の醫者が輸入した、街路てだけ使用の出來る一臺を除いて、人力車は一臺も無い。籠さへ、これもその醫者が使用する一挺を除いて、他には無いのてある。強壯な百姓が言ふ處に據つても、路は恐つそろしくてこぼこて、それにまた遠さが、殊に一年のうちて一番暑い今、うんざりさせる。小馬は儉へる。が、出雲西部の此處と似寄つた未開地ての自分の經驗が、たゞ瀧一つ見るだけのことに、辷り易い壑を通り早瀬の床に沿ひ、松が一杯生えて居る小山を幾つも越えての長の苦しい乘馬をしたところて、愉快も利益も得られはせぬと思はせた。自分は檀鏡の瀧見物の念は放棄した。が、出來ることなら、顎無し地藏は見ようと決心した。

自分は、その苦痛は深さ幾百哩かと思へるあの齒痛に——時間空間の觀念を亂すあの齒痛に——惱まされて居た折、初めて松江て顎無し地藏のことを聞いたのてあつた。その時思ひ遣りの深い或る友が斯う言つた。——

『齒痛を病む者は顎無し地藏に祈願する。顎無し地藏は隱岐に居られるが、出雲の人達はそれへ祈願する。治ると、宍道湖か、川か、海か、或は流れ川へ行つて、梨子（ナシ）

を十二、十二ヶ月の月々に一つづつ流す。水の流れがそれを皆んな海を越えて隱岐へ持つて行つて呉れると信じて居る。

『ところて、アゴナシヂザウといふは顎の無い地藏といふことてある。といふのは、その地藏はその或る前生に下顎に非常な齒痛を病まれ、苦しさの餘りその顎を裂取り、それを投げ棄て、そして死んてしまはれたといふことだから。それからその地藏は菩薩になられた。それて隱岐の者共は顎の無いその像を造つた。そして齒痛を病む者はみんな隱岐のその地藏に祈願する』

この話は面白かつた。自分は、それに必要な勇氣と現世の後累に對する虛心とを缺いては居るが、顎無し地藏がされたやうにしたいといふ强い希望は一度ならず感じたからてあつた。その上、この傳說は齒痛に對して如何にも人情のある甚深な理解を示し、またその犧牲者に對して如何にも廣い同情をほのめかして居るので、自分は幾分か慰められた氣がした。

にも拘らず自分は顎無し地藏を見には行かなかつた。見ようにも顎無し地藏はもう居られぬといふことが判つたからである。その消息は、或る晩、友人が齎らしたのてある。そ

れは松江の士族て、今隱岐に居着いて暮して居る年の若い警察官と、その細君てあつた。二人は夜明け前に出發して、途中三十二個處も早瀨を涉つて、自分等に會ひに島を横斷して歩いて來たのてあつた。細君はやつと十九て非常にほつそりした可愛らしい女てあつたが、それてもその長の非道い旅行に疲れた様子はして居なかつた。

その有名な地藏に就いて知つた事は斯うてあつた。頸無し地藏といふ名はその本當の名のアゴナホシヂザウ卽ち『顎治ほし地藏』を俗民が言ひ訛つたのてある。その像の安置してあつた小寺は火事て焚けて、その像も一緒に焚けてしまつた。たゞ、像の下の方の一と破片だけ、或る年寄の百姓女が今恭しく保存して居る。佛教が國教て無くなつた爲めに、隱岐の國てのその信仰の資源が全く絶やされたので、その寺を再建することが出來ぬ。だが郡萬目里の百姓共はそのお寺の在つた處へ、その前へ鳥居を立て、小さな神道のミヤを建てた。そしてその宮て今ても皆んな頸無し地藏への祈願をする。

この最後の奇妙な事實は加賀の潛戸て、地藏の像の前に建つて居るのを見た小さな鳥居を懷ひ出させた。西部日本の斯ういふ遠隔な地方ては、古昔日本の他の部分て佛教が神道の諸神を併呑したと丁度同じに、今は神道が佛教の通俗な諸佛を我がものにして居るのてある。

二〇

自分は津井の池と玉若酢神社とへは、この二つの名所は船て行かれるから、行つた。ところが津井の池は大いに自分を失望させた。其處への路は、殆んど全く垂直な絶壁を爲して居る恐ろしく危險な海岸に沿うて居るので、極く穩やかな天氣の折て無ければ行かれぬ。が、海は見事に澄んてゐて、水面下非常な深さの處にある物體を眼て見分けることが出來る。絶壁に隨いて一時間許り行くと、そこの濱邊は全く小さな圓い漂石だけて成つて居る入江のやうな處へ着く。その漂石は長い畝になつて居て、その畝の外側の緣は、寄せては引く浪の度毎に小銃の一齊射擊の如きガチャガチャといふ音を立ててあちこちと轉がつて、いつも動いて居る。動く石の球のこの畝の上へ登るのは頗る氣持が惡るい。が、上がつてからたゞ二十碼ばかり歩きさへすれば、三方木の茂つた小山に取圍まれて津井の池が見える。淡水の大きな水溜りといつた程のもので、幅は五十碼はあらうか、別に驚くべき點は何も無い。水底は——たゞ泥土と小石とだけて——岩は一つも見えぬ。この池の何處かが仔馬一匹溺らすに足る程いつか深かつたとは信じ難い。自分は深さを試しに向岸まて泳い

て見たかつたが、そのことを言ひ出しただけて早や船頭達の感情を害した。此池は神様の池て、眼に見えぬ怪物が守護をして居るから、それへ入るのは不敬てあり危險てあるといふのてある。自分は之に對して地方的觀念を尊重せざるを得ぬ氣がしたから、馬蹄石は何處にあるのかと訊ねるだけて甘んじた。船頭共は池の西側の小山を指さした。その指示は傳說とは符合しないのてある。その天然その儘の山の横腹には何等人間の勞働の痕跡をも發見することが出來なかつた。確に其處から數哩以内には人間の住み家は無かつた。それは見るも忌はしい荒涼を極めた[註]場處てあつた。

註、互に遠く距てずに池が二つある。自分が行つたのは、ヲイケ即ち「雄池」で、も一つのはメイケ即ち「雌池」といふのであつた。

日本を旅行する人には名所の評判を當てにして多くを期待するのは愚てある。名所の大多數に附隨して居る興味は全く想像力の行使に賴る。そして、そんな想像力を行使する能不能はまた此國の歷史と神話とに通じて居るか居ないかに賴る。圓岡や岩石や樹木の根株が、幾百年間、單にそれに關する地方傳說の爲めに、百姓共の崇敬の目的物となり來たつ

て居るのてある。毀れた鐵の釜だとか、綠青に蔽はれた唐金の鏡だとか、錆びた刀の身の破片だとか、赤い陶器のかけらだとかが、それが保存されて居る社寺へ幾代の巡禮者の足を惹き來たつて居るのてある。自分が參詣した方々の小さな寺て、そこの寺寶はと見ると、お盆一杯に載せた小石てあつた。初めてそんな小石を見た時自分は、その小石一個一個に日本字て貼札がしてあつたから、其處の僧侶が地質學か鑛物學を研究して居るのだらうと思つた。能く見て見ると、その石そのものは、たゞその附近の岩石の標本としても、絶對に無價値なものてあつた。然し其處の僧侶や子僧がその石總ての一つ一つに就いて語り得る物語は面白いどころのものては無かつた。その石は、實際、佛教的傳說の連禱を吟誦するに使ふ粗末な數珠玉の用を爲して居るのてあつた。

津井の池の經驗後自分は下西村て何等異常な物を目にしようと期待する理由は無かつた。ところが今度は自分は考違をしてゐたので愉快てあつた。下西村といふは西鄉から船て一時間足らずて行ける小綺麗な漁村てある。船は荒れては居るが美くしい海岸に沿うて行くと、古昔はその上に堅固な城があつた、御城山といふ、角を截り取つた妙な形の小山の前を通る。其處には今はただ松の木に取圍まれた小さな神社があるだけてある。下西村とい

ふその小村から玉若酢神社までは、歩いて二十分、稻田と野菜畠の間の非常にてこぼこな途を通つて行かねばならぬ。だが、その神社の位置は、その神聖な木立に取巻かれて、色んな色の山脈が縁取して居る風景の中心にあつて、うつとりする程印象的である。その門前に、物は嘗ては佛寺であつたらしく思はれる。今は隱岐て一番大きな神社である。その門前に、高さは著しいものては無いが、周圍は實に驚くべき有名な杉の木がある。地面から二碼の處てその周圍が四十五呎ある。その杉がこの聖地へその名を與へて居るのてある。すなはち隱岐の百姓は決して玉若酢神社とは言はずに、ただ『オホスギ』（大杉）と言つて居る。

口碑の言ふ所に據ると、此木は八百餘年前或る尼が植えたのである。そしてこの木の材木て造つた箸て物を食ふ者は決して齒痛を病まず、且つ非常な高齡まて生きるといふ。

註。或る木は齒痛を治す力があると想はれて居ることに就いて言へば、柳の木に就いて妙な迷信があることを書いてもよからう。齒痛を病む者は柳の木へ時々針を刺す。その木の靈が痛いので齒痛治醫の力を行はざるを得ぬやうになると信じてである。しかし隱岐で之を實行して居るといふ記錄は自分は一つも發見し得なかつた。

二一

後醍醐天皇の御靈を祀つた神社は中の島の別府にある。別府は半月形に連なつた小山の裾の、入江を緣取つて居る草葺田舍家の長い一本街路から成つて居る繪に見るやうな美くしい漁村てある。此處の風俗の純朴と保健的な全くの貧窮とは、隱岐にしても、實に珍らしい程てある。他國人を泊める旅籠屋風の家が一軒ある。其處ては茶を出さずに素湯を出し、菓子を出さずに乾豆を出し、米を食はせずに黍を食はす。が然し、茶が無いといふ事は米が無いといふ事よりも意味が深い。が、別府の者は、その強壯な容貌が實地證明して居るやうに、相當な滋養に事缺いては居らぬ。船が海へ出て居る間に女や子供が耕やす小さな庭て出來る野菜が澤山あるし、それに魚類は豐富だからてある。佛寺は一宇も無いが、氏神の社がある。

後醍醐天皇の神社は入江の一端の黒木山と呼ぶ小山の頂上に在る。その小山は高い松の木に蔽はれて居て、そこへの途は甚だ嶮しいから、自分は辷ることの無い草鞋を穿くが宜からうと考へた。登つて見ると神社は小さな木造のミヤて、高さはやつと三呎、年月の爲

めに黒くなつて居る。その横の茂みの中に、もつと古い、他の宮の遺跡がある。何んの形にも刻んてない、そして何んの文字も彫つてない大きな石が二つ社前に置いてある。覗きこんて見たら、ぼろ〳〵に崩れさうな金屬の鏡と、竹を細くへいだものへ附けた煤けた紙の御幣と、赤い陶器の小さい御神酒徳利が二つと、それから一厘錢が一つ見えた。そこの大きな松の幹の間からして、その神々しい暗がりを貫き射す青い暖かい光りて見える、海岸と山と峰との愉快な瞥見があるだけて、他には何も見るものは無かつた。

かの善良な天皇が隱岐の百姓共の間に、御滯留になつて居たことを記念するものはこの見すぼらしい宮だけてある。が、鳥取縣の米子近くの五千石村といふ小村に、父君を慕うて配處へ供しようとして歿せられた天皇の御姫君ヒナコ内親王の記念に、目下義捐金てもつて立派な石の記念碑が建設中てある。内親王御永眠の場處近くに有名な栗の樹が一本ある。それに就いて斯んな話がある。天皇のこの姫君が御病氣の折栗をと乞ひ給うたので、幾つか奉つた。が、一つだけ手に取つて、それを一寸嚙んて御捨てになつた。それが根附いて堂々たる大木になつた。ところがその木に生る栗は皆んな小さな歯の痕のやうな痕が

譯者註。ヒナコ内親王に非ず。瓊子内親王なり。五千石村大字福市の安養寺は同内親王の開基と傳へらる。

譯者註

ある。日本の傳說ては、樹木すら君に對して忠てあつて、その忠誠の念を無言な色々な優しい方法て以て示さうと力めるからてある。そしてその木は『ハガタノクリ即ち『歯形の栗の木』と呼ばれて居る。

二二

隱岐見物に行く餘程以前に、竊盜といふやうな犯罪は、その小群島の人達は知つてゐない、品物を仕舞ひ込んて置く事は未だ嘗て必要と思はれたことが無い、天氣さへ好ければ住民はその家を天つ風に開放して眠る、といふ事を自分は聞いてゐたのてあつた。

ところが注意深い研究の後、この驚くべき叙述は餘程の程度まて眞實てあることを知つた。少くとも島前の群島には盜人は一人も居ない、そして、實際に犯罪は一つも無い。三萬〇百九十六人といふ人口のある島前島後全體を取締るのに十人の巡査て充分てある。巡査一人々々が數多の村をその監督の下に有つて居て、それを日を決めて規則正しく訪ねるのてある。ところが、どんなに長い間そのうちの或る村に居ないても、それに乘ずる者はあつたためしがないやうてある。巡査の仕事は大抵は衞生法規を勵行することと、報告書

を書くことに限られて居る。村の者は喧嘩もこれまで殆んどしないのだから、拘引の必要を見ることは滅多に無い。

島後の島だけにはこれまで一寸した竊盜があるので、隱岐のうちでも此處ばかりは盜人に對する用心をする。以前には監獄は無かつたものて、竊盜といふことは嘗て耳にしたことはなかつたのである。て、今も島後の者は、そんな罪を犯して此島て拘引された少數の者も隱岐生れの者ては無くて、本土から來た他國者だと主張して居る。西郷の港が現時の如き重要な地位を占めないうちは、竊盜は隱岐に無かつたものといふ事は、是は全く眞實らしい。西部日本の全商業が、帝國の他の部分との蒸汽船の交通の迅速な發達の爲め、增進をした。そして西郷港はその新狀態の爲めに、商業上には利する所あつたが、道德上には損したらしく思へるのである。

ても國法の犯罪は、西郷に於てすら、今なほ驚く許りに少い。西郷には監獄がある。自分がその町に滯在中に其處に入つてゐたものはあつた。が、その在監者は（その如何なる形式のものも日本の國法て嚴禁してある）賭博とか、或はもつと輕い法令に違犯したとかいふやうな輕罪に處せられたものだけてあつた。重罪を犯すと、その犯罪者は隱岐ては罰しないて、出雲の松江にある大監獄へ送るのてある。

が然し、島前は申分無しの正直といふ古昔ながらの評判を完全に維持して居る。その三つの島のうちては、人間が記憶して居る範圍内ては、盜人はこれ迄一人も無い。また大した口論も無く、喧嘩も無く、どんな人間にも人生を悲慘ならしめることが何一つ無い。土地は未開て荒涼たるものてあるが、誰も彼も頗る氣持よく暮して行くことが出來る。食物は廉くて澤山あり、風俗習慣はその原始的單純を保つて居る。

二三

外國人の眼には出雲の住宅すら盜人に對するその防禦は馬鹿げて見える。この帝國の東部の諸市ては竹の棒て造つた忍び（シュボオ・ド・フリイズ）がへしが廣く用ひられて居るが、出雲てはこれは餘り見かけぬし、またそれが設けられて居る建物の眞に弱點たる處を守りはせぬ。外側の壁や垣についていへば、それはたゞ目隱しか裝飾的境界の用を爲すだけて、誰てもその上へ登れるのてある。その上また尋常普通の日本家屋へは、誰ても懷小刀一挺て道を切開いて入つて行くことが出來る。アマドは柔い木て造つた橫へ一と引つ張りに抵抗の出來る錠は無いく破れるものてあるし、出雲の大抵な家ては力强い

のである。尤も日本人自らもその木造の板壁が夜盗に對して無效な事を充分知つて居るから、その費用の出せる者は皆んなクラを建てる。クラといふは非常に厚い土の壁があり、素敵に大きな海老錠で締る狹い重い戸があり、屋根に近く高い處に、鐵棒の棧のある非常に小さな窓が一つある、火に耐へ且つ（日本では）殆んど夜盗に耐へる重い小さな建物である。クラは白く塗つてあつて外觀は甚だ小綺麗である。が然し徹び易くもあり暗くもあるから住宅には使用出來ないもので、たゞ貴重品の貯藏所たる用を爲すだけである。クラの物を盗むのは容易ては無い。

が、邸内に立派な番犬が居てもすればいざ知らず、出雲の住家へ『どろばうに』入るには骨は折れぬ。盗人はその計畫の途に横たはる困難は、入（はい）り終せた後に遭遇しさうな事柄だけだといふことを知つて居る。その困難を考へて居るから、盗人は普通刀を携へて居る。

が然し、盗人は刀の使用を必要とするやうな危地に身を置くことは欲しない。そこでそんな不快な萬一を避けんが爲めに魔法の助を藉りる。

邸内をあるき廻つてタラヒ——一種のタッブ——を探す。一つ見つけると、庭の或る處て口にしがたい或る動作をやつて、裏返しにした盥て其處を蔽ふ。これが出來れば不思議

な眠がその家の者總てを襲ひ、自分の好きなどんな物でも、音も聞かれず姿も見られずに、持逃げることが出來ると信じて居る。

が、出雲の家では誰もその魔法をほどく魔法を知つて居る。毎晩、休む前に、用心深い家婦はハウチヤウ（臺所用のナイフ）が臺所の床板の上に置いてあつて、それへカナダラヒ（眞鍮製の洗ひ鉢）がかぶせてあつて、その裏返しにして載せてあるかどうかを確める。この立てぬ藁製のサンダルが片足分、これ亦裏返しにして載せてあるのみならず、盗人に——假令や姿を見られず一寸した魔術は盗人の魔力を無效ならしめるのみならず、盗人に——假令や姿を見られず音を聞きつけられずに家に入り終せても——何物も持ち去ることを得ざらしめるものと家婦は信じて居る。が、實際非常に疲れてても居なければ、家婦は晩に雨戸を締める前に、盥が家の中へ取入れてあるかどうかをも注意して見るのである。

さういふ（善良な家婦が主張する所の豫防の）手段を怠つたが爲めに、若しくはさういふ手段を講じたにも拘らず、一家の者が眠つて居る間にその家へ盗人が入ると、翌朝早くその夜盗の足跡の穿鑿をして、その足跡一つ一つへ灸（註）をすゑる。斯うやると、その夜盗の足が遠くへ走れぬ程に痛くなり、容易く警官に捕へられると望まれ、或は信じられて居る。

註。モクサは英語のマグワアト・プラントの日本名モエクサ卽ちモグサ（燃える草）の訛である。その纖

維の小さく圓錐形にしたのを漢法に據つて燒灼に用ひるのである。その小さな圓錐形を患者の皮膚の上へ置いておいて、火をつけ、盡きるまで燃ゆるに委す。その結果は深い痕になる。モクサは醫治に用ふるのみならずいたづら子の罰にも用ひる。これに就いてはチエンバレン教授の「日本のことども」のうちにあるあの興味深い註を一讀されたい。

二四

自分がオコリ（瘧卽ち間歇熱）、その輕い種類のは或る季節に或る地方に流行るが、そのオコリの原因に就いての異常な迷信を初めて耳にしたのは隱岐に居た時であつた。が、この妙な信仰は、出雲及び山陰道の多くの地方に、古くからある信仰だといふことを、後に知つた。これはあらゆる神祕を說明するのに佛敎を用ひた、その用ひ方の珍らしい一例である。

オコリはガキボトケ卽ち飢餓に苦しんで居る精靈が起こすのだと言はれて居る。嚴密に云へばガキボトケは印度佛敎のプレタで、卽ち永久の飢渴の苦界たる餓鬼道に止まるやう處罰された靈魂である。が、日本佛敎では、ガキといふ名は、生存者中にそのものを記憶

して居る者が一人も無い、從つておきまりの食物や茶の供物をして呉れる者の無い靈魂にも與へられて居る。

さういふ靈魂は苦しいから、生者の體內へ入つて暖みと滋養とを得ようとする。ガキにこの次に餓鬼が暖くなると、烈しい熱を感ずる。自分では嫌に思つて居る、その宿主のお蔭で暖たまつて滋養を吸ひ取つてしまうとその餓鬼は出て行く。て、熱は一時歇む。だが別な日に、丁度同じ刻限に、餓鬼は歸つて來るので、その犧牲者はその取つ附く奴が暖くなつて、その餓を滿足してしまふ迄は震へたり燃えたりしなければならぬ。その患者へ毎日遣つて來る餓鬼もあり、一日置きに或はもつと間遠にも遣つて來る餓鬼もある。簡單に言へば、如何なる種類の間歇熱も、その發作は餓鬼が居るからて、發作々々の間はそれが居ないからだと說明されて居るのである。

二五

ホトケ（これは[註]レボトケ、ガキボトケとかいふやうな複合詞てはボトケとなる）に就

いては言ふも不思議な事がある。

註。ヌレボトケ「濡れ佛」。雨風に曝されて居る佛像をいふ。

ホトケといふ語は佛陀を意味する。

ホトケといふ語はまた——立派な生涯を送れば死者の靈は佛陀の道に入るか、或は佛陀に成るかすると信ぜられて居るから——死者の靈をも意味する。

ホトケといふ語は、婉曲な言ひ方から、その上また死骸をも意味するやうになつて居る。だからホトケヅクリといふ動詞は『物凄い顔をして居る』、死んで長い間經つた人のやうな顔をして居る、といふ意味を有つて居る。

それからホトケサンといふ語は——ホトケサンは『佛様』——眼の瞳子に映つて見える顔の映像に與へて居る名である。法華經の佛世尊では無く、我々銘々の中に住まつて居られる彼の小さな佛——卽ち靈(注)——である。

註。民間傳說に據れば、神或は龍の子は左右とも眼に佛が二つづつ見える。日本の物語歌の或ものに見える、それに詠まれて居る、勇士が眼に四つ佛を有つてゐたとあるのは、その眼が左右とも二重瞳子であつたことをいふのである。

ロウゼッテイは『眺めて我は汝が心、汝が眼の影に見ぬ』と歌つた。東洋思想は正しくその逆である。日本の戀人は『眺めて汝が眼の影に、我が有つ佛を我は見ぬ』と言つたであらう。

斯くも奇妙な信仰(譯者注)に關しての心靈學說は何うしてあるか。斯うしてもあらうかと自分は思ふ。卽ち、靈はそれ自らの體内に在つてはいつも眼に見えずに居るものであるが、妖術者の鏡に映るが如くに、他人の眼にその姿を映すことはある。己が愛する女の眼を凝視して、その女の魂を見分けようとしても無益である。その眼には、透いて己が魂の影だけ見えるのである。その向はたゞ全く神祕て——無窮に達する。

が、斯ういふ事は眞理では無いか。自我は、ショオペンハウエルが驚嘆すべくも述べて居るやうに、意識の暗黑點なので、恰も視神經が眼に入る點は、物が見えぬのと同じてある。我々は自己を他人でだけ見るのてある。他人を通じて初めて我々は我々の如何なるものたるかを朧氣に察するのである。それて、他の者を最も深く愛して居るといふことに於て、つまり自分自身を愛して居るのては無いか。我々の人格と稱するもの、個性と稱するものは普遍なる實在の無限無數の震動に他ならぬのては無いか。我々は總て、不可知的な

究極に於ては一つのものでは無いか。思慮すべからざる過去を有つて居る一つのものでは無いか。永遠の未來を有つて居る一つのものでは無いか。

譯者註。アアトマンの思想が恐らく多くの讀者の心の中に起こるであらう。（アアトマンとは、個々の靈がそれから出て來る最高の大靈の名）

二六

隱岐では、出雲てと同じて、小學校が古い迷信の多くを徐々てはあるが、確實に滅ぼしつゝある。漁師てすらその新時代の者はその父祖が信じて居たものを笑ふのてある。自分が通譯を通じて燒火山の靈火のことに就いて質問した、或る利發な若年の水夫から次記のやうな侮辱的な答を受けたのにはいさゝか驚いた。——『えゝ、私共が野蠻人てあつた時分には、そんな事を信じてゐたものてありますが、私共は今は開けて居ります！』

だが此男は幾分か時世に先んじて居たのてある。その男の村には、出雲の何處にも殆んど匹敵を見ぬ程度にまて狐の迷信が流行つて居ることを自分は發見した。その村の來歷は

餘程妙てあつた。記憶の及ばぬ太古からして、其處はキツネモチの部落だと評判されて居たのてある。言ひ換へると、其處の住民は悉く魔力を有つた狐の持主てあると一般に信じられて居り、また多分自分共もさう信じて居たのてある。それて皆んなが同樣に狐持なのだから、一緒に飮み食ひも出來、困らずに御互同志の間て嫁婿の取り遣りが出來たのてあつた。近處の百姓共は彼等を氣味わるく恐ろしがつて、理窟に叶つたことても叶はぬことても、彼等の要求に從つた。狐持は非常に繁昌した。ところが二十年許り前に出雲からの他國者が彼等の村に住みついた。その男は根氣が好く、恰悧て、また多少の資本金を有つて居つた。地面を買ひ、いろんな事に拔け目なく資本を投じて、驚く許り短日月のうちに其處ての一番の金持になつた。頗る立派な神社を建てて之をその村へ寄附した。だが、本當に人望のある人になることを妨げる故障がたつた一つあつた。狐持ては無く、また狐は嫌だと言つたことさへあつたからてある。他の者共と異つて居るといふ此事が村に不和を生む惧れとなつた。殊に此男はその子供を他國共へ片附け、斯くて非狐持部落といつたやうなものを狐持共の眞ん中へ造り出したからてある。

そこて餘程前から狐持共はその過剩な魔物を、此男に無理に有たせようとして居る。月の無い夜、此男の住宅の門のあたりに影が忍びあるいて、斯う小聲て言ふ、——『歸れ！

今日から此處へ來るだ！』すると、土の障子が手荒く開かれて、怒つたその家の持主の聲が斯うきこえる、——『此處は嫌ひだ！戻れ！』[註]するとその影は逃げて行く。

註。千八百九十二年東京發行の一日本新聞紙は、島根をたづねた或る醫師の言を典據として、隱岐の人は人狐を信じて居りはせぬ、犬神を信じて居るのだと述べて居る。これは島根で殊に石見で屢〻使ふイヌガミモチといふ言葉を文字通りに考へて起きた間違である。それはキツネモチといふことを婉曲に言つただけのことである。イヌガミは即ちヒトギツネで、これはいろんな動物の姿に身を現ずるものと想はれて居る。

二七

菱浦には烏賊が無いし、いやな臭も全く無かつたから、自分は隱岐の他の何處よりも此處が面白かつた。だが、兎も角、菱浦は西郷よりも興味があつたらうと思ふ。その綺麗な小さな町の生活が特に古風であり、また機械といふものが輸入されて出雲や他の地方では殆んど滅びて居る古風な家庭産業が、今なほ菱浦には殘つて居る。仕事が大儀になると互に代り合つて、木綿の著物や絹の著物を織つて居る、薔薇色の娘達を見て居るのは愉快で

あつた。そんな平穩な古風な生活が總て開放されて人の見るに任してあるのだから、自分は好んでそれを眺め見た。それから他にも愉快な事があつた。それは其處の入江は水泳に絶好な場處であり、その海岸の興味ある處、何處へ行つても直ぐに乘せて行つて呉れるし、緣側からは波止場の石段へ緩やかな冷たい光りと碎ける入江の浪を——美くしい燐光を——眺めることが出來、また隱岐の母親がその赤ん坊を寢かさうとて、世界で一番古いねんねこ歌の一つを歌ふ聲を聞くことが出來るのであつた。斯う歌ふ、——

ねんねこ、お山の
　兎の子、
なぜまたお耳が
　長いやら、
おつかさんのおなかに
　居る時に、
枇杷の葉笹の葉

喰べたそな、
それてお耳が
長いそな。

その節が特に美はしくまた哀調を帯びて居て、出雲や日本の他の地方て、それと同じ言葉て歌ふ節とは全く異つて居つた。

或る朝、自分は別府へ行かうと思つて船を一艘傭つて、その日だけその宿屋を出ようとする間際に、宿の老主婦が自分の腕に觸つて叫んだ。『一寸お待ちなさい。葬式に行き逢ふのは善くありません』自分は角を振返つて見たら、岸に沿うてその行列の來るのが見えた。神葬て——子供の葬式てあつた。年の行かぬ子供が眞つ先きに神道の徽號を——小さな白い旗と、神木サカキの枝とを——手にして來た。そして棺の後にその母が歩んて居つた。若い百姓女て、大聲出して泣いて、そのお粗末な紺の著物の長袖て眼を拭いて居つた。すると自分の横に居た宿の老婦が斯う囁いた。『悲しんで居りますが、まだ年が若う御座いますから、屹度あの子はあの人の處へ戻つて來ませう』それは、自分のその善良な老主婦は信心深い佛教者てあつたから、その葬式は神道て營まれて居たのに、その母の信仰は

自分のと同じだと屹度思つて居たからてあらう。

二八

佛教には西洋人の信仰には全く無いところの不思議にも美くしい或る慰藉がある。その初めての子を亡くする年若い母親は、死んだその夜からして、その子が歸つて來る事を——夢だけにては無く、再び人間に身を現じて歸つて來る事を——少くとも祈り得るのてある。斯く祈りながら、その死んだいとし子の名の初めの一と文字を、その小さな死骸の手の裡に書くのてある。

幾月か經つて、女はまた母親になる。急いてその赤ん坊の花と柔かな手を檢べて見る。果して！だ。自分が書いたと同じ文字がそれに——その柔かな掌に薔薇と美しい母斑となつて——在る。そして戻つて來た魂が、生れた計りのその子の眼で、過ぎし昔の日のやうな眼附をして、母親を見る。

死を話題にして居る間だから、隱岐にも出雲にも在る原始的ではあるが、人心を動かす或る習慣に就いて――死後直ぐとその死者の名を呼ぶといふ習慣に就いて――語つても宜からう。呼ぶ理由は、その呼び聲が去り行く魂に聞こえるかも知れず、その爲め時には歸つて來ようといふ氣になるかも知れぬ、と考へられて居るからである。だからして母親が死ぬると、その子供が先づ第一にその母親の名を呼ばねばならぬ、それも子供みんなのうちで一番年若いのが（その子を一番可愛がつて居たから）眞つ先きに呼ばねばならぬ。それからその夫、それからその死者を愛して居た者皆んなが順番にその名を呼ぶのである。

それから氣絶したり又は何かの原因で無感覺になる者の名を聲高く呼ぶのがまた習慣である。そしてこの習慣の根柢を爲す奇妙な信仰がある。

殊に心痛或は悲嘆の餘り失神する者のうち、死の間際まで近寄るものが隨分多勢あるもので、それ等の人はいつも同じ經驗をするといふ話である。この信仰についての自分の問に答へて或る人が斯う言つた、『突然何處か他所へ行つて居て――たゞ疲勞はして居るが

――非常に愉快だ、といふ氣持がします。そして餘程遠方にある或るお寺へ參りたいといふ心になつて居ります。やがてのことそのお寺の前庭の門へ着きますと、門内にそのお寺が見えますが、それは驚くほど大きな美しいお寺であります。それからその門を潛つてお寺へ參らうと、その前庭へ入ります。ところが突然、友人が遙か後ろの方から自分の名を――それも非常に非常に熱心に――呼ぶ聲がきこえます。そこで後戻りすると、ひよいと正氣に返るのであります。少くとも自分の心で生きたいと思ふと、今申したやうになります。然し實際生きて行くことに飽いた者は、呼ぶ聲には耳を藉さずに、お寺の中へはいり込みます。その寺でどんな事が出來するものか、誰も知つて居りません、そのお寺へ入るものて、その友人の處へ歸つて來るものはありませんから。

『だから大聲立てて呼ぶのであります、氣絶した者の耳の穴へ。

『ところが、死ぬる者は皆んな、冥途へ行く前に、長野縣の信濃の國にある、善光寺といふ大きな寺へ一度お參りするといふことてあります。ところがそのお寺のぼんさんが說教をされる時にはいつも、その說教を聽きに本堂へ集つて居る、みんな頭へ白い布片を附けて居る靈魂がそのぼんさんには見えるといひます。だから氣絶した者の眼に見えるお寺は善光寺かも知れません。だが私には分りません」

自分は流罪になられた後鳥羽天皇の御墓參りをしようと思つて、菱浦から中の島の海士村へ船で行つた。途中の景色は美くしく、また自分が初めてこの群島を通り抜けた時に見たよりも輪廓が和らかであつた。海の中から突つ立つて居る小さな岩礁には海鷗や鵜が一杯に止つて居た。それが、櫂の長さも距離の無いくらゐ近く寄つても、船を殆んど何んとも思つて居なかつた。野育ちの禽獸が斯く人を恐れぬといふことは、獵銃を携へた觀光客がまだ訪はない、日本の斯んな僻遠の地を旅しての、一番氣持のいゝ印象の一つである。日本での初期の歐羅巴及び亞米利加の狩獵者は、單に物を殺すといふ我儘勝手な快樂の爲めに生き物を殺して、彼等が『獵鳥獵獸』だと考へて居る物を其處いら中から絶滅するのに何等の困難を見出さず、また何等悔恨の念を感じなかつたやうである。その手本を『青年日本』が今や眞似しつゝあるので、鳥類の絶滅は狩獵法でやつと不完全に阻止されて居るのである。幸ひにも政府は或る種の狩獵不德を妨止する爲め干渉を爲して居る。燕が日本の家の中で巢を造る習慣に眼を留めた或る畜生共が、昨年、何千羽といふ燕の皮をば誘

惑的な代價で買ひ求めようと申出た。その廣告の效果は頗る殘酷なものであつた。が、警官はその殺害を止めるやう早速通牒を受け、それを實行した。それと殆んど同じ頃、横濱の或る洋字新聞紙上に、ある『改宗した』漁師が、その漁師の仲間で佛教を信じて居る者共が生命を助けてやれと賴んだのに、龜を一匹殺せと外國人傳道者に勸められて殺したことをば、基督教感念の勝利だと公言してある、聖職に在る或る人からの手紙が載つて居た。

海士村は、極めて小さな村で、海から一聯の小丘に至る間の狹い野原の稻田の中に在る。上陸場から村まで約一哩の四分の一。それへ通じて居る狹い路は、村のはづれの處で、松の木に蔽はれた小山の裾を廻る。その小山に中々美くしい神社がある。小さくはあるが見事な建築で、石段と石敷きの步道とを通つて行けば達せられるのである。例の石の唐獅子と燈籠とがあり、社前には紙と女の髮毛との普通な簡單な供物がある。ところがその奉納物のうちに、今迄出雲で見たことの無い妙な物があるのに氣が付いた。それは竹で器用に造つた、綱も竿もちやんと附いて居る小さな井戶釣瓶であつた。百姓が雨乞をする時かういふのを此神社へ持つて來るのだと船頭が言つた。そこの神樣は諏訪大明神といふのであつた。

後鳥羽天皇が長者助九郎の屋敷にお住居になつて居たと稱せられて居るのは、この諏訪大明神が其處の氏神であるらしく思へる隣村であつた。助九郎の屋敷は殘つて居て、今なほその長者の後裔の所有であるが、その後裔なるものは頗る貧乏になつて居る。流罪になられた天皇が御使用になつたといふ茶碗や、此家族が保存して居るといふ御滯在の他の記念品を拜見したいと自分は乞うた。が、家に病人があつたが爲めその家へ入れて貰ふことは出來なかつた。そこでその家の庭を——一つの名所になつて居る、有名な池のある庭を——一瞥しただけであつた。

池は助九郎ノ池と呼ばれて居る。そして七百年の間その池の蛙が鳴くのを耳にしたものは無いといふ話である。

といふ理由は、後鳥羽天皇が或る夜その池の蛙が鳴くので御眠になれなかつたので、起きて外へ御出ましになつて『だまれ』と御命じになつた。そこでその蛙は今日に至るまで幾世紀の久しき、依然として無言て居るのてある。

池の近くにその當時大きな松の木が一本あつた。風の夜のその颯々の音が天皇の安眠を擾したてまつつた。そこて天皇はその松の木に向つて『靜かにせよ』と仰せになつた。そ[譯者註 暴風の折にも。]の爲めそれからといふもの、その木は一度も颯々の音を立てない、

譯者註。增鏡に「潮風のいとこちたく吹き來るを聞こしめして「我こそはにひしまもりよおきの海のあらきなみ風心して吹け」、「同じ世にまたすみのえの月や見ん今日こそよそにおきの島守」年もかへりぬ。所所浦々あはれなる事をのみ思しなげく」とある。

だがその木は無くなつて居る。殘つて居るものとてはその木材と皮との破片少しだけて、それは隱岐の古老が遺物として大切に保存して居る。その破片の一つを自分は西鄕の醫者の——他の處てその人の親切に就いて自分が述べたあの醫者の——客間の床て見せて貰つた。

天皇の御墓は村から歩いて十分許りの距離にある小山の山腹に在るのてある。松江の月照寺の壯大な古い庭にある松平家の墳墓の一番小さなものよりも、壯大といふ點に於て遙かに劣つては居るが、恐らくは貧乏な小さな隱岐の國が提供し得る最上のものであつたらう。だが、これは御墓の本來の在り場所では無い[譯者註]ので、明治六年に勅命によつて現今の位

譯者註。御墓はもと此處にあつたのである。明治六年御遺骨を攝津國水無瀨宮に遷され、今は此處は御火葬場址と稱せられ居る。

置へ移轉されたのである。黒く塗つた高い塀が、いや塀といふよりか太い杙の柵が、長さ百五十呎、幅五十呎許りの三段の平地に、卽ち三段の低い臺地（テレエス）に、なつて居る地面を取圍んて居る。その中は松の木で暗くなつて居る。この小さな最後の一番高い臺地の中央に御墓はあるので、水平に置いてある灰色の大きな平たい一枚石である。臺地から臺地へ石階を三四段登るので、門から御墓まで石敷の狹い歩道がついて居る。その門口、これは一年にたつた一度參詣者に開くのであるが、その門口を少し入つた處に御墓に面して鳥居が一つあつて、一番上の臺地の前に石燈籠が一對ある。總じて頗る質素である。が、一種の感銘を與へる力を有つて居る。其處の靜けさを破るものはたゞ蟬の疳高い叫びと、あの奇妙な小さな蟲の——その啼聲は巫女がその神舞（かみまひ）に打ち振る小さな鈴のチリンチリンといふ音と丁度同じな鈴蟲の——リンリン擧く音とだけてある。

三一

菱浦へ二度目に行つた折には、自分は約八日滯在した。だが、浦鄕にはたゞ三日居た。浦鄕は行つて見たら滯留するには面白味の少い處てあつた、——其處の臭が西鄕のよりも

少しても强いからといふ爲めては無くて、やがて逃べる他の理由の爲めてあつた。

西鄕へ寄港した外國軍艦は一艘だけては無く幾艘もあつたもので、英吉利や露西亞の海軍士官は、その姿をその町て幾度も見せて居るのてある。丈が高く、髮毛が美しく、巖疊てあつたから、隱岐の者は、西洋人は誰も彼も同じ身長て同じ顏色だと今も想つて居る。自分はその町て唯の一と晩ても泊つた最初の外國人てあつて、しかも二週間も滯在してゐたのである。が、自分は身體（からだ）が小さいし色は黑いし、おまけに日本人のやうな服裝（なり）をしてゐたから、普通の人達の間に餘り注意を惹き起こさなかつた。日本の何處かの邊鄙から來た、妙な顏附の日本人だといふ事實が一般に知れ渡つた後ても、其處の人達は全然何等の迷惑て、自分が外國人だといふ事實が一般に知れ渡つた後ても、其處の人達は全然何等の迷惑をも自分に感ぜしめなかつた。街路を步き廻つたり、入江を泳ぎ渡つたりする自分を見慣れてしまつたからてあつた。ところが浦鄕ては事が全く別てあつた。自分が最初其處へ上陸した時は、日本着物を着てゐたし、半ば顏を蔽ひ隱す非常に大きな出雲風の帽子をかぶつて居たして、どうにか人目を逃れ了せたのてある。自分が西鄕へ向けて去つた後て、西洋人が——實際來て居たのを知らずに居たのだと知つたに相違無い。といふのは自分の二度目の訪問は、加賀浦外、何處てても一度も自分が

起こしたことの無い程の、大騒ぎを起こしたからてある。

宿屋へ入る間も無く街路は、自分を見ようとする驚く計りの群集に全く塞がれてしまつた。その宿屋は不幸にも町角にあつたから直ぐに兩側から包圍された。自分は二階の大きな裏座敷へ案内された。すると疊の上へ坐るや否や、その大勢の者が、皆んな草履を階段の下で脫いて、少しも音を立てずにそつと二階へ上り始めた。禮儀正しいから部屋へ入りてみはしない。だが、四五人のものが入口から一度に顔を出し、お辭儀をし、にこりと笑ひ、じつと見て、それから階段に後から一杯詰めかけて居る者に讓る爲めに引き退るのてあつた。召使の者が自分に晝食を運んで來るのは容易な業てはなかつた。そのうち、街路を隔つた向側の家の二階座敷が見物人て詰つた計りては無い、自分の部屋が見渡されるー—北と東と南との——屋根といふ屋根が悉く無數の男と男の子とに占められた。それからまた多勢の少年が、自分の窓の下の廊下の上の狹い廂へ（どういふ風にしてか自分には想像も出來なかつたが）登りもし、三方にある自分の部屋の入口はどれもこれも人の顏て一杯になつた。すると瓦がずつて、いくたりか男の子が下へ落ちたが、誰も怪我したものは無かつたやうてある。そして奇怪極はまる事は、そんな素敵な體操の藝當を演じて居る間、死の靜けさがあつた事てある。その群集を現に眼て見て居なかつたなら、街路に人つ子一

人居ないのだと自分は想つたかも知れぬ。

亭主は叱りだした。が、叱つても駄目と知つて巡査を呼んだ。巡査は、此處の人達は一度も外國人を見たことが無いのだから許してやつて呉れと自分に乞うて、街路から追つ拂つて欲しいかと自分に尋ねた。しようと思へば小指一本上げただけて巡査は左う爲し得たことてあらう。だが、その光景が面白かつたから、その人達に去れとは命じないやう、然し、早や少しそれを損じもした程てあるから、日蔽の上へは登らないやう子供等に言つて貰ひさへすれば、と自分は賴んだ。巡査は非常に低い聲て話して、皆んなへ極めて有效に言つてきかせた。自分がそれから浦鄕に居た間、誰一人その日蔽に近寄ることもようしなかつた。一體日本の巡査はどんな新規なことにも一度以上口をきくことは決してしないて、それてゐて口をきけばいつも必ず效果を奏する。

が然し、一般の好奇心は少しも減ぜずに三日間續いた。浦鄕から自分が逃げ出さなかつたならもつと續いたてあらう。外出をするといつも後から大勢の者が、濱の砂利をゆすぶる波の音のやうにガラ〳〵と下駄の音を立てて、跟いて來る。が、その特殊の音のほかには、何の音もきこえなかつた。一ことも物を言ふものはなかつた。これは心的能力全部が見たいといふ念の激しさに緊張して口をきくことが不可能になつた爲めかどうか、それは

自分は斷定することは出來ぬ。だがそんなにも激しい好奇心に少しも亂暴といふ點は無かつた。許可無くして自分の部屋へ上がつて來るといふことを除いては、無禮に近いやうなことも決して無かつた。部屋へ入つて來るのも、如何にもおとなしく入つて來るので、その侵入者を咎めて欲しくない程であつた。とは言ふものゝ、三日に亘るそんな經驗は苦しかつた。暑さにも拘らず、眠つて居る間人に見て居て貰はぬやう、戸や窓を閉めなければならなかつた。自分の所有品に就いては全然心配は無かつた。窃盜は此島には無いからであつた。だが自分の身のまはりに斯く絶えず無言な群集を見る事は、しまひにはうるさいよりももつと惡るいものになつた。無邪氣ではあつたが、薄氣味が惡るかつた。自分が幽靈になつたやうな——聲の無い者共に取卷かれて、冥途へ新たに來たのでは無いかといふやうな——氣持にされたのである。

三二

日本人の生活には内密といふことが、どんな種類のものも殆んど全く無い。實際この國民間には、我々西洋人が内密と呼んで居るものが存在して居ないのである。人と人との生

活を仕切る紙の壁があるだけであり、戸は無くして横に辷る目隱があるだけであり、日中使用する錠も閂も無く、天氣が宜いと家の表側が、いや横側すらも、文字通りに取外づされて、家の内部が廣く空氣にも光線にも公衆の環視にも開放されるのである。富裕な人でも日中其表門を鎖しはせぬ。宿屋の中で、或は普通の住宅でも、他人の部屋へ入る前に誰も戸を敲くといふ事をせぬ。障子又は襖のほかに敲くべき物が何も無いので、それは敲けば必ず壞れる。そして紙の壁と日光との此世界では、誰も一緒に居る男や女を憚りもせず、恥づかしがりもせぬ。爲す事は總て、或る意味に於て、公に爲すのである。個人的慣習、特癖（もしあれば）、弱點、好き嫌ひ、愛するもの惡むもの、悉く誰にも分らずには居らぬ。惡德も美德も隱す事が出來ぬ。隱さうにも隱すべき場所が絶對に無いのである。そして此狀態がずつとの太古から續き來たつて居る。少くとも普通の幾百萬といふ人達には、人に見られずに暮すといふ事は考へも及ばぬ事であつたのである。日本では、人生に關する一切の事件を公衆の耳目に公開するといふ條件の下に初めて、氣持よくまた幸福に暮して行けるのである。といふ事は、西洋には全く存在して居ないやうな、異常な道德狀態であるといふ譯になるのである。日本人の性格の異常な妙味を、一般人民の無限に親切であることを、その本能的に禮儀正しいことを、批評嘲笑皮肉又は諷刺に耽る如何なる傾向も

日本人には無いことを、身自ら經驗して知つて居る者にだけ、これは完全に了解が出來るのである。自分の同輩を貶して自己の個性を發展せしめやうと努めるものは一人も無い。自己をえらい者のやうに見せようと試みるものは一人も無い。銘々の弱點が萬人に知られて居り、何物も隱すことも伴ることも出來ず、そしてつくり飾は一種の輕い氣狂としか人に思はれない社會にあつては、そんなことをしても何の效もないことであらう。

三三

松江の昔のサムラヒて、今隱岐の島に暮して居るものがある。彼の武人の大階級が廢止された時、その少數の機敏な者共は、風俗が昔のまゝ古風であつて、土地が低廉なこの小群島て運試しをやつて見ようと決心した。幾人も成功した——この島ては人間が心底から正直て風俗が淳朴な爲めてあつたらう。といふのは、經驗のある商賣人と競爭しなければならぬといふと、他處てはどんな商賣にもサムラヒは滅多に成功し得なかつたからてある。失敗した者もあるが、暮して行けるほどの種々な卑しい職業に從事することは出來た。封建時代のそんな老生存者のほかに、この帝國の斯んな非常に僻遠な貧乏な地方て、新

たな生活狀態に雄々しくも面と向つて居る、嘗ては高貴な家族の子達が——有名な家系の若樣やお孃樣が——幾人も隱岐に居るといふことを自分は知つた。一市の住民が嘗ては頭を下げた人の息女が稻田ての苦しい勞働を教はつて居つた。時代が異つて居たなら要職を望み得られた若人が、隱岐へイミンの忠實な下男となつて居つた。それからまた或る者は警官[注]となつて自己を幸運だと正當にも思惟して居るのてあつた。

註。日本の警官は殆んど全部、今は名をシゾクと呼ぶサムラヒ階級のものである。自分は世界で一番完全な警官だと考へてよろしいと思ふ。が、現今それに目立つて見えて居るあの素ばらしく立派な性質を一代經つた後、保持して居るであらうかどうか、それは疑はしい。大切なのはそのサムラヒ氣質である。

基督教國の銃劍が、利得といふ聖い動機の爲めに、日本に强ひた文明の彼の大變化は、最近の社會崩解の種々な危險よりも、もつと大きな種々な危險に陷らないやうに、此帝國をまだ救ふことは疑を容れぬ。が然し、その變化は無慙なほど突然なものてあつた。英吉利の地面有ちの上流社會がその收入を奪はれた結果を想像して見ても、それと似寄つた剝奪が日本のサムラヒに及ぼした結果は、之を精確に理解することは出來なからう。といふ譯は古昔の武人階級は禮儀の道と戰爭の術とだけしか知つて居なかつたからである。

それてそんな話を聞いて自分は、樂山神社の出雲での最後の大祭にあつた奇異な行列のことを考へずには居られなかつた。

三四

樂山といふは、其處て出來る光つた黄色い陶器と、其處に在る小さな神社とで知られて居るだけて、松江から小一里の、廣い稻田の向うの、木の茂つた小山の麓に眠つて居る小村てある。そしてその樂山神社の祭神は家康の孫てあり、松江の大名の祖先たる、直政てある。

松平家の人のうち、月照寺の古い寶に立派な庭で、石の龜や獅子に護られて、佛教の土地に永眠して居らるゝ方がある。然し、その長い家系の元祖の直政は、樂山に祀られて居る。そして出雲の百姓共は今猶、その宮の前て柏手打つて拜んて、その慈悲と庇護とを願つて居る。

さて以前は樂山神社の毎年のマツリ卽ち祭禮にその村社から松江の城へ直政のミヤを持つて來るのが慣習てあつた。おごそかな行列を立てて、城の地域の中心にある——石の獅

子や狐が居る、その崩れさうな庭が巨大な樹木て日蔭になつて居る、御城内稻荷大明神と楠松平稻荷大明神といふ——あの妙な古い一族守護の神社へそれを運び來たつたものてある。神道の式事が兩方の社殿て營まれてから、そのミヤは樂山へ行列て持ち歸るのてあつた。そしてこの年々の儀式はミユキ又はトギヨ、卽ち祖先來の家への祖先の『御幸』と呼ばれて居つた。

譯者註。樂山神社は其後松江城内千鳥公園に移され、松江神社と改稱。楠松平稻荷大明神の社は壞たれて今は無い。

ところがかの革命は一切のものを變じた。大名は無くなり、城は荒廢に陷り、サムラヒ階級は廢止されて所領を奪はれた。そこて直政公のミヤは三十年以上も松平の家へ御幸をしなかつた。

ところが少し前のこと、偶〻松江の或る老人達がラクザンマツリの舊慣を古に復へさうと考へた。そこてミユキがあつた。

直政公の宮は裝飾をし、幕を張つた傳馬船の中に安置し、川と掘割とを通つて、古昔大名が江戸へその年々の參勤に出かけたり、それから歸つたりする時、その松蔭道を通つた